

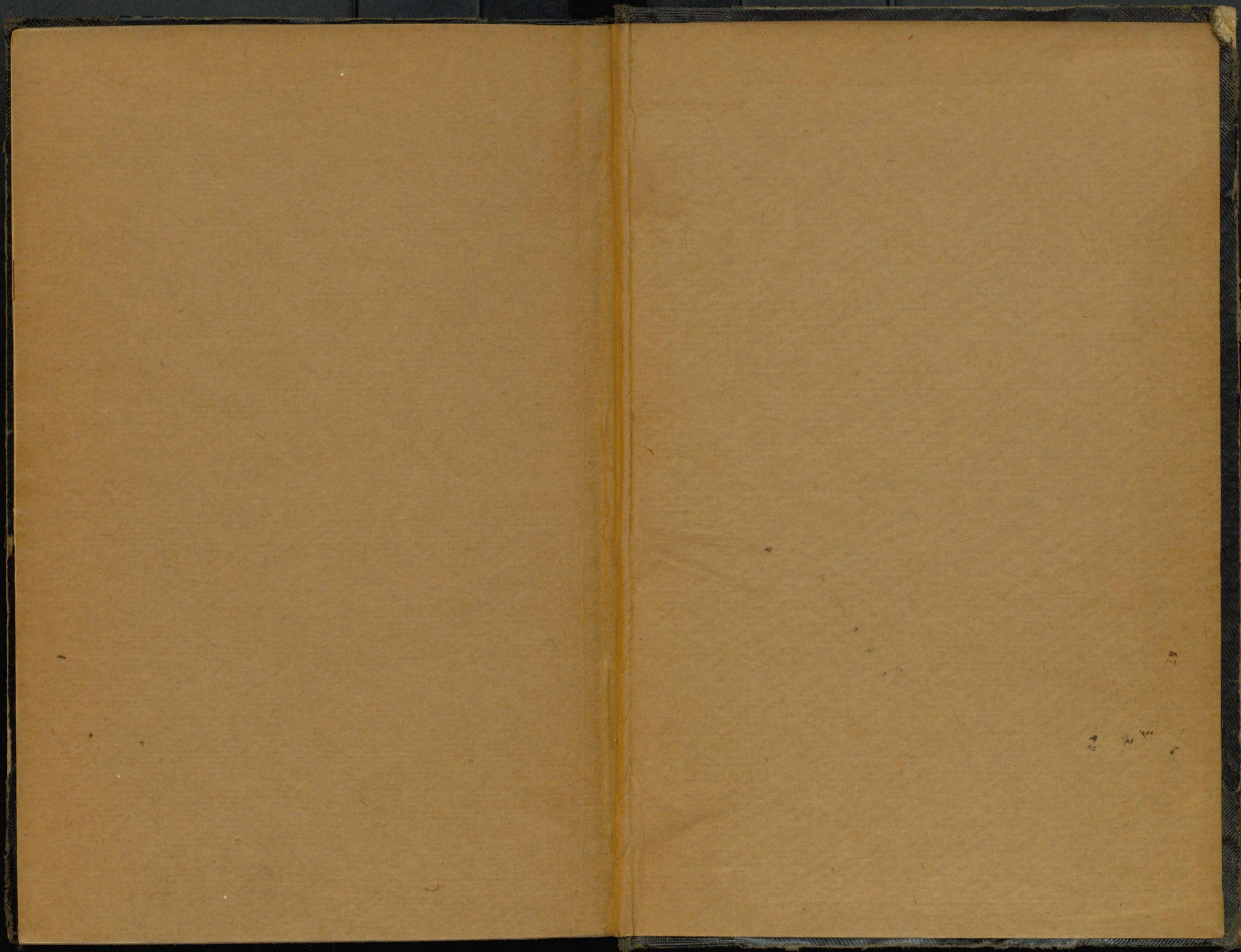
599-10



1200501529178



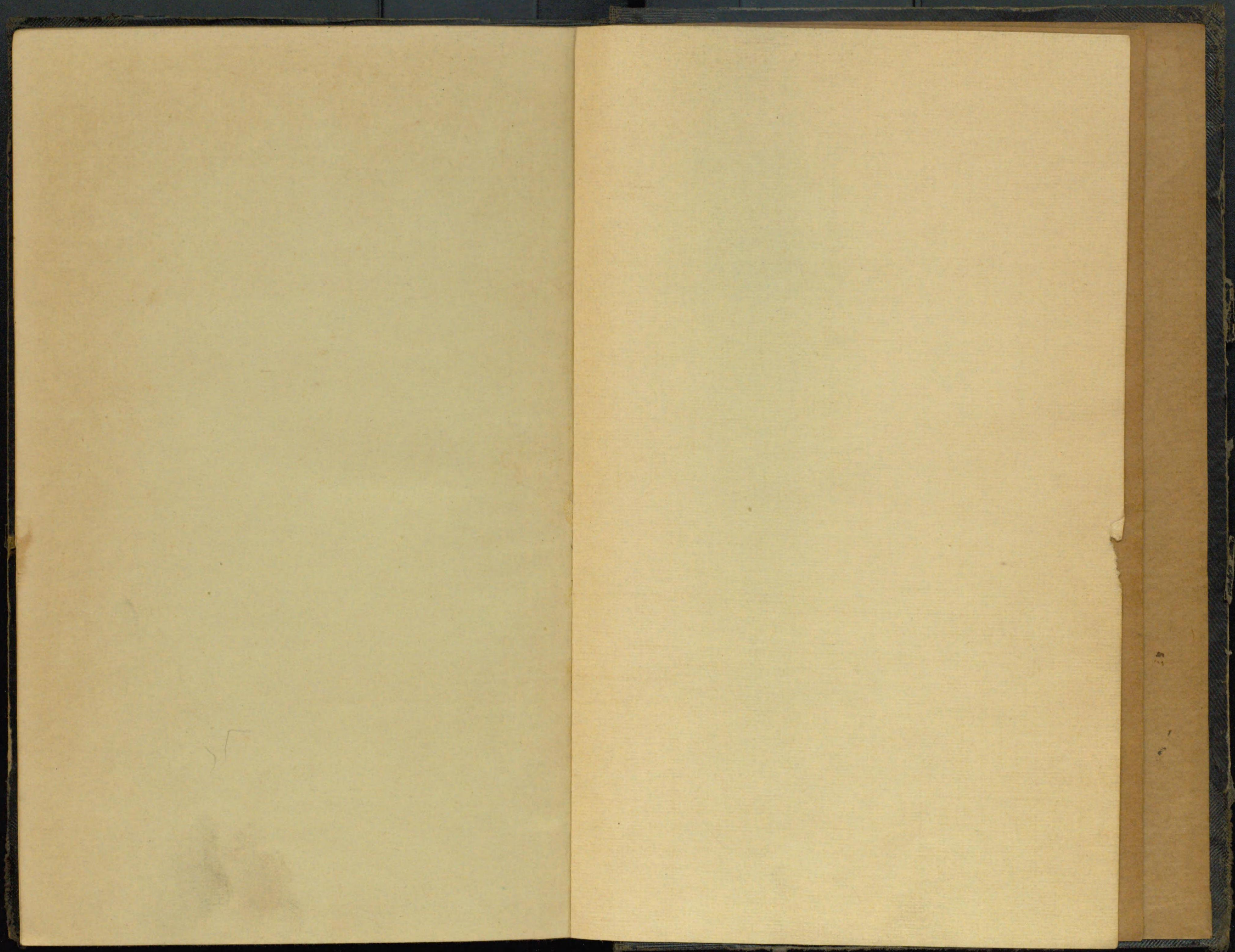
RE
7

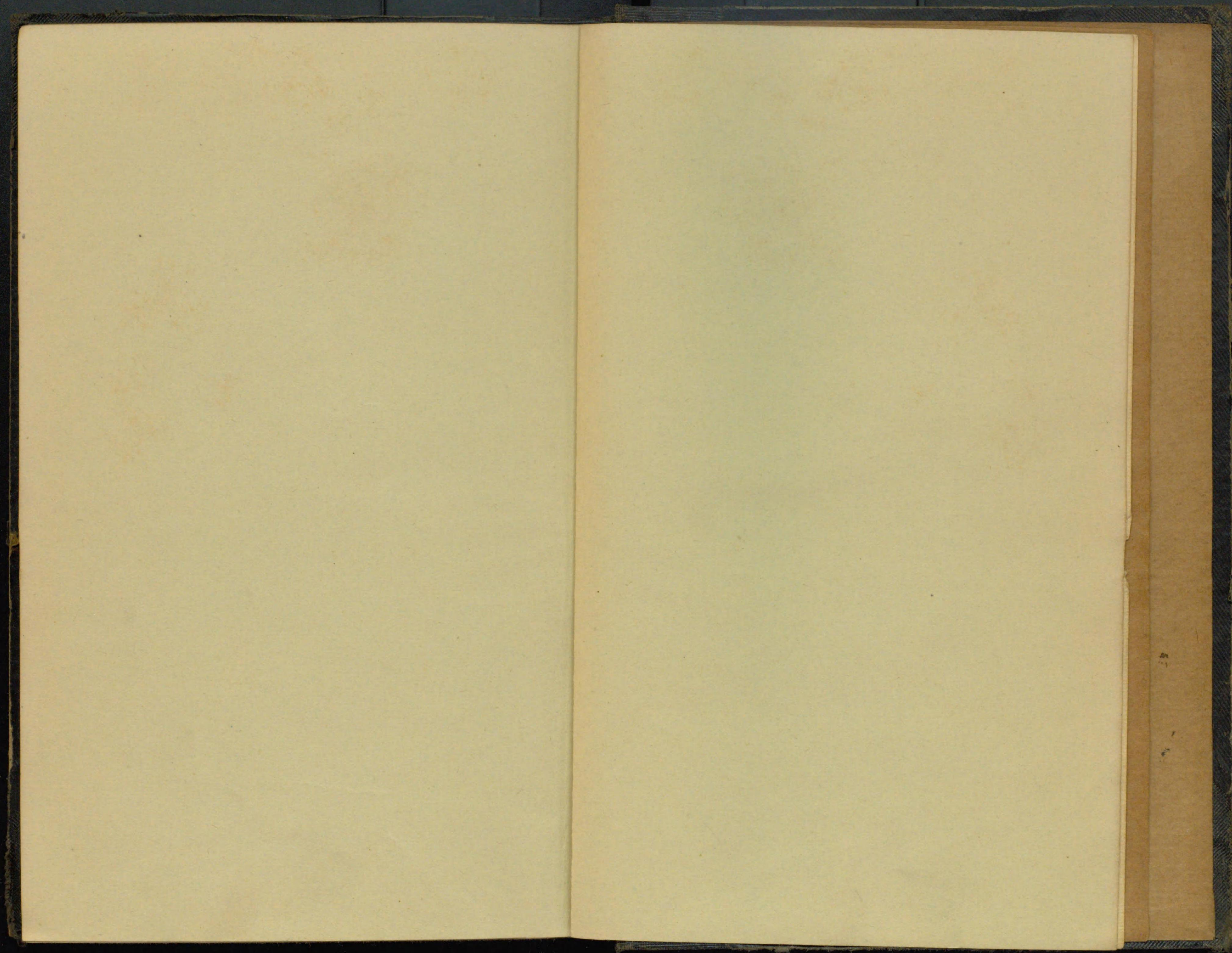


新社会

(1) ● 替不才一叩外
訊郎史村外

←
版閣文叢





東洋文庫

1 著イキスノロクホ
訳郎史村外

版閣文叢



599-10

譯者序

本書はエム・エヌ・ボクローフスキイの原著「ロシア史概要」の第一部および第二部（太古より十九世紀末までを含む）を譯出したものである。

原著者ボクローフスキイは古いポリシエウイクで、現共産アカデミーの長、モスクワ及びスウェルドロフ大學の教授、マルクス主義歴史理論の確立者として、ソヴェート・ロシアにおける學藝のこの方面での代表的權威である。

「ロシア史概要」はこの著者の數多くの述作の中でも革命後特に労働者のために書かれたもので、ハーリンの「Azбука Kommunizma」と併稱される名著として、非常に廣い範圍に讀まれてゐる。本書はそれのモスクワ國立出版所發行の第四版本に據つた。題を「ロシア社會史」と改めたのは、何よりも先づ在來の國家の歴史——政治史と見あやまれるのを惧れたのと、それが唯物史觀の立場からなされた科學的な歴史教科書——すなはち最も嚴密な意味における社會の歴史、社會史であ

二
ることを明かにしたかつた爲めである。上巻は第一部および第二部の「ブルジョア革命」まで、「國
民主義的革命」「労働運動」以下は之を下巻に譲ることとした。しかし下巻も速からず發行し得る
ことを約束することが出来るであらう。

尙ほこの「ロシア史概要」はすでに定本となつてゐる第一部および第二部の外に、今までのとこ
ろ、第三部第一分冊まで出てゐるのであるが、それは既に藏原惟人氏の譯で、「一九〇五年」と題し
て上巻が希望閣から出版されてゐる。本書と併せ讀みたい。

一九二九年五月

外村史郎

第一版序

「ロシア史概要」は同志ア・ハーリンの“Azбука Kommunizma”の讀者と同一の讀者に提供され
る。意識的なる労働者は××××とは何ぞやと云ふことのみでなく、またロシアとは何ぞやと云ふ
ことをも知らねばならぬ。現代ロシアの形成の歴史に獻げられたのが即ち本書である。

本書は讀者の側に如何なる先入的な歴史觀をも豫想してゐない、極言すれば、本書は、國民の幸
福の爲めに各種の「改革」をひたすら考へてゐる無数の×××と×××とを有する學校の歴史教科書に
よつて、その頭腦を骨抜きにされてゐないところの人間を豫想してゐる。此處でも材料は同様に、
若し欲するなら、「治世」に従つて排列されてゐる、——唯だ王冠と紫衣の人形の代りに、著者は眞
の帝王、イワン雷帝から最後の皇帝ニコライに至るまで、獨裁的にロシアを支配して來た帝王・資
本をとつた。

第一部は即ち第一の治世に——ロシアに於ける商業資本の發生とそれによつての權力の獲得の歴

史に獻げられてゐる。北方戦争とロシア帝國の形成とはロシア商業資本主義の完全なる成熟を表徴する。しかもそこには早くも、百年の後にその父親と同様に強大なそして狂暴な者となつた所の赤兒が、襁褓の中で泣き立ててゐた。商業資本のこの後繼者の治世に、即ち工業資本主義に、第二部は獻げられる。工業資本主義の成熟期はロシアに於ては十九世紀の後半期に相當する。二十世紀の初頭には既にロシア帝國主義が登場してゐる。それとそしてその顛覆とに第三部及び最後の第四部が獻げられるであらう。

吾々が見る如く、紙数は世紀の數に相應してゐない。ロシア史の最初の八世紀間がつぎの二世紀間と同じだけの場所を與へられてゐる、——最近二十年間は前の二世紀間と同じだけの頁を占めるであらう。著者はその習識慾に比して自由なる暇を持つことの遙かにすくない讀者を念頭に置いた、そしてそれ故に、叙述の明晰を害はずして可能であつた限り、簡潔を旨とした。

第二版序

第二版の本質的な特徴とも云ふべきは増補の二章と年表と附圖とである。増補の二章の中——最初の一章は或る『自然的限界』まで記述を進めてゐる。一八八一年の三月一日がその如きものであり得なかつたことは勿論である——それはロシアの國民的大衆の歴史上の日附であるよりも、どちらかと云へばツアーズムの歴史上の日附である。しかしロシアに於ける大衆的労働運動の最初の年である一八九六年は、正にその如きものであることが出来る。

増補の第二章は、著者の見るところに據れば、『更に詳細に』ロシアの歴史を研究せんとする者の爲めに、まつたく必要である、それが一定の階級に屬する——吾々に敵對の階級に屬する人々によつてではなく、或るどんなかの無形の理論家によつて書かれてゐるかのごとく考へることは、無邪氣であらう。ロシアの歴史文學を涉獵せんとせば、此處でも矢張り確かりと階級的見地に立つことが必要である。

第二版序

四

年表は普通の讀者の爲めではなく、主として、本書を教科書として利用する研究者の反復の爲めに豫定されてゐる。對照的に、ロシアの歴史的過程の内容を排列せる欄に並べて、『全世界史』と「ロシアの隣國」の二欄が設けてある。両者がロシア史そのものよりも三十倍以上に壓縮された概説の中に辛うじて席を得たことは云ふまでもない。

附圖の説明は其中に示されてある。

この機會を利用して、新たに増補された「労働運動」の一章に於て利用された數種のドキュメントを私が負うてゐる所の、同志エス・アー・ピオントコフスキイに謝意を表する。

エム・ベ

目次

第一版序 一

第二版序 三

譯者序 一

序論 歴史に關する一般的諸概念 三

何故に吾々は過去を知ることが必要であるか？ 世界の太古、地球上に於ける生物の漸次的な變化——誰にそして如何なる理由によつて、世界及び人間が變化しないと云ふ説は必要とされたか？——過去の智識は未來に對する權力を與へる——『歴史の法則』歴史的變遷の合法性の例證、昔と今の革命、農民の革命と労働者の革命——階級闘争の進展としての歴史、階級と經濟、史的唯物論——ブルジョアの及びプロレタリアの歴史觀——階級闘争の最も近き目的——自然の影響、氣候と文化の發達、海、山及び政治的發達——自然と經濟、森林、アメリカの植民——自然とロシアの經濟、ロシア及び西ヨーロッパの氣候、農業的及び工業的ロシア、その發達に於ける速度の相違、海と商業——人間の自然への從屬の程度、サハラに於けるフランスの植民、最近の園藝、歴史の基底に横たはるものは自然ではなく、労働力である。

第一部

目次

一

第一章 ロシヤ史の初世紀

數萬年前のロシヤ平原、氷河時代の人間——スキーフ人、スラヴ人、スラヴの植民——言語より見たる古代スラヴ人の經濟生活、『ノージ』、『テニョータ』、『ソハー』、『ジート』、『ミョード』——外國人の物語、ロシヤの傳説、ワリヤグ族とホザール族、『ロシヤの建國』——最初のロシヤの『君主達』——奴隸所有者と奴隸買買者、古代都市の住民、『ルス』、『ルスカヤ・ブラウダ』——裁判慣習——社會階級の構成、『ロスト』、『ザークブ』、階級闘争、『ルスカヤ・ブラウダ』に於けるその反映——十一—十二世紀のキエフの革命、民選議會制度——古代ロシヤの都市の衰微の原因、『十字軍』征遠、タ、イルの侵入、都市的ルスより村落的ルスへの轉向——都市的ルスの文化、『イーゴリ遠征物語』——年代記——宗教的信仰、『ルスの洗禮』、『階級的現象としてのキリスト教儀式の意義』、キリスト教及び異教共通の基礎としてのアニミズム、生活闘争の反映としてのアニミズム、キリスト教的アニミズムの記念物。

第二章 モスクワ國家の形成

ロシヤの封建制度、地主と農民、土地に對する住民の態度、大小の領主、農民の義務、『自然經濟』、商業と商人の地位——封建的君主國の形成、何故に統一はモスクワを中心として發生したか？ 交通路、人口密度、タ、イル族——正教々會、大僧正とタ、イル汗の同盟、教會とモスクワ公の同盟——統一の經濟的地盤、都市モスクワの成長、手工業者及び小商人の分出、ブルジョアジの形成。

第三章 モスクワとノオヴゴロドの闘争

ノオヴゴロドの地理的情勢、ザウオロチエ地方、毛皮及び銀、ノオヴゴロドの對ヨーロッパ關係、『下流』との關係——住民の構成要素、都市的デモクラシー、農奴的農民——ザウオロチエ地方の爲めのモスクワとノオヴゴロドの闘争、ノオヴゴロドの弱點とモスクワの強味、闘争の結果——モスクワ全ロシヤの商業的中心となる。

第四章 モスクワ封建制度の崩壊、商品經濟と農奴制度

市場の形成、外國貿易と貨幣——貨幣經濟と農民の狀態——バルシチナ、『貸付』、農奴經濟、修道院と大貴族、小地主——モスクワ國家に於ける階級闘争、政治文學、ベレスウエートフ、小地主と商業資本の握手——カザンとアストラハン、リウオーニヤ戰爭、莊園的土地所有の危機と一五六四年の變革、帝領とその階級的意義——掠奪的經濟、農民の逃亡、不作と饑饉——逃亡農民とモスクワ國家の南境地方の植民、かしこに於ける住民の構成要素、コサツク民國、モスクワ政府に對するその態度、革命的氣分の高揚、僭稱者ドミートリイ。

第五章 農 民 革 命

ゴドノーフに對する叛逆、ロシヤ移民とポーランドの地主、コサツク民間、僭稱者ドミートリイに關する眞と偽——ゴドノーフの軍隊と僭稱者ドミートリイ、狙撃隊、小地主的小貴族——僭稱者ドミートリイの勝利、彼の立法、負債奴隸と逃亡農民に關する勅令——僭稱者ドミートリイと商業資本、シユノイスキイの密約、ドミートリイの滅亡、商人的、大貴族的皇帝シユノイスキイ——南方ウクライナの叛亂、ポロトニコフと農民革命、叛軍の分裂とシユノイスキイの一時的勝利——第

目次

四

二のロシア革命、トシノ、都市の動搖—革命の階級的種々層、トシノのブルジョアの上層と商業資本、二重の衰切り、シユノイスキイの廢位と『トシノの皇帝』の逃亡、ブルジョアジー外國に求む—ポーランド軍とロシア有産階級の同盟、その覆滅—都市ブルジョアジーが革命及びポーランド軍隊との闘争に於て先頭に立つ、ミーニン、地主達の履傭、コサツク民團の上層の買収、コサツク民團の援助のもとにニジエゴロドの民軍がモスクワを占領する。ブルジョアジーの新同盟者の影響の結果としてのロマノフ家の候補者—ロマノフ君主國の階級的意義、帝王權と商業資本、『大商人』警察國家、正規軍—農奴制度の發達、都市に於ける商業資本の壓迫、十七世紀後半に於ける第二の叛亂、ラーヂンの亂、『狙撃隊暴動』—小ロシアの爲めの闘争、ウクライナの經濟的條件、ザボロージェ、『ウニヤ』、『ヨーロッパの革命、フメリニツキイとモスクワ國家。』

第六章 ロマノフ家の國家と教會分離

一五二

新國家の典型的特質—教會存在の經濟的意義、アニミズムと原始的貯蓄—教會と皇帝、『敬神』と商業資本、禁慾主義とその衰微—總主教管轄、そのツァーリズムとの闘争の企圖と顛覆—舊教會は分離派に去る、分離派の經濟的意義、その政治的役割。

第七章 北方戦争とロシア帝國

一六四

バルチック海の爲めの闘争、モスクワ國家の軍事的準備、ナルワ、ホルタワ及びニスタツト平和條約、ヨーロッパとアジアとを結合する大水路の北端の占領—商業的・官僚的國家の機構、中央及び地方の行政。地主の權力、人頭税と請負。

第二部

第八章 工業資本主義

一七三

商業資本より工業資本への過渡的形態、家内生産組織—工業、機械生産の特長—商業資本主義のその後の發展、商品交換の新對象、商業資本の外交政策、ロシアの七年戦争への参加—イギリスの産業革命、麥價およびロシアの莊園經濟、麥の輸出と露土戦争—英露同盟、大陸封鎖およびロシアに於ける工業資本主義の發展—保護政策、ロシアの紡績工業の發達—工業資本主義と農奴制度、内國市場の緩慢なる發達—外國市場の探求、ニコライ一世の軍國的帝國—この道におけるイギリスとロシアとの衝突、クリミア戦争—外國市場の探求は成功しなかつた、内國市場を擴張しなければならなかつた、一八六一年の農民改革、商業資本の影響、『土地を附しての解放』の意義—租税による壓迫の増大、賠償金、その他の義務—農村經濟の發達と改革後の工業。

第九章 農奴制國家

一八〇

蓄積の増大、皇帝の一族、その側近者、『フェヴオリツト』と皇帝の懺悔聽聞會—『ロマノフ家』一族の略史、ピョートル、エカテリナ一世、アンナとピロン、エリザヴェタ・ペトロヴナ、ピョートル三世、エカテリナ二世—エカテリナ二世の外交政策、ポーランド分割、その經濟的意義—パルウエル、彼の對内外政策、貴族階級との衝突と滅亡—アレクサンドル一世、『神聖同盟』と軍事植民、『ポーランド帝國』の占領—ニコライ一世、彼の政策の二重性、教育の振興と檢閲、『秘密委員會』と『義務』農民に關する法律—この二重性の經濟的條件、その結果としてのニコライ及

び彼の時代の貴族階級の偽善——農民改革の政治的結果、農奴制國家の龜裂、この最後のもの特色づけ、地主の權力——野蠻なる刑罰、拷問、管——官廳的秘密主義——官僚、ロシアに於けるその起源、秘書、その組織、『官等表』、その權力——改革と賄賂に對する鬭争、『新裁判』、何故それはブルジョアジーにとつて最も有利であつたか——地方自治改革、その階級的意義、地方權、地方自治機關の低劣な政治的役割。

第十章 革命的ブルジョアジー

革命的ブルジョアジーとは何か？ブルジョア社會に於けるインテリゲンチヤの役割、その情態の二重性、その政治的視角の狹隘——ロシア・ブルジョアジーの革命的遺産、その農奴經濟の發達との關係——ブガチョフの進出、彼の成功の原因、ブガチョフとコサツク民團、ブガチョフとウラルの鐵山勞働者、ブガチョフと農民階級、ブガチョフ叛亂のプログラム——彼の失敗の原因——パウエル、アレクサンドル一世、ニコライ、アレクサンドル二世時代の農民暴動——ブルジョア・インテリゲンチヤの最初の進出、共済組合——ラヂーシチエフ、農奴制度および皇帝の權力に對する彼の態度、經濟的發達の反映としてのラヂーシチエフの思想——スベランスキイ——十二月黨員、一八二二年後のロシアの士官階級、士官階級と知識階級——十二月黨員とブルジョアジー——十二月黨員のプログラム、『サユーズ・ブラゴデンストウイヤ』——共和的傾向、エス・ムラヴィヨフ、ベステリ、土地改革案と武裝的叛逆——アレクサンドル一世の死、皇室の危機、十二月黨員は進出を餘儀なくさる——彼等の戰術、ニコライの戰術、なぜ彼は勝利者たり得たか？十二月黨員と國民大衆——ロシアに於けるブルジョア革命の無力とその原因。

ロシア社會史概要

ロンドン預會史書要

序論

歴史に關する一般的諸概念



何故に吾々は過去を知ることが必要であるか？ 何が爲めに吾々は今から十年、百年、千年、一萬年前にあつたことを穿鑿するのか？ 寧ろ型の如く、何が今なされてゐるか、吾々の生活の據つて來る所の——何が吾々の周圍にあるかを知る方がよりよくなるか？

過去を吾々が研究するのは正にいま起つてゐることを理解せん爲めである。地上に於てはすべてのものが發達する、即ちすべてのものが變化する。數億萬年前、地球は、水蒸氣に包まれた、巨大なる赤熱せる球の形を呈してゐた。そしてその上には如何なる生物も存在しなかつた。また存在し得なかつた。數千萬年前地球上には既に生物が生まれてゐた。數百萬年前地球上には既に豊富なる

歴史に關する一般的諸概念

草木、大森林、水棲並びに陸棲の動物の多數があつた。しかしこの世界全體は今ある所のものと違つてゐた、がそれにも拘らず今ある所のものはすべて、不斷の變化の長い系列を経て、實にこの世界そのものから發達して來たのである。今日の植物、今日の動物は——數百萬年前地球上に存在した所のものの子孫である。

どうしてすべてかういふことは起つたか？「偶然」ではない。一定の諸法則に従つてである。しかし若しも吾々が生物を、それが今あるごときものとして、觀察するであらうならば、吾々はこれ等の法則を、即ちこれ等の變化の合法性を認め得ぬであらう。人々が地球の遠い過去を研究するまでは、數百萬年前に存在したところの動物および植物の發掘物を見出すまでは、學者たちは、今の世界全體が常にこのごときものであつた、それは一時に創られたと信じてゐた。百年前にはまだその反對を主張しようとしてゐた少數の研究者たちを人々は嗤つてゐた。しかしこれ等の學者たちは言つてゐた、地上の生物が巨大なる分量の年月の經過中に次第に發達して來たといふ一事は、今や自明のことと思はれる、と。

數百世紀以前に埋没して、そしてかくの如くして吾々の時代まで保存されて來た所の、古代の植

物および動物の世界の遺物に對する觀察が、如何にこれ等の變化が起つたかを示した。世界が七日間に創造されたといふお伽ばなしが跡方もなく粉碎された。そして今や何人も、學者でないまでもすこしでも教育のある人間ならば、動物および植物が常に、今吾々が彼等を見てゐるのと全く同様であつたと言はれて、信ずる者はないであらう。何人も書物から（都會に住んでゐる者は博物館についてそれを見ることが出来る）以前の動物および植物の世界が吾々のと違つてゐたこと、世界が巨大なる分量の時間の經過中絶えず變化を續けて來たこと、すべてのものが、勿論、今もなほ變化しつゝありまた變化するであらうことをよく知つてゐる。かくの如きは自然の法則である。

しかし世界は變化しないといふこと、及びすべてのものは一時に創造されたといふ説が長い間、學者によつても非學者によつても支持されてゐたのは意味のないことではなく、彼等の無智の爲めのみではない。この説は甚だ多くの人々に有利であつた。若しもこの世の中ですべてのものが一般に變化しないならば、然らば人間社會もまた變化しない。それもまた一度きり創られたのであり、それが今ある如き、その如きものとしてそれは常にあつたしまた常にあるであらう。さう往時は教へた。何故に人間社會が永久にそれがあつた如きものとして留まるであらうと人々に考へられること

が必要であつたか？ 往時の社會に於て一切の利益を壟斷してゐた人々にとつてそれが極めて有利であつたからである。その掌中に常に権力があり、富があつた人々は、常にかくあるべきである、富者および貴人が常に上層にあるであらう、が國民、労働者、農民が常に彼等の爲めに働き、常に彼等に仕へるであらうと信することを欲した。そこで彼等は自分自身に、が特にその支配下にある労働者および農民に、正にかくあるべきである、何物もそれ以外にはあり得ないと云ふことを信じさせようとした。

若しも地球の過去、動植物界の過去の研究、地質學および古生物學の研究が、世界は一時に創造されたそして變化しないと云ふ如き一つのお伽ばなしを粉碎したとせば、史學および考古學は、人間社會は常に此のごときものであつた、されば又常に此のごときものであるであらうと云ふ如きもう一つのお伽ばなしを粉碎しつゝある。人間は變化するまた變化するであらう、それは他の總てのものと同様である。或る種類の社會的秩序が崩壊する、その場所に新らしい秩序が発生する、等、等。これ等の變化の終局を吾々は豫見し又は豫想し得ない。しかし若しも吾々がこれ等の變化を數十年、數百年の長期に互つて觀察するであらうならば、吾々は彼等（變化）の合法性を理解し、こ

れ等の變化の法則を認識し得るであらう。そして假令吾々が例へば數千年後に人間社會がどうなるかをはつきり豫想し得ないとしても、吾々は如何にまた如何なる徑路を辿つて人間社會がこれ等の數千年間に變化するであらうかを知ることが出来る。未來を豫見し得る者はこの未來に對して支配權を持つ。何故なれば未來を豫見することによつて、吾々はそれに對して準備をなすことが出来る、未來の不幸を避ける爲めに、又はこの未來が吾々に齎らすであらう所の幸福をよりよく享樂する爲めに、適當な手段を講ずることが出来るから。知ることは——豫見することを意味する。豫見することは——爲し能ふこと若しくは支配することを意味する。過去の智識は吾々に、かくのごとくして、未來に對する權力を與へる。

正にこの故に過去を知ることが必要なのである。

しかし人間社會に行はれつゝある變革の合法性は、唯だ吾々が大なる分量の時間の經過中これ等の變革を觀察することによつてのみ認識し得るとしても、それは吾々が吾々の研究を是非とも最も遠い時代から始めなければならぬことを意味しない。吾々は逆の道によつてもすゝむことが出来る。それどころか、人間社會に行はれつゝある變革の合法性は、現在から遠い過去へと溯る時、

却つて容易に認められさへもする。

今起つてゐることを取りて見よ。今や全世界には革命が起つてゐる。労働者がブルジョアジーの権力、即ちこれ等の労働者を搾取しつゝある人々——換言すれば、彼等を利用して肥り、出来るだけ多く彼等を働かせ、がこの労働に對しては出来るだけ少く彼等に支拂つて、一方からは労働者によつて作られた貨物と、他方からは——彼がこの労働に對して受取るところの賃銀との間に存する一切の差額を着服しつゝある人々の権力を打倒すべく突進してゐる。では聞くが、搾取は現在にだけあつて、往時は貴人富豪は平民を搾取しなかつたか？ 否、搾取は常にあつた。工場、銀行、鐵道、等、等を有するブルジョア社會の今日の秩序が起る前に、封建社會があつた。農奴制度があつた。そして當時は工場主が労働者から彼等の生産したものを全部、それに對しては僅ばかりの端金を支拂つて、取つてゐたのでなく、地主が農民からその労働の結果を、それに對しては全く何物をも支拂はずに、取つてゐたのである。その當時にも搾取者に對する被搾取者の叛逆はあつたか？ その當時にも今日のごとき革命があつたか？ その當時にもあつた、しかし彼等は常に不成功であつた。何故か？ 何となれば農民はお互に相談し合ふことが出来なかつたから、自からを組織する

こと、即ち共同の計畫に従つて行動し得る一つの大きな全體を形づくることが出来なかつたから。何故さうであつたか？ 何となれば農民は各々が自分の土地で、比較的稀にしかお互に助け合ふことなくして働いてゐるからであり、一度自分の土地からの生産物を賣る時には、その時には既に相互に競争者として現はれるからである。野菜、乾草、麥、等、等が市場に少量であればあるほど、それ等のものは高價^{たか}く、それだけまた有利に各々の農民はこれ等すべてのものを賣ることが出来る。すべてこれ等のものが多量であればあるほど、すべてのものは安價^{やす}く、それだけまた各々の農民にとつてはその生産物に對する取り前がすくなくなる。農民の間には、かくて、すべての人間は共存でなければならぬ、すべて彼等は相互に關係づけられてゐると云ふ意識が發達し得ない、所謂、外國語を使つて言ふならば、ソリダリテイ（連帶）が發達し得なかつた。労働者は、それに反して工場内で、皆んな一緒に肘つき合はせて働いてゐる、絶えずその労働に於て他の者の助力を受ける。一人の労働者は他の者達なしには何事をも爲し得ない。すべての者が相互に助け合はなくてはならない。労働階級の内部には、かくて、農民の間に缺けてゐる連帶が發達する。正にこの故に労働者は農民よりもよりよく又より容易に組織化される。正にこの故に労働革命は往時にあつた

農民の叛亂よりも遙かに強力で又遙かに團結的である。農民は彼等の搾取者を打倒し得なかつた。農民の叛亂は常に不成功に終つた。農民は曾て權力を握ることに成功しなかつた。然るに労働者は既に世界の大国の一つに於て、即ちロシアに於て、權力を握つてゐる、かつ他のヨーロッパ諸國の全系列に於てこれに至るの途を歩みつゝある。

此の如く、今起こつてゐる事、若しくは比較的最近に起こつた事を觀察することによつて、吾々は歴史的變遷の中に合法性を認識する、即ち、歴史は一定の職業を有する人々に依つて進動せられ、かつ社會の如何なる階級が歴史を作るかに依つて、即ちそれ或は他の社會的變動を作り出すかに依つて變化するものであると云ふことである。國民の大衆が農民から成つてゐた時、吾々は歴史が、運動の先頭に労働者が立つてゐる今日とは異つた方向を取つてゐたことを見るのである。

今度は、然らば如何にしてこれ等の階級は構成されるか？ 何故に往時は生産が全部農民の手にあつたか、何故にその當時は麥或は亞麻或は獸毛が銘々自分の土地で働いてゐた村落から受取られたばかりでなく、同様にまた靴も、衣服もすべてそれ等のものが銘々自分の職場を持つて自分の家で働いてゐた所の個々の手工業者によつて作られ、それに反して吾々はいま製靴工場、出來合服の

大商店、等、等を持つてゐるのであるか？ 何故なら當時人間はすべてのものを自分の手で作らなければならなかつたからである。機械は存しなかつた、と云ふよりも殆んど存しなかつた。唯だ水力によつて動かされる機械、例へば、水車だけが在つた。それとても甚だすくなかつた。二百年前に人間は、最初は蒸氣によつて、次ぎには電氣及び火熱によつて動かされる機械、今日の石油その他の發動機を作り始めた。機械の出現と共に、あらゆる種類のもものが以前よりも遙かに大量に、遙かに迅速に生産されるやうになつた。一例を擧げるだけで十分である、棉花が手で精製されてゐた時代には、一フントの棉花を精製する爲めに労働の全一日が必要であつた、機械を使つて製してゐる今日は、一人の労働者が一日に一〇〇フントを精製することが出来る。

そこで銘々一人々々で働いてゐては損だと云ふことになつて來た、何故なら各々の労働者が機械を設備するわけには行かないから、で労働者は大衆をなしてこれ等の機械の周圍に集まり始めた。かくて大規模生産が起こり、工場が起こつた。これ等の機械を所有してゐた人々、企業家乃至資本家が亦一切の事業の主人ともなつた。機械を使つて労働する可能を労働者に與へることによつて、彼等はこの者たちの生産したものの全部を取上げ、さうして彼等にはそれに對して上に述べたやう

に、僅ばかりの端金を支拂つた。

かくして労働階級が構成された、彼は自宅に於てではなく、他人の家に於て、また自分の手ではなく、彼に屬しない所の機械を使つて労働した。無産階級が形成された。それは詰まり、それ或は他の社會階級の發生が何によつて説明されるか？ といふことだ。それは經濟が如何に行はれてゐるかによつて説明される。往時は經濟が小規模であつた、誰もが銘々一人で働いてゐた、——これが社會の一構造であつた。次いですべてのものが共同で働くやうになつた、そこで社會の他の構造が受取られた。一切の變革の基底には、かくて、經濟上の變革、經濟的變革が横たはつてゐる。

何がそれならば人間をして經濟を營ませるのか？ これは何人にとつても自明である。随つて多くの考慮を費す必要がない。それを理解する爲めには、以前には農民によつて生産されてゐた、それが今では工場によつて生産されてゐるのを見れば足りる。農民經濟は麥、生肉、獸毛、亞麻一言にして言へば、すべて吾々の衣食に必要な一切の原料を生産する。工場はこの生肉から罐詰を作り、また衣服を作り、履物を作る、——一言にして言へば吾々がそれを利用するのにより便利な形にこの原料を變形する。すべてそれが結局は人間の生活を維持するのに役立つ。人間は、かくて、

生存する可能を持つ爲めに經濟するのである。このことは、繰返して言ふが、説明するまでもなく證明するまでもないことで、どんな小さい子供にも解つてゐる。しかし若しもあらゆる歴史的變遷の基底に經濟的變革が横たはつてゐるとするならば、それは、人間をして働かしめるものは彼の諸諸の要求、彼の謂はゆる物質的諸要求、飢ゑと寒さから自からを救はうとする意志であることを意味する。

かくて、人間の一切の行動及び一切の歴史の基底には物質的な諸要求が横たはつてゐる。此處からまた、吾々が今與へる所の史的唯物論と呼ばれてゐる歴史の説明もまた來てゐるのである。この歴史觀が初めて齎らされたのは、すべての労働者の共同の利益の連帶といふことを初めて理解した所の、そして今日の革命を遂行しつゝある所の社會階級によつてである。歴史の唯物的解釋は即ちそのプロレタリア的解釋である。以前、教育がブルジョアジーの手にあつた時代には、即ち生産機關、工場、鐵道、土地、等、等を領有してゐる所の、——一言にして言へば、他を搾取することによつて生きてゐる階級の手に握られてゐた時代には、歴史は吾々に違つて説明された。即ち、人間社會に起つた一切の變革が權力と富とを有する人々の頭の中に起つた所の變化から説明された。

例へばかう説かれた、往時は人々が何故にまた如何にして社會のそれ或は他の秩序が出来たかを問はなかつた、が唯だ從順にこの秩序に従つてゐた。その時代に革命は無かつた。ところがこの社會を批判し始めた所の、即ちその中に種々の缺陷を發見し始めた所の人々が現はれた、そして彼等は大眾の心にこの秩序が正しいことについての疑ひを起こさせた。大眾はこれ等の煽動家及び教唆者に耳を傾けた、そして暴動を始めた。かうして、ブルジョアジイの意見によれば、革命は始まつたのである。

一言にして言へば、ブルジョアジイには歴史なるものが工場又は商店に於けると全く同様に考へられてゐた、そこでは主人が判断をし、工夫をし、かつ命令する、労働者若しくは番頭が唯々としてそれに従ふ。

この説明の間違つてゐることを指摘するのは困難でない。實際のところ、若しも吾々が上に述べたやうなことがなかつたならば、若しも労働階級の搾取者、即ち資本家が労働者から彼等の生産物を取上げなかつたか、或は又それ等の生産物に對してそれが値するだけのものを彼等に支拂ふかしてゐたならば、果して如何なる煽動家がこの労働大眾をして暴動を起さしめることが出来るであら

う？ 若しも煽動の力によつて、言葉の上の又は文書の上の勸誘の力によつて、暴動を起させることが出来るならば、あらゆる階級に暴動を起させることが出来る筈であり、隨つて又、同様の成功を持つてブルジョアジイをも労働階級の如く暴動化し得る筈ではないか。ブルジョアジイを暴動化することはより容易でさへもあるであらう、何故なら彼等は、より教養ある者として、より容易に一切の煽動を理解し得る筈だから。然らば何故に今日かゝる煽動に聽従する者が最も貧しいそしてそれは又最も無學であることを意味する階級であつて、教養あるブルジョアジイは到る所革命に反對し、煽動家が何を言はうとも耳を藉さうとせず、彼等から顔を背けるのであるか？ 何故ならブルジョアジイにとつてはこの煽動が不利益だからである、何故ならそれが彼等の物質的利益と衝突するからである。さればこそ、これ等の物質的利益を擁護する意味に於て、他人の脊におぶさり、美味に飲食し美しき家に住み、等、等する自分の權利を擁護する意味に於て、ブルジョアジイは煽動家に耳を傾けないのみでなく、若しも煽動家が彼等の手に陥るならば、これを銃殺し、絞殺して、そしてより善き生活に向つて突進しつゝある労働階級と激烈な闘争をなしつゝあるのである。

かくて、第一に、歴史は壓迫され搾取されつゝある階級、農民及び労働者と、壓迫し搾取しつゝ

ある階級——地主及びブルジョアジーとの階級闘争によつて動かされる。第二に、この階級闘争は物質的利益、即ち、結局のところ、食物、衣服、住居、燃料、等、等に對する人間の要求によつて左右される。人々はこれ等の諸要求を満足させるべく突進する。又これ等の諸要求が出来るだけ正當に満足させられるやうに、即ち一切の地上の幸福がすべての者の間にその要求の程度に應じて配分されるやうに突進せねばならぬ、——正にこれをこそ實現すべく社會主義者達は努めてゐるのである。

この引例に於て吾々は吾々が現在を過去によつて理解してゐるのみでなく、また過去をも現在から説明してゐるのを見る、一つの、しかし、割合に大きな期間を觀察するといふ條件の下にはあるが。何故なら若しも吾々が吾々の周圍に起つてゐることのみを觀察するであらうならば、吾々は今起つてゐることの多くを理解し得ぬであらうから。吾々の周圍に起つてゐることを觀察する場合、吾々は階級を見ずして、唯だ個々の人間を見る、そして實際、歴史の全體が個々の人間によつて作り上げられると信じ兼ねないのである。歴史的過程、即ち歴史的變遷をその全體に於て觀察する爲めには、それから少しく離れて、そしてそれを一方から眺めることが必要である。

かくして、歴史の本質は人間社會の漸次的な發達、即ち漸次的な合法的な變化に存する。この發達の最も近い目的、吾々が今見ることを得るその目的こそは、社會主義、即ち土地及びその一切の生産物、同様に又すべての生産機關、工場、等、等及びすべての運輸機關、鐵道、等、等を勤勞階級の手に移すことである。これは——最も近き目的である。しかしこれだけでもつて、勿論、人間社會の發達は終るのではない。それからどうなるか、如何に社會主義社會は發達するか、それを吾々は今のところ豫見し得ない。しかし人間社會がそれに從つて發達する所のそれ等の法則にして正確によく知られるであらうならば、吾々は最も近き未來のみでなく、數十年、數百年後の人間的發達の過程をも豫言し得るに至るであらう。吾々は、しかし、左様に遠く入り込むことをしないであらう、それよりも何が在り、また何が在つたかを觀察するであらう。

吾々は以上、人間社會の發達の基底には經濟の發達、即ち人間の生きんが爲めにする自然との闘争、一片のパン、煖かき隅、等、等の爲めの闘争が横たはつてゐることを語つた。この闘争が他の何物にも優して人間を圍繞してゐる自然そのものに關係すべきことは全く明らかである。歴史的過程、即ちそれ或は他の國に於ける歴史の發達の方法を理解する爲めには、何よりも先づその國の自

然的條件を明瞭に想見することが必要である。若しも吾々が如何に地球の表面に夫々の開化せる又は未開なる、文化的なる、又は野蠻なる民族が分布されあるかを注意するであらうならば、吾々は最も開化せる民族が地球の、比較的温和なる氣候の支配する、暑過ぎも寒過ぎもしない部分に居住してゐることを見出すであらう。その反對に、最も野蠻なる民族は極熱の爲めに殆ど全く經濟の不可能なる最も熱い國に於てか、然らざれば極寒の國々に於て吾々に出會はれる。數萬年前に存在した人間に最も近似なる原始民族としては、一方に、全く何等の草木もなく、漁撈と狩獵とによつてのみ生存し得るとき極北に棲息してゐるエスキモーがあり、他方に、殆ど赤道直下に在るセイロン島のヴェツダ族及び中央アフリカの矮小種族がある。兩種族とも冬がまつたく無く絶えず唯だ二種類の天候が、即ち或は激烈なる炎熱か、或は驟雨が交代してゐる如き地方に住んでゐる。

しかし經濟は赤道直下の最も熱い國々に於ても——唯だそれが低地ではなく、冷涼な山地でさへあれば、發達し得るものである。例へば南アメリカに於てヨーロッパ人は最も發達せる農業、人工灌溉、等、等を有する最も開化せる種族、インカ種族を發見した。それは今日そのまゝ「エクワドル」と呼ばれてゐる國家によつて占められてゐる領域であるが、しかしこれ等のインカ種族は海拔

二——三露里の高地に住んでゐたのである。かくて、その地域の緯度——それが熱帯にあるか或は寒帯にあるかのみでなく、その海拔高度——それが山地であるか或は低地であるかをも考慮に入れることが必要である。

更に自然は經濟に對して單に氣候の形に於てのみでなく影響する。時として經濟のそれ或は他の傾向が、例へば、任意の地域に何等かの有用動物が棲息してゐることによつて説明される。例へば、ヨーロッパ及びアジアの極北の多くの種族は馴鹿によつて生きてゐる。馴鹿が彼等に食物(肉)をも、衣服(毛皮)をも、武器の材料(角)をも供給する。これ等の種族は半ば野生の鹿群を逐うて彷徨つてゐる、隨つて鹿の斃死は全種族にとつてではないまでも、全家族にとつての餓死を意味する。このことは野蠻人にとつてさうであるばかりでなく、開化せる民族にとつても亦さうであることがある。西部フランスの大西洋岸の住民の幸福は多くの點に於て今日に至るまで鰯に關係してゐる。それは鯡の小さい種族で、それが黒雲のやうにこれ等の沿岸に押し寄せて来る、住民は鰯を漁獲して生活してゐる。しかし鰯は毎年きまつてやつて来るのではない、隨つて鰯の來ない時は、フランスの漁師達にとつては全くロシアの百姓達にとつての不作と同様である。

この影響は永遠に且つ常にまったく同様であつたといふ風に想像してはならない。否、人間は變化する、そして彼等が變化するに従つて、自然に對する彼等の關係もまた變化する。例へば、まだ鐵器を所有しなかつたロシア平原の原住民には、森林は殆ど打勝ち難い困難と考へられてゐた。森林を拓り開くことは極めて困難であつた。森林を横斷することはその後長く記憶された所の冒險であつた、森林はあらゆる怪物をもつて充たされた恐ろしい場所であつた。盜賊サロウエイの物語を想起せよ。そこでロシアの住民は當時普通に森林の縁に、即ち森林と曠野との境目のところに住んでゐた。しかしその時中部ロシアへ最初の移住民——スラヴ人が來た。彼等は鐵の斧を携さへて來た。發掘に際してスラヴ人の部落、墓地、等、等の遺跡が見出される時、吾々は直ちにこの鐵の斧によつて彼等であることを知るのである。鐵の斧をつかつて人間は繁みに分け入つた、木を伐り倒し、自分の爲めに「村」を拵へた。かくて以前には恐ろしい場所であつたものが、今や反對に、人間の經濟の主要なる據り所となつた、何故なら移住民の最初の經濟が森林經濟であつたから。吾々に出會はれる主なる職業は次ぎのごときものであつた、蜜の採取、養蜂、狩獵、野獸の毛皮及び肉の採取、そしてそれから森林の「伐採」農業。森林が拓り開かれ、木が伐り倒され、焼き拂はれ、

灰の形に於て良質の肥料が得られ、その上に麥が播かれ、さうして收穫が得られた。全經濟が、かくて、森林と密接に關係してゐた。

これが人間の生活そのものの變化と共に、如何に人間の自然に對する關係が變化するかと云ふことの標本である。次ぎの例は尙ほ一層明瞭である、最初のヨーロッパ移民がアメリカへ着いた時、その地の土着民である黒人は、専ら狩獵に従事してゐた。多からぬ種族が廣漠たる原野を彷徨つて、そして野獸を屠つてゐた。それ以外の如何なる職業も彼等のところには存しなかつた。アメリカ大陸へヨーロッパ人が現はれた、——すると數十年にして、狩獵種族が彷徨つてゐた所のこの大平原に、美事に設備された農業、大工場、鐵道、等、等を有する世界最高の文明國の一つが出現した。今日アメリカ合衆國は——技術、即ち經濟の方法の點では、世界のすべての國々の間にあつて殆ど第一位に知られてゐる。その原住民が狩獵することのみを得たアメリカへ、ヨーロッパ人がヨーロッパの文化、即ちヨーロッパの習慣と勞働の方法とを携さへて來た時に、即ちかう云ふことが起こつたのである。

若しも吾々がこれ等の一般的な引例から直接にロシアへ、その歴史を吾々はこれから研究するの

であるが、移るならば、吾々はロシア民族が占據した所の東ヨーロッパ平原の自然的條件が、甚しく峻厳を極めてゐるのを見出すであらう。吾々のところでは冬が長く、夏が短かい。これが爲めに吾々のところでは農業労働が一年の小半部を占めるに過ぎない。中部ロシアに於ては耕作、播種、收穫、等、等が五箇月間に行はれる。若し吾々が隣邦ドイツを例に取るならば、吾々はそこでは既に七箇月間農村經營に従事し得ることを、即ち一年の大半部を經濟の爲めに利用し得ることを見出すであらう、それに反して吾々のところでは、ロシアに於ては、一年の大部分農耕者は土地に近く何事をも爲し得ないのである。が尙ほ遠く西方の、フランスへ、大西洋岸に赴くなら、吾々は冬期も——約言すれば、一年中間に働くことを許すごとき氣候的條件を見出すであらう。例へば、ブレターニユ¹⁾の百姓又はバリー近郊の園丁のところでは一年中その畑には何かしら生えてをり、随つてまた野菜も冬期のものと夏期のものとに分かれてゐる。一年中を土地の上で働くことを得るこれ等の國々に於ける農耕者の労働生産力が、一年の一小部分より働くことの出来ない所よりも遙かに大であるべきは想像に難くない。換言すれば、すべての價値の蓄積がこれ等の國々に於ては遙かに迅速に行はれる。かくて、吾々の苛しい氣候の結果としてロシアの經濟的發達は、よりよき状態に置かれた國々に於けるよりも遙かに緩慢でなければならなかつた。

註一 フランスの最南端地方

ロシア國民の主要なる職業、殆ど特殊的なその職業が農業であつた間、ロシアが他の國々よりも後れてゐたことは自然である。彼女が彼等の後を追ひかけ始めたのは、ロシアに製造工業が發達し始め、工場が現はれ始めてからである。この最後のものは輸入された原料、即ちロシア自身の中に生じたもののみでなく、遠方から受取られたものをも再生産することが出来る。吾々の更紗工場はトルキスタン或はアメリカに産する棉を再生産しつゝある。商業及び工業は、かくて、經濟の發達を非常に速かならしめ且つそれを自然的條件からより少なく從屬的なものにする。

しかし商業の發達に於ても、同様にロシアは中部ヨーロッパ諸國よりもより少なく幸福な條件の下に置かれてあつたことを言はねばならぬ。今日に於ても尙ほ最も良き通商路は水である。各國間の最善の交通路は海である。鐵道のなかつた往時には、それが唯一の交通路であつた。最も大規模の商業は海によつてのみ行はれ得た。陸路によつてはたゞすこしの、極めて高價な商品だけが送られることが出来た、何故なら馬車でもつて或る國から他の國へ輸送することは非常に高く値したか

ら。この對立は今日でも尙ほ保存されてゐる。今日戰爭の結果として現はれた物價騰貴を計算に入れないとしても、停車場から馬車を雇つて家に歸る費用は、この同じ距離を鐵道に依るよりも遙かに高價に、數十倍高く値する。

されば、繰返して言ふが、鐵道がなかつた間、それまでは唯一の便利なそして低廉な交通路と言へば、それは海であつた、そして多量の商品は海によつてのみ輸送することが出來た。そして又この事實から、何故に工業及び商業がヨーロッパの最も海に近い國々に於て最も早く發達し始めたかが説明される。地中海に臨み、その岸がこの海によつて洗はれてゐる國々が最も早く發達してゐる、ギリシヤ及びイタリーの如き、次いで近代に於ては島國であるイギリス、また所によつては辛うじて海面から露はれてゐるほど海と密接な關係を有し、以前には海底であつたところのオランダの如き、一部は比較的最近まで海に洗はれてゐたほどで、そこでは海と陸とが絶えず交代し合つてゐるのである。ロシアは非常に海に制限されてゐる。主としてロシアの歴史が發達したところの中、部ロシアは、最も近い海まで六〇〇——八〇〇露里を距ててゐる。その上彼女にとつての最も近い海であるバルチック海の東部と白海、北氷洋の灣は冬期に結氷して、航海が不可能である。ロシア

の南にある黒海は凍りはしないが、しかしそれは中部ロシアよりは最も遠く、最早六〇〇——八〇〇露里ではなくして、一千露里以上を距ててゐる。成る程、ロシアの南へは幾條かの大河——ドニエプル、ドン、ヴォルガが流れてゐる、しかしこれ等の河は、第一に、冬になると結氷する、第二に、これ等の中の主要な、黒海に注いでゐるドニエプルには、絶えず航行を邪魔する所の淺瀬があり、又これ等の中の最も大なるヴォルガは、海に注がずして、その巨大なる廣茫の爲めに海と呼ばれてはゐるがその實湖水に過ぎない所のカスピ海に注いでゐる、どこへもそこからは出られないのだ。

凡てこれが原因となつて、中部ロシアに於ては商業が、それと並んでまた工業が、ロシアの農業がさうであつたやうに、他の國々に於けるよりも遙かに困難に發達した。ロシアにとつては、この點に於て、開始することがより困難であつた。しかし一度開始するや、彼女は、吾々が後に見るであらうやうに、他の國々よりもより速かにさへ進んだのである。何となれば商業及び工業の出現が科學と技術との常に新らしい進歩を促すからである。それは極度に經濟的發達を促進し、そして人間に好ましからぬ自然的條件から巧に自分を防ぐのみでなく、また自然を征服するの可能を與へ

る。それが如何に行はれるかの例を擧げて、吾々は吾々の記述のこの部分を終るであらう。アフリカの北部は、普く知られてゐることく、不毛のサハラ沙漠によつて占められてゐる。そして、そこに遊牧のアラビヤ人が住んでゐた間は、殆ど全く農業は不可能であつた。唯だ所々、偶然に水があつた場所に、オアシスが形成されてゐただけであつた。しかしそれも甚すくなかつた。北アフリカがフランス人によつて占領された時、彼等はそこへ自分達の技術をも持つて行つた。彼等は土地を掘鑿しはじめた、そして非常に速かに、サハラには水が、實を言ふと、在る、たゞ非常に深いだけである、しかし地中數百尋の深さにまで達し得るアルツール式鑿井法の助けをもつてすれば、この水まで到達し得ることを發見した。この井戸をつかつて地上に水を引上げた後に、フランス人は人工灌溉を設備した、そしてその結果として美事な收穫を與へる椰子を植ゑ込まれた數多の人工的オアシスが出現しつゝある。椰子の實はこれ等の地方に於ては、アラビヤ人の爲めにすべてのもの——麥にも肉にも、代用される所の、殆ど主食物となつてゐる。かくて、ヨーロッパの技術の卓越のお蔭で、人々がこれまで永久に不毛の沙漠と考へてゐた所のものを、花咲く園に變ずることに成功しつゝあるのである。

次ぎの例は一層新らしく且つ一層驚歎すべきものである。科學上の最新の進歩のお蔭で、人間はこれまで何物も生長し得なかつた所に草木を繁茂させることが出来たばかりでなく、これまで知られなかつた草木の新種を創ることも成功した。例へば、アメリカの園藝學者ベルバンクは十四歳で、即ち普通よりも二倍早く、成長し成熟する胡桃の新種を創り、核のない杏、直徑一寸餘の苺を創つた、——凡てこれが多くのゼネレーションの數百年に互る努力によつてではなく、現代科學のあらゆる方法を採用せる一人の人間によつて、彼の一生に於て到達したところのものである。

かくて、人間は自然に依存する、従つて歴史は任意の國民が立たされたところの自然的條件に關連して急速にまた徐々に進展する。しかしこの人間に對する自然の支配力は無限ではない。人間は自然を征服し得る、隨つて經濟の基礎は自然ではない。自然はこの經濟にとつて單なる素材に過ぎぬ。經濟の基礎は人間の勞働力である、この勞働力が完全であればあるほど、それが執拗で精巧であればあるほど、それだけ人間は自然に依存することがより少なくなる。されば科學と技術とが吾々の豫測し得ない完成の域に達するであらう未來に於ては、自然は人間の手の中で、それに對して必要な一切を爲し得る軟かい蠟となるであらうことは、想像に難くない。

第一部

第一章 ロシヤ史の初世紀

ロシヤの平原に人間は文字通りの意味に於ける『記憶し難い』時代——この平原の全北半部が厚い氷の殻に覆はれてゐた時代に現はれてゐる。ウクライナが氣候の點から見ても今日のアルハンゲリスカヤ縣に似てゐた、そしてその苔地帯に、有史前の象である、濃い長い剛毛に全身を覆はれたマンモスの群が棲息してゐた。これ等のマンモスをロシヤの原人は獵してゐた、彼等の肉を彼は食物とし、彼等の毛皮から衣服を作り、彼等の骨から——武器を作つてゐた。これ等の骨から作つた武器の他に、彼は尙ほ粗雑に削られた石の斧と棍棒とを持つてゐた、そしてそれだけに彼の全技術は限られてゐた。此の如きマンモスの狩獵者達の逗留地の一つの跡が、今のキエフ市に、現在の土

地表面よりも數尋下に發見されてゐる。それは何時のことであつたか？ 何れにしても今から數萬年以前であつて、それよりすくないことはない。これ等のマンモスの狩獵者達が現在のヨーロッパ・ロシアの住民の祖先であつたか？ 恐らく、さうではあるまい。氣候が變化して、より暖かくなるに従つて、氷河は狭く／＼なつて行つた、そして氷河の南端に沿うて住んでゐた住民は次第に遠く北と東へ、今日のシベリヤへ、北氷洋へと去らなければならなかつた。その方面へマンモスも立去つた、そしてそこで彼は死滅した。彼の遺骸（時には剛毛と肉を附けたる）が今に至るまで最も屢シベリヤの氷の中に發見される。彼を獵してゐた人間も亦残りなく死滅したかも知れない、が恐らく、彼等の苗裔は今日も尙ほ北氷洋の岸に沿うて、今日の食人種及びラブラント人として、彷徨うてゐるのであらう、たゞマンモスの肉ではなく、生き残れる彼の若い同時代物である北方の馴鹿を食物としながら。

註一 この氣候の變化は各種の原因から、主としては、地球の軌道が地球の全存在中常に一樣でなかつたといふこと、嘗ては長く伸びてゐたものが、縮んで（圓形に近いものとなつた）ことによつて説明される。それが長く伸びてゐた時は、冬がより長く、夏がより短かつた。それと共に氣候が以前には今よりも濕潤して

ゐたので、雪は冬に非常に多量に降つた、そして短時間には解け得なかつた、かくして氷河が形成された。

氣候が乾燥し、地球の軌道が短縮して、夏が長くなるに連れて、氷河は解け始めた、そして今や兩極と最も

高い山の頂きにのみ残つた。

その時から數萬年の間に、ロシアの平原の住民も亦、恐らくは、十回以上交替した。石器時代の野蠻人の後に吾々はこゝで尙ほ銅及び青銅期の、まだ鐵を知らなかつた時代の人間の遺跡、——ついで「鐵器時代」の人間の遺跡に出會ふ、しかしこれとても、恐らくは、まだ今日の住民の祖先でなかつた。吾々の紀元前五世紀に、即ち今から二千五百年前に、吾々は既にロシアの南部（今日のヘルソンスカヤ、エカテリノスラフスカヤ、タヴリーチエスカヤ諸縣）についての書かれたる物語を有する。そこには當時、牧畜に従事してゐた遊牧民族のスキーフ人が住んでゐた、カフカズ山脈中の現在のアセチン人はその苗裔である。その奥の北の方はどうなつてゐたか、スキーフ人について吾々に語つたところのギリシヤ人は、自分でも善くは知らなかつた。これ等の物語の後およそ八〇〇年を経て吾々はスラヴ人についての最初の消息に接する、こゝから最う近代との絶間なき關係が始まつてゐる、何故ならスラヴィヤン語を今日のロシアの住民の壓倒的多數が話してゐるからであ

る。

註1 スラギヤン語は所謂「印度・ヨーロッパ語」族に屬する、この語族に屬してゐる（乃至屬してゐた）のは最近三千年間に亘るヨーロッパの諸民族、ベルシヤ、中央アジアの一部及びインドの住民である。この語族に屬する各種の言語の中或るものは最早使用されてをらない、彼等はたゞ文書の上のみ保存されてゐる、かゝる「死滅せる」言語に屬するものにはヨーロッパ語族にラテン語及び古代ギリシヤ語、アジア語族にサンスクリットがある。その他は今日も尙ほ使用されてゐる、——ローマン語系（フランス語、イタリア語、スペイン語、等、等）、セルマン語系及びスラギヤン語系（チェツク語、ポーランド語、ボルガリヤ語、セルビヤ語、ロシア語、等、等）。

言語の近似は、勿論、ロシア平原の今日の住民が一スラヴ民族から出てゐることの證據たることは出來ない。今日のフランス人は「ローマン」語系の、古代ローマ人のラテン語から發生した言語の一つを話してゐるが、しかしローマ人から出てゐるのではなくして、主として、その昔ローマ人によつて征服され、隨つて彼等の文化を、又それと共に彼等の言語をも自分の物とした所のケルト民族から出てゐる。吾々は決定的に、ロシアの平原にはスラヴ人と同時に他の言語系統に屬する民族も亦住んでゐたことを知つてゐる。且つ又各種の場所、河、及び都市さへもの名稱が今日に至る

までこの事實を想起せしめてゐる。「モスクワ」、「オカ」、「クリヤヂマ」なる語は——スラギヤン語ではなくして、フィンランド語である。それは嘗てこゝに、今でも死滅してはゐないが、しかしただスラヴ人によつて征服され且つスラヴ化して、東スラギヤン語、即ちロシア語を自分の物とした所の、又その外貌、顔の輪廓によつても今日のモスクワ人乃至はヴラヂミル人の如き大ロシア人を思はせる所のフィン種族が住んでゐたことを示すものである。もつと東の同様にスラヴ民族でない諸種族は、より後代に至つて征服された結果として、尙ほそれ自からの言語をも保存してゐる。（チュウワシ、マリー族、乃至チエレミス族、等、等）。かくてスラギヤン語は尙ほ未だ、吾々の脈管内にスラヴの血が流れてゐることを證明しない、ロシア國民はロシアの平原に住んでゐた非常に多くの種類の種族から形成されたのである、しかしスラヴ民族はこれ等すべての種族の中最も文化的なる（開化せる）隨つて又最も強き種族であつた、——彼が他の全部にその言語をも結びつけたのである。

その初めスラヴ人はたゞこの平原の南西よりの小さな一隅、今日のウォルインスカヤ、ポドーリスカヤ諸縣と東ガリシヤ地方とを占據してゐたに過ぎなかつた。ついで幾何もなくドニエブルの中流

とボレーシエとを占據し（白ロシア人は確かに古代スラヴ移民の苗裔である）、その後また北方、フィンランド灣とラドガ湖の方面に進出し、そして遂に、最後に、今日の大ロシア、モスクワ縣及びその隣接諸縣を占有した。ロシア平原に沿うてのスラヴ民族のこの移動は五〇〇年以上、若しも彼等がこの平原の最東端なるウラル山脈まで到達した時代までを數へるなら、全一千年を要した。この一千年の最後の六〇〇年から吾々は文書的記念——年代記、裁判上の慣習法規（古代ロシア語で「ブラウダ」及び「スデイブニキ」と呼ばれたもの）、最後に、各種の條約、「國書」、遺言狀、等、等を有する。最後の三——四世紀からは或る種の物質的文化の記念物さへも殘されてゐる、殊に寺院及び聖像、が同様に又、少くとも、他の大建築物である、宮殿及び城塞の遺物も保存されてゐる。要するに、ロシア・スラヴの生活を吾々の紀元十一世紀から十六世紀へかけて（十六世紀に最初のロシア移民がウラル山脈を越えたのである）吾々は相當完全にまた詳細に想像することが出来るのである。スラヴ民族の移動の最初の三——四世紀について言へば、吾々は彼等について直接の消息を持つてゐない、隨つて當時のスラヴ民族の文化については部分的には、當時のロシア・スラヴを目撃した所の異邦人（殊にギリシヤ人とアラビヤ人）の物語によつて、しかし主としては

言語によつて判断し得るのみである。

人間はその用ゐなれた物、その使用してゐる道具に名稱を與へる。道具は變化する、しかし名稱は屢々後へ殘る、一旦それに馴れてしまふと、殊更新らしい言葉を考へ出すことをしないものである。往時は泥濘があるとそこへ木の丸太を渡して、それが丁度一種のモスト（橋）のやうになつてゐた、そしてそれは正當にも「モストワヤ」と呼ばれてゐた、この種の木の丸太のモストワヤの遺物がモスクワのクレムリで發見された。今日は「アスファルトのモストワヤ」などと言つてゐる、この場合「橋」らしい何物も無いに拘らず、かく、古い言語によつて吾々は古い文化を推測し得るのである。

スラフヤン語は極めて明瞭に技術の發達のあらゆる段階を吾々に示す。例へば吾々は發掘によつて、金屬製の道具の前に人間が石で作られた所の、最初は粗雑に削られた（所謂古石器時代、ギリシヤ語の「パレオス」〔古き、古代の〕と「リトス」〔石〕より成れるパレオリトス時代）、次ぎには砥磨された（新石器時代、「ネオリトス」時代）道具を有してゐたことを知つてゐる。然るにスラフヤン語の「ノージ」〔小刀〕はそれが轉訛して來た元の言葉では「クレメン」〔磨石〕を意味してゐる、

従つて、スラヴ人が最初に見た小刀は、石で作られてあつたのである。石器時代の野蠻人は直接には極めて稀にしか巨獸を攻撃しない、——より屢々彼は機智によつて、追落しにかけて捕へようと努める。最初に述べたマンモスの狩獵者は豫め掘られた穴に彼を追落して、そしてそこで獸が絶息してしまふのを待つてゐた。スラヴ民族の最古の、又すべてのスラビヤン語に一樣に響いてゐる狩獵語が——テニョータ（捕獸網）となつてゐるのは、全く自然なことである。犂或は鋏をもつて、馬或は牛の助けをかりて行はれる今日の農耕は、吾々には何でもないのであるが、しかし實際に於てはそれは千年以上農耕に勞苦して來た人々の多くの時代の發明の全系列の結果、努力の賜物である。何よりも先づ、一見したところ極めて簡單に見ゆる鋏や馬鋏のごとき道具の發明が、爾かく簡單ではなかつたのである。馬鋏の代りに八〇年前にはまだロシアの邊境に於て太い松の木の幹を見ることが出來た、各々の枝が眞鋏の齒の代りをしてゐた。がそれよりも一層古い時代には、同様の木の幹が、たゞ一層太くして頑丈な、しかも枝のないものが、鋏の代用をしてゐた。撓められた幹或は棍棒をもつてのかゝる農耕を吾々は今日でも尙ほアフリカの各種の蠻民の間に見ることが出來る、がスラヴ民族にあつても同様であつたこととは、「ソハー」（鋏）といふ言葉の原始的な意味が明示してゐる、最初この言葉は實に棍棒を意味してゐた。

犂或は鋏を曳かせることの出來る生きた力を獲ることは一層困難であつた。若しも石器時代の野蠻人にとつて巨獸を屠ることが既に不可能であつたとせば、人間力よりも遙かに大なる力を有する馬或は牛の如き動物を馴らして使役することは、尙ほ更不可能な事であつた。現存の野蠻人に對する觀察は、牧畜が人間の間に最も遅く、——彼等が農耕に従事し始めてゐるよりも遙かに遅く發達してゐることを指示してゐる。何故に「スコート」（家畜）なる語が古代スラビヤン語に於て財産を意味したかは、全く理解し得るところである、最初に動物を馴らすことの出來た者が經濟的に他の者達よりもより有力であつたことは、ブルジョア社會に於ける百萬長者とまつたく同様であつた。西ヨーロッパの上層階級が古代に於て「騎士」若しくは「騎乗者」なる稱號を受けてゐたのも偶然ではない（スペイン語の「カバルレロ」（紳士）は「カバルルス」（馬）から、フランス語の「シエワリエ」（騎士）は「シエワル」（馬）から、ドイツ語の「リツテル」——は「馬の」、こゝから吾々の「ルイッアリ」（騎士）等、等が來てゐるのである）。吾々は間もなく、家畜の領有が全く歴史的な時代に於てさへも力の源泉であつたことを見るであらう。

多くの小さい種族に分かれて、それが絶えずお互に争つてゐるといふことを語る事が出来ただけであつた。諸種族間のこれ等の絶え間なき争鬭の記憶は、ロシア國家の起源に関する傳説中にも保存されてゐる。年代記はそれを九世紀の半ばとしてゐるが——それはスラヴ民族についての最初の消息が現はれた後凡そ三百年を経てゐることを意味する。併し、この傳説に依れば、ロシアの平原に於ける最初の大なる國家の建設者はスラヴ民族ではなくして、外から來たところの民族である。即ち南部に於ては——アジア大陸から來たところのホザール族、北部に於ては——スカンジナヴィヤ半島から、今のスウェーデンから來たところのワリヤグ族。その後ワリヤグ族がホザール族を征服してヨーロッパ・ロシアの全版圖に亘つての主人となつた。

この傳説を近世の史家は屢々愛國的な、即ち國民主義的な立場から否定した、ロシア・スラヴの民族的自負心にとつて、彼等の最初の君主が異邦人であつたことは耻辱であると彼等には考へられた。實際に於てはこのことは、十八世紀の半ばからロマノフ家の名の下にドイツのホルシュタイン家の子孫がロシアを統治してゐた事實と、その耻辱の點から見て逕庭が無いのである（正統のロマノフ家は一七六一年ピョートル一世の息女エリザベタで絶えてゐる、彼女には一人も子供がなかつた）。この傳説が明示してゐる、最初この言葉は實に棍棒を意味してゐた。

犂或は鋤を曳かせることの出来る生きた力を獲ることは一層困難であつた。若しも石器時代の野蠻人にとつて巨獸を屠ることが既に不可能であつたとせば、人間力よりも遙かに大なる力を有する馬或は牛の如き動物を馴らして使役することは、尙ほ更不可能な事であつた。現存の野蠻人に對する觀察は、牧畜が人間の間にも最も遅く、——彼等が農耕に従事し始めてゐるよりも遙かに遅く發達してゐることを指示してゐる。何故に「スコート」(家畜)なる語が古代スラヴィヤン語に於て財産を意味したかは、全く理解し得るところである、最初に動物を馴らすことの出來た者が經濟的に他の者達よりもより有力であつたことは、ブルジョア社會に於ける百萬長者とまつたく同様であつた。西ヨーロッパの上層階級が古代に於て「騎士」若しくは「騎乗者」なる稱號を受けてゐたのも偶然ではない(スペイン語の「カバルロ」(紳士)は「カバルルス」(馬)から、フランス語の「シエワリエ」(騎士)は「シエワル」(馬)から、ドイツ語の「リツテル」——は「馬の」、こゝから吾々の「ルイッアリ」(騎士)等、等が來てゐるのである)。吾々は間もなく、家畜の領有が全く歴史的な時代に於てさへも力の源泉であつたことを見るであらう。

多くの小さい種族に分かれて、それが絶えずお互に争つてゐるといふことを語る事が出来ただけであつた。諸種族間のこれ等の絶え間なき争闘の記憶は、ロシア國家の起源に關する傳説中にも保存されてゐる、年代記はそれを九世紀の半ばとしてゐるが——それはスラヴ民族についての最初の消息が現はれた後凡そ三百年を経てゐることを意味する。併し、この傳説に依れば、ロシアの平原に於ける最初の大なる國家の建設者はスラヴ民族ではなくして、外から來たところの民族である、即ち南部に於ては——アジア大陸から來たところのホザール族、北部に於ては——スカンジナヴィヤ半島から、今のスウェーデンから來たところのワリヤグ族。その後ワリヤグ族がホザール族を征服してヨーロッパ・ロシアの全版圖に亘つての主人となつた。

この傳説を近世の史家は屢々愛國的な、即ち國民主義的な立場から否定した、ロシア・スラヴの民族的自負心にとつて、彼等の最初の君主が異邦人であつたことは耻辱であると彼等には考へられた。實際に於てはこのことは、十八世紀の半ばからロマノフ家の名の下にドイツのホルシュタイン家の子孫がロシアを統治してゐた事實と、その耻辱の點から見て逕庭が無いのである（正統のロマノフ家は一七六一年ピョートル一世の息女エリザベタで絶えてゐる、彼女には一人も子供がなかつ

た）。即ちそれは全く何等の意義をも有しなかつた、従つて又ノオヴゴロドやキエフの最初のクニャーイジ（公）達が、その名前からして吾々が知つてゐる如く、スウェーデン人であつた（それは疑ふべくもない）ことも、全く重要ならざることである。それよりも遙かに重要なことは、これ等のスウェーデン人が奴隸所有者であり奴隸賣買者であつたことである。奴隸を捕へてそれを賣ることがロシアの地の最初の主權者達の職業であつた。此處からしてこれ等のクニャーイジ（公）間の絶え間なき戦争、その目的が「奴僕を掠奪すること」、即ち多くの奴隸を捕獲することにあつた所の戦争が由來してゐる。此處からしてその當時に於て主要なる、ロシアに最も近い奴隸市場であつた所のコンスタンチノープルとの彼等の交通が由來してゐる。この自分の商品である「奴僕」について、初代のクニャーイジ（公）達は最も無遠慮に、露骨に語つてゐる。彼等の中の一人スヴィヤトスラフは自分の都をドニエプルからドウナイへ移さうと欲した、その理由はそこ即ちドウナイへは「あらゆる種類の財貨」が聚集し、この「あらゆる種類の財貨」の中には「奴僕」も亦あつたからである。この他に市場へは森林經濟の生産物、毛皮、蜜、及び蠟も集まつて來た。それをクニャーイジ（公）達は「平和な手段」によつて獲得した、すべてこれを彼等が征服し得たところのスラヴ民族から租税

處からして吾々は、クニヤージ（公）がまだ十世紀には裁判をしてゐなかつたことを知るのである。市民の間の事件は或は自判によつて、——一人の人間が他の人間を傷つけ又は殺害した場合に、その者若しくはその朋友又は近親が犯人に對して自から復讐をなした、瘤に瘤を償ひ、折られたる肋に折られたる肋を償ひ、殺人に對しては犯人を打ち殺した、これは「血の復讐」と稱せられた、或は係争者が十二人（裁判官）より成る仲裁々判を仰いで、そしてその決定に従ふことによつて、解決された。この決定は普通、毆打者或は殺害者をしてその被害者又はその被害者の家族に金を拂はしむることにあつた。クニヤージ（公）の屋敷に屬してゐる者に對しては最も高價に、農民に對しては最もすくなく支拂はれた、——それは奴隸に對してと同額であつた。當時は銀で計算されてゐた、時としてそれは、古い記憶に従つて「スコート」（家畜）と呼ばれはしたが、當時の價格を今日のそれに換算することは極めて困難であるが、しかしほど、百姓の生命が當時吾々の一九一四年の戦争前の金にして五〇〇ルーブルに値してゐた、貴族の生命はその十六倍であつた。傷害に對しても同様に、しかし、勿論、殺害に對してよりも遙かにすくなく支拂はれた。若しも殺された者が奴隸であつた時には、主人はそれが何等かの手職を教へ込まれた奴隸であるかそれとも普通の

た。即ちそれは全く何等の意義をも有しなかつた、従つて又ノオヴゴロドやキエフの最初のクニヤージ（公）達が、その名前からして吾々が知つてゐる如く、スウエーデン人であつた（それは疑ふべくもない）ことも、全く重要ならざることである。それよりも遙かに重要なことは、これ等のスウエーデン人が奴隸所有者であり奴隸賣買者であつたことである。奴隸を捕へてそれを賣ることがロシアの地の最初の主権者達の職業であつた。此處からしてこれ等のクニヤージ（公）間の絶間なき戦争、その目的が「奴僕を掠奪すること」、即ち多くの奴隸を捕獲することにあつた所の戦争が由來してゐる。此處からしてその當時に於て主要なる、ロシアに最も近い奴隸市場であつた所のコンスタンチノーブルとの彼等の交通が由來してゐる。この自分の商品である「奴僕」について、初代のクニヤージ（公）達は最も無遠慮に、露骨に語つてゐる。彼等の中の一人スヴィヤトスラフは自分の都をドニエプルからドウナイへ移さうと欲した、その理由はそこ即ちドウナイへは「あらゆる種類の財貨」が聚集し、この「あらゆる種類の財貨」の中には「奴僕」も亦あつたからである。その他に市場へは森林經濟の生産物、毛皮、蜜、及び蠟も集まつて來た。それをクニヤージ（公）達は「平和な手段」によつて獲得した、すべてこれを彼等が征服し得たところの斯拉ヴ民族から租税

處からして吾々は、クニヤージ（公）がまだ十世紀には裁判をしてゐなかつたことを知るのである。市民の間の事件は或は自判によつて、——一人の人間が他の人間を傷つけ又は殺害した場合に、その者若しくはその朋友又は近親が犯人に對して自から復讐をなした、瘡に瘡を償ひ、折られたる肋に折られたる肋を償ひ、殺人に對しては犯人を打ち殺した、これは「血の復讐」と稱せられた、或は係争者が十二人（裁判官）より成る仲裁々判を仰いで、そしてその決定に従ふことによつて、解決された。この決定は普通、殴打者或は殺害者をしてその被害者又はその被害者の家族に金を拂はしむることにあつた。クニヤージ（公）の屋敷に屬してゐる者に對しては最も高價に、農民に對しては最もすくなく支拂はれた、——それは奴隷に對してと同額であつた。當時は銀で計算されてゐた、時としてそれは、古い記憶に従つて「スコット（家畜）」と呼ばれはしたが、當時の價格を今日のそれに換算することは極めて困難であるが、しかしほど、百姓の生命が當時吾々の一九一四年の戦争前の金にして五〇〇ルーブルに値してゐた、貴族の生命はその十六倍であつた。傷害に對しても同様に、しかし、勿論、殺害に對してよりも遙かにすくなく支拂はれた。若しも殺された者が奴隷であつた時には、主人はそれが何等かの手職を教へ込まれた奴隷であるかそれとも普通の

奴隷であるかを考量した、手職を仕込まれた奴隷に對しては自由の農民に對してよりも高く支拂はれねばならなかつた。

それならばこの場合裁判は如何なる點に存したか？ 然りそれは正に、裁判官が原被の兩側をして話し合ふことを助け、且つどちらにどれだけを支拂ふべきかを算定することに在つた。が刑罰は？ それについては最初すこしも問題はなかつた、侮辱された者が、若し自分を強いと感じたならば、侮辱者を殴打し又は殺すことが出来たから。刑罰は最初無かつた、何故なら十一世紀の都市在住のルス人は尙ほ未だ社會階級なるものを知らなかつたから。刑罰は支配階級にとつてその權力と特權（卓越）を擁護する手段として役立つ。例へば、すべてのものが私有財産の上に基礎づけられてゐるブルジョア社會に於ては、刑罰によつて所有權を尊重せしむべく努めてゐる。他人の所有權を侵害する者は、あらゆる方法を持つて辱しめられ、監獄に入れられ、懲役に送られ、等、等される。しかし所有階級がまだ形成されなかつた以前は、各々が自分自身と自分の權威とを力の限り守護し、或は附近の住民乃至は隣人に對して保護を求めた。捕まへたり、監獄に入れたり、罰したりする事の出来るどんなかの權力が必要であるなどは——迎も考へられないことであつた。

ニヤージ（公）達の敗戦であつた。吾々は既に、ワリヤグ（スウェーデン人）だけがロシアの平原に於ける唯一の「奴僕」の狩獵者、唯一の奴隷賣買者でなかつたことを述べた。彼等にはアジア大陸から來た所のこの方面の競争者、商賣敵があつた。最初にそれはホザール族であつた、——ワリヤグの初代のクニヤージ（公）達が彼等を征服した。次いでベチエネーグ族が襲來した、そして彼等をも征服した、併し鬭争は最早安價には濟まなかつた、上述のクニヤージ（公）スヴィヤトスラフはベチエネーグの爲めに殺された。そして彼の頭骸骨からベチエネーグのクニヤージ（公）は大杯を作らせた。アジアからの競争者の次ぎの浪が襲つて來た時、即ちポーロフツイ族が襲來した時には、スヴィヤトスラフの孫達は最早彼等を征服する事が出來ないで、敗走した。キエフの住民は當時自から武器を手にして立つた、併しポーロフツイ族だけでないに、クニヤージ（公）とその貴族とをも追ひ拂つた。これは、併し、東の間の成功であつた、幾何もなくクニヤージ（公）達は再び歸還した、そして殘酷に國民革命の指導者達は刑せられた。金貸業者の掠奪は益々旁若無人になつた、この場合金貸業者の巢はクニヤージ（公）の屋敷であつた。クニヤージ（公）が、鹽その他を商ひながら、第一の投機業者であつた。今やキエフの貧民は戦争に負けるまで待つてゐられな

奴隷であるかを考量した、手職を仕込まれた奴隷に對しては自由の農民に對してよりも高く支拂はれねばならなかつた。

それならばこの場合裁判は如何なる點に存したか？ 然りそれは正に、裁判官が原被告の兩側をして話し合ふことを助け、且つどちらにどれだけを支拂ふべきかを算定することに在つた。が刑罰は？ それについては最初すこしも問題はなかつた、侮辱された者が、若し自分を強いと感じたならば、侮辱者を殴打し又は殺すことが出來たから。刑罰は最初無かつた、何故なら十一世紀の都市在住のルス人は尙ほ未だ社會階級なるものを知らなかつたから。刑罰は支配階級にとつてその權力と特權（卓越）を擁護する手段として役立つ。例へば、すべてのものが私有財産の上に基礎づけられてゐるブルジョア社會に於ては、刑罰によつて所有權を尊重せしむべく努めてゐる。他人の所有權を侵害する者は、あらゆる方法を持つて辱しめられ、監獄に入れられ、懲役に送られ、等、等される。しかし所有階級がまだ形成されなかつた以前は、各々が自分自身と自分の權威とを力の限り守護し、或は附近の住民乃至は隣人に對して保護を求めた。捕まへたり、監獄に入れたり、罰したりする事の出來るとんなかの權力が必要であるなどは——逆も考へられないことであつた。

ニヤージ(公)達の敗戦であつた。吾々は既に、ワリヤグ(スウェーデン人)だけがロシヤの平原に於ける唯一の「奴僕」の狩獵者、唯一の奴隷賣買者でなかつたことを述べた。彼等にはアジア大陸から來た所のこの方面の競争者、商賣敵があつた。最初にそれはホザール族であつた、——ワリヤグの初代のクニヤージ(公)達が彼等を征服した。次いでベチエネーグ族が襲來した、そして彼等をも征服した、併し鬪争は最早安價には濟まなかつた、上述のクニヤージ(公)スヴィヤトスラフはベチエネーグの爲めに殺された。そして彼の頭骸骨からベチエネーグのクニヤージ(公)は大杯を作らせた。アジアからの競争者の次ぎの浪が襲つて來た時、即ちポーロフツイ族が襲來した時には、スヴィヤトスラフの孫達は最早彼等を征服する事が出來ないで、敗走した。キエフの住民は當時自から武器を手にして立つた、併しポーロフツイ族だけでなしに、クニヤージ(公)とその貴族とをも追ひ拂つた。これは、併し、東の間の成功であつた、幾何もなくクニヤージ(公)達は再び歸還した、そして殘酷に國民革命の指導者達は刑せられた。金貸業者の掠奪は益々旁若無人になつた、この場合金貸業者の巢はクニヤージ(公)の屋敷であつた。クニヤージ(公)が、鹽その他を商ひながら、第一の投機業者であつた。今やキエフの貴民は戦争に負けるまで待つてゐられな

かつた、このクニヤージ(公)が(四十年前に一度廢せられてそして再び還つたものの子であつたが)死ぬや否や、叛亂は再び勃發した、そして今度はそれを鎮壓する事が出來なかつた。キエフの富豪達は急遽他の都市から、ベレヤスラーヅリから、當時ポーロフツイに對する戰勝の爲めに最も有名であつたクニヤージ(公)ヴラヂミル・モノマフを迎へて、辛うじて安全なるを得た。その者は國民に愛撫的な言葉をふり撒いた、しかし幾多の讓歩をもしなければならなかつた。新たに發布され「ルスカヤ・ブラウダ」(ロシヤ法典)に書込まれた規定は、負債者を奴僕同様に取扱ふことを禁じた、負債者は今や自分の主人に對して裁判を仰ぐことが出來た。若し金を借りた商人が、その金を自分の過失によつてではなく、例へば、火事であるとか難船であるとかによつて、失つてそして負債を支拂ふことが出來なくなつた時、彼は以前のやうに奴隷にされることなく、負債を消却する爲めの延期を許された。勿論、すべてこれは絶間なき戦争の爲めに増々疲弊した大衆の搾取と迫害とを無くしたわけではなかつた。しかしキエフの革命後暫くはこの大衆は曾て見られなかつたほど尊重された、そしてキエフ市民の會議、ウエーチエ(民選議會)はキエフを統治し、クニヤージ(公)を廢立した、そしてその者はウエーチエ(民選議會)に臣民に對する如くでなく、自分の

シリヤ、バレスティン及びエジプトからベネチヤ、ゼノア及びマルセイユへ、そしてそこから、アルプス山脈の山越えをし、ラインを經由して、西ヨーロッパへ出ることとなつた。それに沿うて古代ロシアの都市の連鎖が延びてゐた所の『ワリヤグからギリシヤへの大水道』が火の消えたやうになつた、それと共にこれ等の都市々々も亦衰微し始めた。

タ、イルの侵入が完全に彼等の息の根をとめた。タ、イル族は嘗てホザール族、ベチエネーギ族、ポーロフツイ族が來たのと全く同じ方向から來た、彼等はこれ等の民族と同人種でもあつた、彼等の目的も亦同様に——人間の獲物を狩ることであつた、——しかしすべてのアジアからの侵入者の中タ、イル族は最も強く、最も組織的であつた。往時のアジア民族の侵入は都市の城壁の前で喰止められ、すべての荒廢は、又しても、農民、即ち「スメルド」(惡臭を放つ者)に限られてゐた。タ、イル族は都市を抜くことを知つてゐた、思ふに、當時まだ(十三世紀の中葉)西ヨーロッパには知られてゐなかつた所の火術さへも彼等は知つてゐたのである。ロシアのクニヤージ(公)達の軍隊はかくの如き敵を撃退し得なかつた、すべてのロシアの都市は、ノオヴゴロドを除くの外、相次いでタ、イルの手に陥ちた。タ、イル族は彼等を荒らして住民を俘虜にして運び去つたばかりで

かつた、このクニヤージ(公)が(四十年前に一度廢せられてそして再び還つたものの息子であつたが)死ぬや否や、叛亂は再び勃發した、そして今度はそれを鎮壓する事が出来なかつた。キエフの富豪達は急遽他の都市から、ベレヤスラーヴリから、當時ポーロフツイに對する戦勝の爲めに最も有名であつたクニヤージ(公)ヴラヂミル・モノマフを迎へて、辛うじて安全なるを得た。その者は國民に愛撫的な言葉をふり撒いた、しかし幾多の讓歩をもしなければならなかつた。新たに發布され「ルスカヤ・ブラウダ」(ロシア法典)に書込まれた規定は、負債者を奴僕同様に取扱ふことを禁じた、負債者は今や自分の主人に對して裁判を仰ぐことが出來た。若し金を借りた商人が、その金を自分の過失によつてではなく、例へば、火事であるとか難船であるとかによつて、失つてそして負債を支拂ふことが出来なくなつた時、彼は以前のやうに奴隷にされることなく、負債を消却する爲めの延期を許された。勿論、すべてこれは絶間なき戦争の爲めに増々疲弊した大衆の搾取と迫害とを無くしたわけではなかつた。しかしキエフの革命後暫くはこの大衆は曾て見られなかつたほど尊重された、そしてキエフ市民の會議、ウエーチエ(民選議會)はキエフを統治し、クニヤージ(公)を廢立した、そしてその者はウエーチエ(民選議會)に臣民に對する如くでなく、自分の

シリヤ、パレスティン及びエジプトからベネチヤ、ゼノア及びマルセイユへ、そしてそこから、アルプス山脈の山越えをし、ラインを経由して、西ヨーロッパへ出ることとなつた。それに沿うて古代ロシアの都市の連鎖が延びてゐた所の『ワリヤグからギリシヤへの大水道』が火の消えたやうになつた、それと共にこれ等の都市々々も亦衰微し始めた。

タ、イルの侵入が完全に彼等の息の根をとめた。タ、イル族は嘗てホザール族、ベチエネーギ族、ポーロフツイ族が來たのと全く同じ方向から來た、彼等はこれ等の民族と同人種でもあつた、彼等の目的も亦同様に——人間の獲物を狩ることであつた。——しかしすべてのアジアからの侵入者の中タ、イル族は最も強く、最も組織的であつた。往時のアジア民族の侵入は都市の城壁の前で喰止められ、すべての荒廢は、又しても、農民、即ち「スメルド」(惡臭を放つ者)に限られてゐた。タ、イル族は都市を抜くことを知つてゐた、思ふに、當時まだ(十三世紀の中葉)西ヨーロッパには知られてゐなかつた所の火術さへも彼等は知つてゐたのである。ロシアのクニヤージ(公)達の軍隊はかくの如き敵を撃退し得なかつた、すべてのロシアの都市は、ノオヴゴロドを除くの外、相次いでタ、イルの手に陥ちた。タ、イル族は彼等を荒らして住民を俘虜にして運び去つたばかりで

なく、自分の權力を鞏固にする意味に於て、彼等は到る所で(再びノオヴゴロドを除きて)都市の自由を根こぎにした。クニヤージ(公)を彼等はタ、イル汗の爲めに租税を集める所の自分の代官にし、そして汗の代官に對する一切の反抗は新らしい容赦なき刑戮をもつて罰せられた。『ウエーチエ』(民選議會)は「暴動」と同じものを、『ウエーチニツク』(民選議員)は——「叛逆者」と同じものを意味するやうになつた。

タ、イルの秩序は牢乎としてルスの地に殊に北東の、モスクワ及びヴラヂミル附近に固まつた。タ、イルの課税法(歛に課税せる所謂「歛税」)は十七世紀の半ばまで存続した。吾々は後に、モスクワを中心とするルス人の團結が善き半面に於てタ、イルの仕事であつたことを見出すであらう。しかしそれは尙ほ將來に待たねばならなかつた。タ、イル入寇の直接の結果は極めて大であつた。自からの掠奪によつて疲弊し、平和な通商路の黒海及びドニエブルから地中海及びラインへの移動によつて打撃を蒙つた都市のルス人は、完全にタ、イル族によつて打ちのめされ、タ、イル族を撃退した後も容易に立直ることが出来なかつた。ロシアは吾々が見馴れた農村國になり終つた。そしてこの農村的なルスの地に出来上つた秩序は善くも悪くも、十世紀から十二世紀へかけての都市的

ナルスが見せてゐた所のものは全く異つてゐた。その初め奴隸賣買者であつた、クニヤージ(公)及び彼の貴族は、今や農耕者に變じつゝある。奴隸市場へ商品を供給する代りに、彼等は今やその獲たる俘虜を地に植えて、そして彼等から自分の「スメルド」(悪臭を放つ者)を作りつつある。すべてこのことが起つたのは、勿論、急にはなく——一二年の間ではなく、一〇—二〇年の間さへもなかつた。タ、ール侵入のよほど以前に、即ち十二世紀に貴族は金貸業者及び商賣人から農村の主人に變じつゝある、彼は、ルスカヤ・プラウダ(ロシア法典)に依れば、村を所有してをり、村には管理人と各種の労働者がある。或るクニヤージ(公)のところでは年代記がかゝる農村の奴僕の数七〇〇人と計算してゐる。他の——ガリシヤのクニヤージ(公) ロマーンについては——次ぎの如き諺さへもあるくらゐであつた。「ロマーンよ、ロマーンよ困つたら、リトワを呼べ、」何故なら彼がリトワの俘虜を地に植えて耕作せしめてゐたからである。すべてこれは、しかしながら、その初めクニヤージ(公) 達や貴族達をして掠奪をなし、且つ場合によつては、掠奪品を商ふことを妨げなかつた。その上金貸業は、「負債者」に於て労働者を見出し得る所から、極めてよく農村經濟に調和しさへもした。たゞ都市の衰微が貴族をその所領地に固着させ、そして完全に彼を「バ

リン」(旦那)たらしめ、地主たらしめたのである。

註一 ロシヤの北西の非常に古い印度・ヨーロッパ種族(その首都は最初はコヴノ、次いでウイリノであつた)。タ、ール撃退後、西部ロシヤの公國の廢墟に、一大王國を建設し、後ポーランドに合併した。(十四—十六世紀)。

都市のルス人からは(史家は普通にそれを二大都市に因んで「キエフ・ノオヴゴロド時代」と呼んでゐる)當時都市々々に於て、殊にクニヤージ(公)の邸内にあつては、人々が既に相當に智識的に發達してをり、文學的、藝術的興味、等、等を有してゐたことを示すに足る文書的記念の可成りの分量が残こされてゐる。クニヤージ(公) 達は嘗に掠奪をしたのみでなく、また戰勝の光榮にも酔つた。彼等の宮廷詩人は彼等の勝利を歌ひ、又彼等の不運を嘆いた。かゝる宮廷詩人の手に成れる一つの詩篇が——「イーゴリ遠征物語」が——完全に吾々にまで達した、それは一人のクニヤージ(公)のポーロフツイに對する不成功に終つた襲撃を物語つてゐる。他の類似の場合からは幾つかの斷片が各々のクニヤージ(公)の宮廷を中心として行はれてゐた年代記に保存されてゐる、クニヤージ(公) 達は、自分の正義若しくは隣人の不義を證據立てる必要があつた毎に、年代記を

引證することを常とした、自明のことではあるが、これ等の年代記に於てはクニヤージ（公）が最上位に置かれてあるばかりでなく、彼等については語り得べき一切の善きことが語られてあり、そして彼等の敵については一切の悪しきことが語られてある。若しもその如き年代記すらが上に述べたキエフの革命を隠蔽し得なかつたとせば、それは最早あまりにも大なる事件であり、國民の間に語られてをり、随つて年代記作者が自分のクニヤージ（公）を辯護し、一切の罪を彼の若年と悪しき忠告者、等、等に轉嫁する以外、何事をも爲し得なかつたことを意味する。概して年代記作者は極力クニヤージ（公）達を偉大にしようと努めた、そして正にこのキエフ時代のルスの年代記から近世の史家は、恰もルスの地にクニヤージ（公）が現はれたのは、秩序を立て、非道を禁じ、辱しめられた者を保護し、等、等する爲めであつたかの如き物語の多くを引出して來たのである、——それ等の物語、それは今日尙ほツァールの政府によつて流布された所の、悪しき歴史書の中に讀むことの出来るものである。

クニヤージ（公）達のこの偉大化は、年代記作者が宮廷附の人々であつたことによつてのみでなく、尙ほそれが、大部分は、宗教家、宮廷附の牧師乃至はクニヤージ（公）達によつて建立され且つ豊かに恵まれてゐた修道院の院長であつたことによつても説明せられる。讀み書の出来る俗人は當時まだ甚だすくなかつた、ルスカヤ・ブラウダ（ロシア法典）は、例へば、文書に記された條約をまだ知つてゐない、然るに僧侶は皆その時代にも悉く文字を解してゐた、自然、彼等は最も屢々著述家でもあつた。しかしキリスト教々會はロシアに於けるその存立と繁榮とをクニヤージ（公）と貴族達とに負うてゐる。社會の上層が形成され始めた時（上記参照）、彼等は古い、スラヴ固有の宗教的儀式とスラヴ固有の祈禱者、「妖術者」を嫌つて、ギリシヤの絹織物や黄金の裝飾品と一緒にギリシヤの儀式をも、ギリシヤの「妖術者」なる、牧師をも註文し始めた。

正教々會は、勿論、所謂「ルス人の洗禮」なるこの事件の意義を大々的に吹き立てた、しかし實際には變化はまつたく外面的であり、單に儀式上の變化が行はれたのみであつて、宗教的信仰は洗禮の前後ともに、當時に於ても、又その後にも、吾々の時代に至るまで——アニミズム¹⁾（精神自存論）、即ち全世界は善惡の靈魂の無數によつて住まはれてをり、しかし悪しき靈魂は善き靈魂よりもその數が多く、世界に起こる一切の出來事がそれに依倚し、——天體の運行、天候、收穫、人間の幸不幸、——すべてそれはこれ等の移り氣なる靈魂の意志によつて規定されると云ふ信仰に留ま

つてゐた。

註一 ラテン語の「アニムス」(精神)より。

アニミズム(精神自存論)は嘗て全人類の基礎的信仰であつた、そしてそれは今日まで言語の中に生きてゐる。吾々が「太陽は上る」と言ふ時、吾々は今から數千年前に生存した所の、そして眞に、太陽は生ける存在であり、それは毎晩寢に就いてそして朝になると寢床から起上がるのであると信じてゐた所の人間の言葉を繰返してゐるのである。吾々が「森は騒ぐ」、「川は走る」と言ふ時、吾々は正にそれによつて彼等を生ける存在として描いてゐるのである。しかし今日それは——單なる言葉である、が嘗て人間は、繰返して言ふが、眞實に、全自然を生きてゐるものと信じてゐたのである。全自然を動かす、又人間の生存がそれに依倚してゐる所の靈魂は、勿論、甚だしく恐れられた。百方彼等を鎮めるべく努めた、そして無邪氣にもこれ等の靈魂が人間と同様の要求を持つてゐると考へた所から、これ等の靈魂に喰はせ、衣服をさへ與へ、——と口に言つて、彼等に不平といふものが無いやうに彼等を厚遇することに努めた。キリスト教が現はれた時、以前の靈魂に尙ほ多くの新らしいキリスト教的の、天使と聖者とが附加へられた。しかし一般的に言つてこれ等の

信仰はすこしも變らなかつた。犠牲を供へることも續けられた、たゞ直接に牝鳥や羊や馬や或は又その他のものを靈魂に與へる代りに、それは、如何にしてか相手の聖靈を厚遇し又は相手の惡靈を嚇かすことが出来ると思はれてゐた所の僧侶に渡された。キリスト教の僧侶は、かくて、恰も前もつて運命を豫知してゐたかに思はれたかの妖術者乃至祈禱者と交代した。

この信仰は、一見して思はれる如くには、爾かく無意味なるものではなかつた。一般に無意味なるものは何物も歴史上に存しない、隨つて問題の靈魂も亦無意味に人間によつて考へ出されたものではなかつた。それはその初め人間が何物にも優してこの世に於て恐れてゐた所の死者の靈魂であつた、が人間が死者を恐れたのは死者が彼に死を思ひ出させたからである、死、それは一切の生けるものが最も恐れる所の滅亡である。かくて、靈魂に對する恐怖は死の恐怖の特殊の形式、即ち一切の生けるものに共通する自己保存の感情の特殊の形式である。人間は最初死者そのもの、死骸そのものを恐れてゐた、出来るだけ速かにそれから避けることを努め、彼等に近付くことを恐れ、近付いた後にはあらゆる方法をもつて身を清め、^{からだ}身體を洗ひ、等、等した。何人も容易にこのことがどれほど迄に實際的に有益であつたかを想像し得る、若しも死者が疫病で死んだか、又は一般に腐

敗しつゝある死屍があらゆる毒素に充たされてゐるとせば、この死屍に對し、又これに近付く際に慎重なる注意を人間が拂つたのは、本質的に、聰明に行動したのである。かくて、人間の行爲そのものがこの場合くだらなかつたのではなく、くだらないのはこれ等の行爲に結び付けられた信仰、彼がこれ等の行動に與へたところの説明、及び、何よりも先づ、有害なのは解體しつゝある死屍そのものではなくして、その中に隠れてゐる所の、随つて何人も嘗てそれを「靈魂」なるものがたゞ臆病なる野蠻人の想像の中のみ存在した理由によつて、見たことがなかつたし又見るを得なかつた或るどんなかの「靈魂」が有害なのだ云ふ信仰である。

古代ロシヤのアニミズム（精神自存論）は特に明瞭に「聖僧傳」の中に、別しては古代ロシヤの主要なる修道院——キエオ・ペチェールスキ修道院の僧侶達の生活に取材せる物語の集成の中に反映してゐる。古代ロシヤの苦行者乃至僧侶の全生活は各種の「惡靈」即ちキリスト教に敵對の靈魂との無数の競り合ひから成つてゐた、その際僧侶の味方となつたものは「善靈」、即ちキリスト教的の靈魂、聖者と天使とであつた。因みに吾々は、古代ロシヤの修道院に於て何一つ無報酬でなされたことがなく、金を出さずには僧侶になることも出来なかつたこと、——一言にして言へば、す

べてのものが、古代ロシヤの都市の生活も亦さうであつた如く、同じ商業的精神に浸潤させられてゐたことを知つてゐる。

第二章 モスクワ國家の形成

十三世紀へかけて、即ち今から凡そ六〇〇年前に、今日の中部ロシアの地にフエオドリズム(封建制度)と呼ばなされてゐる諸制度が確立した。これ等の諸制度の本質は、全部の土地がその全部の住民と共に、自分の武装された下部しもを率ゐて勤勞者階級を支配しつゝある少數の武士の權力の中にあると云ふことに存する。これ等の武士を、實は、土地所有者と呼ぶことは出来なかつた、何故なら耕されてゐない、森林に覆はれた、自然のままの土地はその當時いくらでも好むだけ在つた、隨つてそれ自身としては何等の價值をも持つてゐなかつたから、しかし森林と沼澤の間々には農民・農耕者の、一部は魚を捉へ、獸を殺し、蜜蜂を飼養してゐた農民・狩獵者の小村が散らばつてゐた。そして正にこれ等の農民の生産した所のものが、支配的武士階級の手てに陥おつたのである。西ヨーロッパに於ける如く、その如く吾々のところに於ても、ロシアに於ても、この階級は同等な人々から構成されてはゐなかつた。それ或は他の領主、ロシア語で云ふ——「バイーリン」(貴人)

「バイーリン」(且那)が多數の村を領有してゐればゐるほど、彼の意義は大であつた。吾々のところではその最大なるものがクニヤージ(公)、より小なるものが——貴族、それよりも尙ほ小なるものが——貴族の子達と呼ばれてゐた。西ヨーロッパに於ては階段はより長く、又その関係もより複雑であつた、——そこでは吾々は「侯爵」、「伯爵」、「子爵」、「男爵」等、等を發見する。しかし根本はかしこに於ても又こゝに於ても一つであつた。より小なる領主は普通により大なるものに對して主従關係にあつた。何故に彼等にはさうすることが必要であつたか？ 何となれば封建社會に於てはすべてが強制の上に基礎を置かれてをり、従つてより劣弱なる人間は、たとひ彼が武装してをり又は武装せる家臣を持つてゐるにせよ、常に彼よりも強大な隣人が彼を攻撃し、彼自身を奴隷にし、さうでなければ、少くとも、彼を屋敷から追出し、屋敷を燒き拂ひ、そして村を農民ごと占有するかも知れないことが期待し得たからである。

註一 「フエオド」(武士の封領地)より。

農民自身について言へば、彼等を當時農奴と呼ぶことは出来なかつた。農民的定着は六〇〇年前のロシアには單にその當時の村落に如何なる「定着的なる」鞏固なる關係も存しなかつたことによ

つて存在し得なかつた。吾々が今指示した如く、土地は十二分にあつた。農耕者は見通すことの出
來ない森林中を移動した、これ等の森林の區劃々々を伐採し、それを焼き拂ひ、そこへ耕地を設定
した。これ等の場所が收穫を與へることを止めた時、彼等は他の場所へと移つて行つた。かくて、
當時のロシヤの住民は絶えず或る場所から成る場所へと移動してゐた。孫は極く稀にしか祖父の生
れた場所で死ななかつた。自分の一生の間にさへ農民はその耕地を十回どころか數十回も變更せね
ばならぬ者もあつた。かくの如き住民の移動性に際しては、この住民を或るどんなかの場所に定着
せしめることは支配階級にとつて全く何の利益もなかつた。農民が土地及び所有者に定着させられ
たのは餘程のちになつて、狭くなり始め、土地がすくなくなり始め、最初は荒原耕作法、次いで三
圃輪植法による正規的な經濟が現はれ始めてからである。

吾々は今、領主自身が互に同等でなかつたことを述べた。しかし、彼等の一人が支配し、他の者
達が無條件に服従してゐたかの如く考へてはならない。否。若しも小領主が絶えず彼等をより大な
る者が奪掠し蹂躪するかも知れないと恐れてゐたとせば、大なる者も亦他の大領主と、たゞその配
下（西ヨーロッパに於ては彼等はワツサールと呼ばれてゐた）の多數に依據してのみ、戦ふこと

が出来た。この場合從屬は、かくて、相互的であつた。されば封建社會は、それが武士階級に關す
る限りは、條約によりて相互に關係づけられた人々の團體であると解されなければならぬ。この條
約の内容は常に一樣であつた、それは大領主が小領主に保護と庇護とを約し、その代りに小領主が
彼等の招きに應じて、即ち大領主（西ヨーロッパに於ては彼はシュゼレーンと呼ばれてゐた）が、
要求した場合には、直ちに馬に跨がつて「奴僕を率ゐる武器を携へて、」即ち武装された奴僕の一隊を
率ゐ、自分自身の甲冑を着けて現はれることを約することに在つた。これ等の武装された侍達（古
代ロシヤに於ては彼等は「ボスルジレットツ」と呼ばれてゐた）にも亦同様に管理をさせる爲めに
村が、時としては數個の村とその附近の地方とが、彼等を彼等の主人に緊密に結び付ける爲めに、
與へられてゐた事を附加へて置かねばならぬ。これ等の武装された家來から次第に小領主の全き階
級が形成され、それは後に地主と呼ばれるやうになり、そして彼等から後世の小貴族階級ドворяニストが構成さ
れたのである。吾々の見る如く、すべてそれは——その不斷の職務から見て、武士である。彼等は
經濟しなかつた、經濟し得なかつたし又欲しもしなかつた。成程、彼等のところにはその小舎の近
くに小さな耕地、菜園、林檎、杏、等、等を植ゑ込まれた庭園があつた、しかしすべてそれは自家

の常用に使はれるだけであつた。何一つその中からは外へ出て行かなかつた。全くそれと同様に彼等の農民も亦自分の労働の生産物を賣ることをしなかつた、自分のバーリン（旦那）への年貢は自然物で支拂つた。軒毎に、例へば、羊一頭、脂肪五クルグ、小麦一袋、等、等を與へた。この方法で、即ち自然物徴集の手段によつて、原料のみでなく、また加工品をも受取つた。例へば、鍛冶工は斧をもつて領主に年貢を拂ひ、さうでなければ及び彼の武装された奴僕のために鎖帷子、双劍、等、等を拵へた。大工は領主の爲めに小舎を建て、皮剥師は彼の爲めに皮を鞣し、靴工はこの鞣皮をもつて靴を作つた。各々の領主は、その小なる者さへも、かくて、自領の人々の奉仕によつて済ますべく努めてゐた。

近隣の村落及び農村の範圍を越えての遠方との交易は、何よりも先づ絶間ない封建的戦争によつて阻礙された。商人はこの世界に於ては稀なる現象であつた。普通に彼等は日常の必需品ではなく、贅澤品を携へて歩いた、高價なる絹織物、高價なる武器、婦女子の装身具、舶來の酒、外國産の果實、等、等。これ等の稀なる商人達を領主は争うて掠奪した。或る者は自分の武装された奴僕と共に商人達を襲撃しながら、直接に又手軽にそれをやつてのけた、他の者は、黄金の卵を産むと

ころの牝鳥を割くことを欲しないで、自分の領分内に税關——古代ロシア語の「ムイト」——を設けて、より注意深く行動した、そして領分を通過する各々の商人から一種の租税を要求した。かゝる領分の幾十を通過した後、それでもつて當時のヨーロッパ及び當時のロシアがざわめいてゐたのであるが、商人は大抵まる裸に剝ぎ取られてゐた。明かに、商賣をしようとする大なる慾望をかくの如き制度は起こさせ得なかつた、又「ムイタルストオ」なる語が何故に「苦痛」を意味するやうになつたか理解できる。

吾々は領主間に絶えざる競合ひが行はれてゐたことを述べた。これ等の競合ひに於ては力の強い地主が小さい者を滅ぼした、勿論、直接に商人達を掠奪することが稀であつたやうに、直接に滅ぼしてしまふことは極めて稀であつた。遙かに屢々大領主がより小さい者を自分に奉仕せしむることが行はれた。その又彼等を自分に隷屬せしめんと覘つてゐるより有力なる大領主があつた。屢々この領主はまた尙ほ一層強大なる競争者を有してゐた。かくて、次第に、封建的の渾沌の中から或る何か全體的なるものが形づくられるに至り、封建君主國（統一的權力）が形成されなければならなかつた。正にこの個々の領主の一人を中心としての集合の道によつて強大なる西ヨーロッパの諸國

家は發生したのである。かくして例へば中世のフランス王國が建設され、同様にしてモスクワ帝國も亦形成されたのである。

何故に吾々のところではこの結成が正にモスクワを中心として生じたのであるか？ それには、勿論、それだけの理由があつた。これ等の理由は決して、モスクワのクニヤージ（公）達が他のクニヤージ（公）達及び一般に他の領主達よりも聰明で勇敢であつたといふことに求めらるべきではない。それどころか、彼等は、すべての史家の證する所によれば、灰色の平凡な人々であつた。しかし正にその故にこそ彼等は他の者達よりも徳をしたのである。モスクワのクニヤージ（公）は吾々が語つてゐるこの時代の初めに於ては、最も小さな顯著ならぬ者の一人であつた、しかし彼は極めて都合の好い場所に坐つてゐた。モスクワを経て當時二つの道が通つてゐた、一つは他のものよりも古く、スモレンスクからクリヤヂマ河へ、西から東へのびてゐた。クリヤヂマ河畔には當時封建ロシアの都市の中の最も大なる——ヴラヂミルが立つてゐた。西方からヴラヂミル地方へ送られるすべての商品は悉くモスクワを経由した。第二の通路は北から南へ、その當時ロシアの如何なる部分にもまして西ヨーロッパと密接な關係にあつた所のノオヴゴロド地方から、非常に多くの麥を

産出する現今のリヤザンスカヤ縣へ通じてゐた。そこからは當時、自分自身の收穫のみでは不足であつた所の、ノオヴゴロドへ麥が送られてゐた。そのいづれの商品も今日から見れば非常に不十分なものではあつた（西ヨーロッパの商業もその當時にあつては商品の量が極めてすくなかつたことを思ひ合せる必要がある。例へば、中世に於て、一年間にサン・ゴタルド越えによつてイタリアからドイツへ輸出された商品全部は、今日のサン・ゴタルド鐵道の貨車二輛が樂に運ぶことが出来るであらう）。しかし重大なことは、すべてこの大ならざる商品の移動が不可避免的にモスクワを経由したといふこと、即ち、言葉を換へて言へば、モスクワのクニヤージ（公）が他の誰よりも多く商人達からムイト（冥加金）を徵集することが出来たといふことである。それと同時に、また一部分同じ理由によつて、あらゆる他の自然物による年貢及びオブローク（準小作料）も彼のところでは餘計に農民から上つた、何故ならモスクワの附近の農民人口は他の地方よりも稠密であつたから。それはロシアの國土の最中心地に轄晦してゐたモスクワ公國が、邊境の地よりも定住の爲めにより多く安全であつたことによつて説明される。その上モスクワのクニヤージ（公）は、地の利を占めてよい収入を得てゐるところから、他の者達よりも遙かに好戰的でなかつた、従つて戰爭の危険がよ

り少なかつたところから、人々は好んで彼の領内に移り住んだ。すべてこれによつて、早くも十四世紀の初葉にはモスクワのクニヤージ（公）は『カリータ』、即ち金袋なる異名を取つてゐた。しかし、最も富裕ではあるが、彼はまた最も強いクニヤージ（公）ではなかつた。それがまた彼には都合だつた。彼よりもリヤザン若しくはニジエゴロド、殊にトウエーリのクニヤージ（公）が當時遙かに強かつた。しかし總てこれ等のクニヤージ（公）達がモスクワのクニヤージ（公）と共に當時タ、ールのカン（汗）の配下であり、ワツサールであつたことを忘れてはならぬ。カン（汗）はロシアのクニヤージ（公）達に極めて猜疑的に對してゐた、そして決して彼等の中の強き者を助けることをしなかつた、何故なら強いクニヤージ（公）の頭にはタ、ールの命令に背き、彼に對し叛逆を企てようとする考へが浮ばないとも限らなかつたから。現にトウエーリのクニヤージ（公）がさうであつた。此處からして——最も弱い、従つてカン（汗）の眼に最も危険性のすくない者として映じた所の、モスクワのクニヤージ（公）に特にカン（汗）が示した所の庇護が來てゐる。モスクワのクニヤージ（公）はカン（汗）の總代官となつた。彼は他のクニヤージ（公）達からタ、ールへの年貢を徴集すべく委任された。最も富裕なる者として、彼は、勿論、最も信頼するに足る收

税吏でもあつた。彼のところには常に金があつた。これ等の金を彼は貧しいクニヤージ（公）達に貸付けた、そして見よ——それ或は他の公國が封建時代に普通である所の公然たる攻略の方法によつてではなく、單に買収と抵當によつて、モスクワの手に移つたのである。最後に、このモスクワのクニヤージ（公）の外見上の微力のお蔭で、彼は尙ほ他の勢力の支持をも獲てゐる。タ、ールのカン（汗）のほかに、モスクワのクニヤージ（公）に好意を示し且つ彼を支持し始めたものにロシアの教會がある。

ロシアの正教々會は自分の存在そのものをクニヤージ（公）達に負うてゐた。それがルスの地に現はれたのは、十世紀のをはりにクニヤージ（公）ヴラヂミルが洗禮を受けた時で、そこで感謝の意味でこの教會は彼を聖者の列に加へたのである。教會はロシアに於てはクニヤージ（公）の支配の下にある宮廷附屬の官廳であつた。クニヤージの勸めによつて大主教が冊立された、彼は彼等を憐み、又彼等を自分に都合が悪くなつた時、退けた。クニヤージ（公）は修道院を建立した、そこでは彼の爲めに又彼の一族の爲めに祈禱がなされねばならなかつたし、またこれ等の修道院に於ては彼は恰も自分の領分内に於けると同様に振舞つた。若し何者かクニヤージ（公）と、教會に對す

る勢力の點で競争することが出来たとしたら、それはたゞ大商業都市の民選議會だけであつた、それは地方のクニヤージ（公）達と同様に僧正及び大司教を任免する権能を持つてゐた。民選議會は彼等を自由に黜陟した。

タ、ールの統制は正教々會をこの公と民選議會との支配から脱却せしむるに與つて力があつた。民選議會は、吾々が知つてゐる如く、タ、ールによつて手もなく壓潰された。クニヤージ（公）について言へば、宮廷附屬の官廳たることに馴れて來た教會は、今やロシアのそれ或は他のクニヤージ（公）の宮廷よりも遙かに有力な宮廷を自分の爲めに見出した。即ち、今やキエフからクリヤヂマ河畔のヴラヂミルに居を移した所の吾々の大僧正達が、タ、ールのカン（汗）と直接の關係を結んで、そして彼等から（國書ヤル、イク）を受くるやうになつた。これ等の國書に於てカン（汗）は教會にあらゆる種類の特權を約束し、課税の免除を許し、クニヤージ（公）の裁判とは獨立にすべての教會附屬の人々に對する最高の審判者たるべきことを大僧正に認めた、その唯一の條件は、教會が彼カンの爲めに又彼の一族の爲めに祈ることであつた。カン（汗）は、勿論、不信者であつた、最初は異教徒で、後にはマホメット教徒であつた、しかし正教々會はそんなことには遠慮し

なかつた。カン（汗）にとつては、ロシアの教會に於て彼等の爲めに祈禱がなされることは、好都合であつた。彼等是一个の力では自からを支へ得ないのを知つてゐた、そこでロシアの住民に、彼等カン（汗）には神自身が援助を與へてゐること、彼等は聖書に語られてある所の、神から定められたその權力であることを信じさせようと努めた。そしてロシアの僧正達及び牧師達はこの目的を達成すべくカン（汗）を助けたのである。

かくて正教々會と神を信ぜざるカン（汗）の間には同盟が結ばれた、それは正教々會にとつて、タ、ールにとつてよりも、遙かに有利なるものであつた、何故なら、タ、ールの至上權は、結局、打倒されたから。クニヤージ（公）達には、勿論、それは氣に入らなかつた、でトウエーリのクニヤージ（公）は、例へば、タ、ールに背いて、教會を自分に従はせようと企てた。ヴラヂミルの大主教は自分の爲めに廣く同盟者を探さねばならなかつた——そして先づ從順でもあれば見たところ酷いことをしさうにないモスクワのクニヤージ（公）に目をつけた。大主教ビョートルはモスクワへ居を移した、それはその時以來ロシアの教會の首都となつた。

モスクワのクニヤージ（公）は、第一に、自分の財力に、第二に——タ、ールに、第三に——教

會の支持に、依據した、そして段々にすべてのロシアのクニヤージ（公）達の頭となつた。それは割合に早く、一世紀間に起こつた。既に十四世紀の終りにモスクワのクニヤージ（公）セミヨーンイワノキツチは、それはイワン・カリータ（カリータは金袋を意味する）の息子であるが、自から雷帝と稱した、そして年代記は彼について、總てのロシアのクニヤージ（公）達が『彼の手下』に ついた、即ち彼は恰も全ロシアのシュゼレーンとなつたと書いた。これは、勿論、誇張である。全ロシアのシュゼレーンとなつたのは、十五世紀末、このクニヤージ（公）の曾孫イワン・ワシーリエキツチであつた、しかしこの誇張は、モスクワのクニヤージ（公）が既に百年前に如何に見られてゐたかを示すものである。

果して如何なる經濟的變革がこの——小さな個々の土地領有から一つの全體的なものが形成されるに至つた變化の基底に横たはつてゐたか？ それが若干の封建領主の中で重きをなせる一人を中心としての結合に局限され得べくもなかつたこと、この事實には必ずや經濟的原因がなければならなかつたこと、は明かである。モスクワを中心としての古代ロシアの統一と同時に起つたところの諸々の變化を觀察する時、吾々はこの經濟的原因なるものをそこに見るのである。初めてモスクワ

の名が記録に見えてゐる（最初の記録は一一四七年である）十二世紀には、それは當時のヴラヂミルのクニヤージ（公）ユーリイ・ドルゴルーキイの、ニエグリンナ河とモスクワ河との中間にある峻しい丘の上にあつた所の、それは丁度今クレムリの大宮殿とポロキツキイ城門のある邊であるが、一つの小領地であるに過ぎなかつた。が十四世紀末、二百年後には、モスクワ市には數千戸、即ち數萬の住民があつた。が十六世紀末、尙ほ二百年後には、モスクワは、或るイギリスの旅行者の言によれば『ロンドンよりも少し大き』かつた、即ちヨーロッパに於ける最大の都市の一つ、言ふまでもなく、ロシアに於ける最大の都市であつた。明かに、かゝる大都市の存在そのものが、ロシアは最早多數の小封領に分裂してゐるのでないことを意味してゐる。何故なら自然土地を耕すことが出來ず、又、耕さなかつたところの、従つて外部からの供給を待たねばならなかつたところの、數萬の住民を擁する都市は、たゞ麥及びその他の原料による商業に依つてのみ存在することが出來たから。若しかゝる原料が周圍の土地から搬入されなかつたとしたら、都市の住民は飢ゑの爲めに亡びたか、さうでなければ四散したかも知れないのであつた。

何者から、そして如何にこの住民は創造されたか？ それはモスクワの場合のみでなかつた。ト

ウエーリも、ヴラヂミルも、ニージニイも、リヤザンも、ヤロスラーヴリも當時既に、モスクワよりも小さいかつたとは言へ、著名なる都市々々であつた。

第一に、勿論、すべての大領主たちには、それがモスクワのクニヤージ（公）であらうとも或はトウエーリ、或はリヤザンのクニヤージ（公）であらうとも、戦闘員及び非戦闘員の、非常に多数の、數百、恐らくは、數千をもつても數へられる家來があつた。クニヤージ（公）の家來のより高級なる者は、勿論、自分の邸宅をも持つてゐた、そして彼等の各々は自分の所領地の屋敷に住んでゐた。しかしそれだけではない。領主の邸宅の周圍には常に侍ばかりでなく、その當時廓外居住者と呼ばれてゐた賤しい人々も集まつてゐた。この稱呼はその後尙ほ長く保存されてゐたが、それは彼等が都市の内部、即ちクニヤージ（公）の邸宅を中心にしてその周圍を壁をもつて繞らした所の小さい村の内にはなく、この壁の外側に、所謂廓外に住んでゐたからである、これ等の廓外居住民は、主として、吾々が往時に屢々見る、しかしながら今や次第に自分の手職をもつて單に自分の村だけ或は近くの村々だけでなく、廣くすべてのその地方の住民の需用にも應じ始めた所の、農村の手工業者であつた。最も優秀なる鍛冶工、最も優秀なる鞍工、靴工、縫工——すべて彼等は最も

強大なる領主の周圍に集まつてゐた、何故ならそこには最も利益の多い顧客がゐたし従つて最も多く儲けることが出来たから。これ等の手工業者達の厄介に最も屢々なつた者は未來の地主及び小貴族の階級である小領主の一團であつた。彼等は貧困の爲めに、大領主達の如く、多數の、各種の手職を仕込まれた人々から成る家僕を扶持するわけにはいかなかつた。最後に、贅澤品の販賣者なる商人達も亦、最も好んで、勿論、最も富裕なるクニヤージ（公）の宮廷を目差してその同じ原因から集まつて來た。そこでは何處よりも多く商品を鬻ぐことが出来た。そこには最も利益の多い購買者がゐた。十四世紀のモスクワに於て吾々は既にゼノアの植民地を経てクリミヤへ出るイタリーと盛んに交易をしてゐた所の「大商人」を見出すのである。

かくてモスクワには、封建的な住民に並んで、商工業者より成る、新興の都市の、ヨーロッパ風に言ふならば、ブルジョアの住民も形成されてゐたのである。モスクワは既に封建領主の普通に見らるゝ邸宅ではなかつた。それは文字通りの意味に於ける都市であつた、成程、その矮小にして木造の家屋により、その狭くして不潔な街路によつて都市よりもより多く村に似てゐる所の、しかし既に「モスクワは——大きな村だ」といふ俚諺に背かない所の中世の都市ではあつたが。そして

繰返して言ふが、それは當時のロシアに於ける唯一つの都市ではなかつた。かゝる都市の幾つかを吾々は既に擧げた。しかしそれ等に尙ほモスクワに次いで最も大なる且つ商業關係に於ては當時より多く著名であつたウオルフ河畔のノオヴゴロドを加へる必要がある。これ等の二大都市、モスクワとノオヴゴロドとの闘争をもつて、モスクワ國家の形成は終りを告げるのである。モスクワがノオヴゴロドを征服した時、彼女は眞に全ルランドの首都となり、そして彼女のクニヤージ(公)は——全ロシアのクニヤージ(公)達の旗頭、シユゼレーンとなつた。

第三章 モスクワとノオヴゴロドの闘争

ノオヴゴロドが同様にその有利な地位のお蔭で、大商業の中心になつたのは、モスクワよりも遙か以前であつた。

ノオヴゴロドはバルチック海方面へ出る水路の交叉點に立つてゐた。ウオルホフ河、ラドガ湖及びネヴ河をもつて彼はこの最後のものの最東端に位するフィンランド灣と結付いてをり、ウオルホフ河の水源であるイリメン湖の諸流域をもつては、彼はヴォルガの上流と結付いてゐる、そこからはあまり大ならざる地峽、即ち兩河間の連絡運搬によつて、容易に商品をノオヴゴロド方面に移動することが出来た。

同時にラドガ湖、オネガ河、オネガ湖、等、等の北東に散在する河と湖との網目が彼とホモリエ地方及び北ドギナ地方とを結付けてゐた。北ドギナ、所謂ザウオロチエ地方、即ちノオヴゴロド市民が知つてゐた最大の連絡運搬である(ヴォルガと北ドギナ間の)『ウオロク』(地峽)のあちら側

にある地域が、ノオヴゴロドの最初の植民地となつた。この植民地はノオヴゴロドの市民に外國貿易の最貴重品の一つ、即ちノオヴゴロド地方が西ヨーロッパ全體に供給しつゝあつた毛皮を得させたと共に、他方、このザウオロチエ地方の最東端なる、ウラルからは、そこまでノオヴゴロドの植民者は達してゐたのであるが（因みにギヤトカ市は彼等によつて建設されたのである）、ノオヴゴロドの市民は銀を受取つた。當時貴金屬は甚だ少くなかつた、従つて貴金屬の領有は、既にそれ丈でそれ或は他の都市にとつて、假令それが地理的に甚だしく有利な條件の下になかつたとしても、意義があつたほど、重要であつた。例へば、中央ドイツに於て全く名もなき小市街——ゴスラルが異常なる發展を示したのは、全く附近のハルツワルドからその當時銀が採掘されたからで、しかもその産出額は、今日これ等の銀鑛が全く廢坑となつてゐるほどに取るに足らざるものであつた、しかし當時にあつては彼等は至大なる意義を有してゐた、何故なら、繰返して言ふが、アメリカが発見されるまでヨーロッパ大陸には貴金屬が極めて乏しく、しかも商業資本主義は彼等を必要としたから。

高價なる商品と中世に於ける主たる交換要具——銀を擁して、ノオヴゴロドはバルチック沿岸及びライン・ドイツの諸商業都市、ハンザ同盟と密接な關係を結んでゐた。ノオヴゴロドには常にハ

ンザ同盟の商人達が住んでゐた、そこに自分の商館と倉庫とを持つてゐた。ノオヴゴロドはかくてその當時西ヨーロッパと直接の關係にあつた唯一つのロシアの都市であつた。その爲めにノオヴゴロドに於ては西ヨーロッパ文化の影響がより多く感ぜられた。それは藝術にも——例へば、ノオヴゴロドの主なる大寺院、ノオヴゴロドの聖ソフィヤ寺の有名な、ドイツに於て製作された「コルスンスキエ・ウラータ」の如き、——宗教にも（西ヨーロッパからノオヴゴロドへ入り込んだストリゴリーニツク及びジドフストヴューシチイ宗派の如き）、日常生活にも反映してゐた、——富裕なるノオヴゴロドの市民はフランドル（今のベルギー）産のラシヤ、等、等を着てゐた。商業のお蔭でノオヴゴロドには、ロシアの如何なる他の部分よりも早く、商業資本主義が行はれ始めてゐる、即ち交換要具が少數者の手に集中されてゐる。斯くの如きロシアに於ける最初の富豪であつたのがノオヴゴロドの大貴族達、ノオヴゴロドの領主達、他の領主達を掠奪するよりは、より多く富めるザウオロチエ地方を掠奪して、そしてその最初の植民者となり征服者となつた所の（後代アメリカに於てスペイン人がさうであつたやうに）、ノオヴゴロドの地主達である。掠奪品を金に換へて、これ等の富裕なるノオヴゴロドの貴族達は、ルスの地より南方に横たはつてゐた所の、今日のトウエー

ルスカヤ、ヤロスラーフスカヤ、ヴラヂミルスカヤ諸縣に西ヨーロッパの商品を供給してゐたより小さい商人達に向かつて資金を貸付け、そしてその代りに原料、特にノオヴゴロドの市民に必要な麥を受取つた。

この商業のお蔭で鞏固になつたノオヴゴロドは、吾々が見る如く、モスクワのウエリーキイ・クニヤージ（大公）の未來の支配權と密接に關係してゐた。

ノオヴゴロドの住民の上層階級を成してゐたところの大貴族と大商人との外に、そこには、モスクワ以上に、五つの部分乃至區劃に分れてゐたこの都市まちの住民を成し立ててゐた所の手工業者、小商人、舗商人、等、等の多數が集まつてゐた。これ等の五大區劃が何者によつて住まはれてゐたかはその名稱が表示してゐる、一つはプロニツキイ區（プロトニツク——大工より）と呼ばれ、他はゴンチャルヌイ區（ゴンチャル——陶工より）等、等と呼ばれてゐた。すべてこの住民は大商業都市には必要缺くべからざるものであつた、そしてこの原因から彼等は直きに、嘗て大領主の都であつた所の他の都市まち々々の住民が持つてゐなかつた自由を戦ひとつた。大貴族及び大商人には、市内及びその附近の地方の或る程度までの靜謐が利益でもあり又必要でさへあつた、でなければ異國人

はそこへ入り込むことをしないであらう。爾餘の封建的ロシヤに反して、ノオヴゴロドには或る程度の秩序が存在した。この秩序を尊重する結果として、ノオヴゴロドの資本家達は彼等にとつて必要缺くべからざるものであつた所の住民に對して或る程度までの讓歩をしなければならなかつた。かかる秩序はひとりノオヴゴロドに於てのみならず、中世のヨーロッパのすべての大商業都市に於ても亦保持されてゐたのである。何處でもより鞏固なる商業組織の必要が、封建的所領地に於て全く奴隸化されてゐた所の、住民の下層階級をして、都市に於ては、或る程度までの自由を獲得せしめてゐる。かくしてフランスのコムミュン（自治邑）が形成され、かくしてドイツの都市組合が形成され、市民の爲めの各種の特權を有する所謂マグデブルグの權利、等、等が発生したのである。このことは毫しも、ノオヴゴロドの地が自由であつたことを意味しない。反對に、ノオヴゴロド地方の農村の住民は、この地方がその經濟的發達に於てロシヤの他の部分よりも進んでゐたといふ正にそのことの爲めに、より以上に擄取されてゐた。ノオヴゴロド地方に於てはスメルド（惡臭を放つ者）が他の如何なる場所よりも前に、眞の意味の農奴になり始めてゐる。即ち土地と所有者とに定着させられてゐる。しかし彼等は自分の主人のみでなく、またノオヴゴロド組合全體の農奴で

もあつた。都市ノオヴゴロドはノオヴゴロドの地方全體の上に立つてゐた一種の巨大なる主人であつた。この土地の住民は、かくて、都市そのものの内部に存在した所の或る程度の自由なる秩序に對して全く無關心であつた。

この都市は、言葉の上ではクニヤージ(公)達に服従してゐたが、實際には共和國であつた。彼は自分の大統領——代行者、自分の軍司令官——統裁官、裁判官、各州の長官、等、等を任命し更迭した。しかしすべての事件に關與したのはたゞ狭い意味に於ける都市の住民だけであつた。かくの如きは、繰返して言ふが、到る所に於てであつた、吾々のノオヴゴロドに於てばかりでなく、全西ヨーロッパに於て、すべての商業都市に於てさうであつた。都市の空氣は人間を自由にした、そこで多くの都市々々には、都市に一年或は一日暮す人間は、既にそのお蔭で自由になるといふ規則があつた。しかし一步都市の外へ足を踏み出すなら、そこには早くも封建的な奴隸の國土が廣がつてゐた。

モスクワのブルジョアジイは非常にノオヴゴロドのブルジョアジイを羨んでゐた。モスクワが大都市になるに連れて、彼女の大商人達は層一層、苟もロシヤの地に於て獲得しうる一切の利益を悉く自分の手に收めようと欲した。モスクワに於ても同様に商業資本が蓄積され始めた、即ち交換要具が少数者の手に集中され始めた。此處にモスクワとノヴゴロドとの絶えざる衝突が由來する、その口實は種々様々ではあつたが、しかしその眞の原因はたゞ一つ、モスクワがノオヴゴロドから毛皮と銀の産地ザウオロチエを奪はうと欲したことである。これ等の衝突に於て秤は常にモスクワの側に傾いた、何故ならすべての爾餘のクニヤージ(公)達をその手の下に集めてゐた所のモスクワのクニヤージ(公)の指導の下に、モスクワは、一の中心から指揮されてゐた強大な兵力、當時全ロシヤが恐怖してゐた所のタ、ールの乗馬隊によつて支援され、一層脅威的なものとなつてゐた兵力を示したのに對して、ノオヴゴロドには何等その如きものが無かつたからである。

吾々は既にノオヴゴロド地方の農村の住民が全くノオヴゴロドの擁護に無關心であつたことを述べた、何故なら何等よきものをその支配から期待してゐなかつたし、従つて彼には、この農村の住民には、何者の権力の下にあらうとも——それがノオヴゴロドとその貴族達であらうとも、或はモスクワの貴族達とモスクワのウエリーキイ・クニヤージ(大公)であらうとも、同じことであつたから。吾々は同様に、ノオヴゴロドの住民の支配階級の中にも一致が存しなかつたことを見た。ノ

オヴゴロドの獨立は、主として、都市の住民の下層に依據してゐた所のノオヴゴロドの貴族達が守護した、ノオヴゴロドの商人達は「下流」ヴオルガがノオヴゴロトの下方にあつたところから、ヴオルガ沿岸地方がさう呼ばれてゐた」との良好なる關係を維持することに汲々としてゐた。下流に於ける商業がノオヴゴロドの商人達の主たる商賣であつた、従つてモスクワとの戦争はノオヴゴロドの商人團から利得のすべての源泉を奪ふことであつた。商人團、即ちノオヴゴロドの全中流階級は、それ故に、極めて不活潑に貴族達を支持した。その結果、數次の戦争の後に、モスクワはノオヴゴロドを征服した、モスクワのウエリーキイ・クニヤージ（大公）は北方の商業中心地（ノオヴゴロドの他に、彼のブリゴロド「附屬市」であるブスコフが大なる商業的意義を有してゐた）を従へ、そこに於てモスクワ河の畔に於けると同様の主人となり、そして直ちに、この闘争に於て何者の彼が道具であつたかを示した、ノオヴゴロドに於て商館を閉鎖した後に、ノオヴゴロド及びブスコフの商人達を「下流」に移し、そしてその跡へモスクワの商人の數百を送つた。このことの後モスクワのブルジョアジエは商業的にも當時のロシアの全版國に互つて完全なる主婦となつた。すべての細分された封建的所領地と自由都市とから一つの大きなモスクワ帝國が形成された。

第四章 モスクワ封建制度の崩壊、商品經濟と農奴制度

モスクワ帝國は、その構成要素であつた個々の小さな封領地に比すれば、既に遙かに複雑な全體であつた。細分された大小の封領地——封公國——はいづれも皆その周圍に市場と相當に大きな村々とを控へたクニヤージ（公）の宅若しくは修道院から出來てゐた。それが首都であつた。モスクワ帝國の首都は、吾々が既に上に述べた如く、歴大な、その當時にしては歴大な、都市、當時のヨーロッパの最大都市の一つであつた。封公國の首都は、封公の邸宅の近くに居住し或は修道院の周圍の自由村に住んでゐた少數の手工業者達が、その手職の粗雑な生産品を供給しつゝあつたところの、近隣の農村や郡から原料を受取つて、生活を維持しゆくことが出來た。モスクワはかゝる方法にては存在し得なかつた、彼女は原料の巨大なる分量を、屢々非常な遠方から吸収した。この原料は屢々モスクワには留まらないで、例へば毛皮の場合の如く、尙ほ遙かに遠方へと出て行つた。しかしその場で費消された原料だけでも、巨大なる分量が要求された、ヤロスラーフスカヤ街道に

沿うてモスクワに搬入される食糧だけでも毎日貨車七〇〇臺に及んだ。

この歴大なる都市はどうしてその生活を維持してゐたであらうか？ 農民の手元にあつた所の、そしてそれを彼等が市場で賣拂つた所のすこしばかりの餘分では、直きに足りなくならなければならなかつたと考へらるべきである。當時の農村經濟が、今日言はれてゐる如く、極めて粗笨であつたといふこと、即ち土地がよく耕されず、施肥、等、等がされなかつた爲めに、收穫が非常にすくなかつたといふことを知らねばならぬ。當時收穫は蒔付けた種子の二倍乃至三倍であるのが普通と考へられた。住民が以前よりも餘計に働くことが、自分自身の糊口の外に尙ほ都市の市場へ供給する爲めにも働くことが、必要となつたことは明かである。これが——一つ。他方、モスクワが諸國から（最初は、吾々が見た如く、イタリーから、次いでノオヴゴロドを経てドイツ、その他から）ルスの地に入り込んで來たところの總ての商品を少しづつ吸収しながら、全ロシアの商業の中心となるに従つて、その市場には益々多く生活を美化し豊富にする事の出來るやうな品物が現はれるやうになつた、高價な模様ラシヤ、舶來の酒、各種の裝飾品、當時の食卓に必要とされた各種の香料。住民の上層である、大貴族及び小貴族はすべてこれ等のものを使ひつけてゐた、しかしすべ

てそれはたゞ金でのみ買ふことが出來た。金はクニヤージ（公）の金庫にあつた、そこから、俵給の形で、極く些細なる額がクニヤージ（公）の家來達の懐にはいつたのであつて、封建的所領地は金を生まなかつた。今やその金を、都市の市場にこの所領地から受取られた所の原料を賣つて、手に入れることが出來た。

そして今や、以前には彼自身及び彼の家臣が喰べてゐた所の羊、牝鳥、卵、等、等の形での比較的に大ならざる自然物による年貢を農民から受取ることと満足してゐた土地所有者が、自分の給養の爲めと個人的需用の爲めのみでなく、又賣る爲めにも原料を要求し始めてゐる。彼は既に麥の一定量ではなく、收穫の一定の割合、四分の一、三分の一、二分の一を要求し始め、自分の手に出來るだけ多くの麥を收めることのみを考へてゐる、何故なら彼の手に麥がはいることが多ければ多いほど、それだけ多く彼は金をも受取ることが出來るから。次いで、自然物による年貢とは別に、彼は農民に金による年貢を課し始めてゐる。眞先にあらゆる細かい税が金に換へられてゐる、何故なら小錢は都市の市場で、農村から届けられるのを待たずに、旦那が手に入れることが出來るから。最後に、農民が生産する所の原料を待つてゐずに、旦那自身が「生産」し始め、以前には爲さな

つたところの、自分の農場を經營し始めてゐる、勿論、自分の手ではなく、自分の奴隷達の手で働
きながら、彼自身はたゞ經營を掌るのみである。とは言へ、直きに、奴隷も彼には足りなくなり始
める、そしてその時彼はあらゆる正義と不正義とをもつてこの土地に農民を働かしめることを考へ
つく。

農民は、吾々が記憶してゐる如く、旦那に従屬させられてゐ、すべて必要な原料を彼に供給して
ゐた、同様に又自分の肉體的な労働をもつて彼を助けてゐた。しかしこの助力は大したものではな
かつた、農民から多くの時間を奪ふものではなかつた。今や旦那が農民のこの賦役を層一層ひき延
ばし始めてゐる。以前には、例へば、彼等は一年の中八日旦那の爲めに働いた、今や旦那は彼等か
ら一週に二日、それから三日、それからそれ以上をさへ要求しつゝある。かくて農民の年貢に並ん
で、特別なより多く苦痛なる農民の義務として、*Барщина* (賦役労働) が現はれて来る。しか
しそれでも旦那には不足である。彼は農民の労働力と彼等の時間とを悉く自分の處理に移すことを
欲する。そこで、彼は家庭を持つたばかりの若い農民が、自分の經濟を立てる場合、何者かの助力
なしには濟まないことを利用する。彼等には小舎を建てることも、財産(家畜、農具)も、蒔く種

子も、當座の食糧としての麥も、等、等も必要である。旦那はすべてこれ等のものを喜んで農民の
新家族に供給した、そしてその代償として自分の爲めに、時と共に益々苦しいものとなつた所の條
件の下に、働くべき義務を彼等に負はせた。この「貸付け」の力によつて彼は農民をザカバリヤチ
(契約) した(カバラ——古代ロシア語の借金證文)。すべてこれ等の新しい制度が農民に氣に入
らなかつたことは自明である。旦那が賦役労働へ追ひやり始めた所の舊來の農民、舊土着農民も、
より大なる程度に於て年貢と賦役労働とを旦那から要求されてゐた所の、負債を負へる若い農民—
—新所帯農民も、等しくこの新らしい迫害から免れ、出來得れば彼等の旦那から遁げ去らうと努め
てゐた、その時旦那は彼よりも有力な領主達に、そして最後には、モスクワのウエリーキイ・クニ
ヤージ(大公)に歎願して、そして彼から自分の農民達を「手放さぬこと」、遁げ去つた者は搜索し
て強制的に連れ戻ることを得る特許狀を獲得した。眞先に此のごとき特許狀で自分を安全にしたの
は修道院である。吾々の知つてゐる最古のものはトロイツエ・セルギーエフスキ修道院に關する
ものである。一般に修道院は當時最も良き農村の主人であつた。彼等は商業資本の開發の事業に於
ても先頭に立つてゐた。一方には、信心深い人々の喜捨に依つて、他方には、修道院があらゆる貴

重品の保管所となつてゐたことに依つて、修道院は莫大な金額を自分の手に集中してゐた。これ等の金額をもつて彼等は商業を営んだ。ソロウエーツキイ修道院は、例へば、全ロシアに鹽を商つてゐた、キリーロ・ペローゼルスキイ修道院及びトロイツエ・セルギーエフスキイ修道院は——非常に廣い範圍に亙つて麥を商つてゐた。が第二に、彼等は零落した土地所有者のところから土地を買入れた、そしてその土地に、農民にとつて堪へ難い賦役労働と非常に厳格な秩序とを持つた最初の眞の農奴經濟を施行した。それはロシアに於ける最初の整備された農奴制所領地であつた。爾餘の領主達について言へば、彼等はこの點に於てはるかに修道院よりも後れてゐた。領主は何よりも先づ武士であつた。彼は大部分の時間を外征に取られた。大領主であればあるほど、所謂「代表權」に對する支出が嵩んだ。彼は他のより有力なる大領主達と張合ひ、彼等にひけを取らない爲めに、武装され又はされざる大邸宅を構へ、美服を纏はねばならなかつた。最後に、彼自身も他の者達に劣らず楽しく暮し、飲み且つ喰ふことを欲した。此處からして、彼の農民が生産した所のものを市場に賣つて收得したものが、非常に速かに彼の懐から出て行つた、彼は尙ほ一層、主として前記の修道院から、借金をした、そして、結局、自分自身の農民と同様消却し得ざる負債を負へる者の境遇

に陥つた。それは、大領主達、特に上層階級が、新經濟のお蔭で、榮えたよりも、寧ろ零落したことを意味する。

屢々農民若しくは奴隸から出た小地主が遙かに經濟的に成功した、彼等は時に吝しく貧しく暮した、しかしその代り彼が金を貸付けてゐた所の多からぬ農民を手に入れることが出来た。この小地主は普通に古くから耕された地方で土地を得ることは出来なかつた、そしてそのお蔭で、一種の植民者たるに至つた、彼は新しい村をこしらへた、そしてそこへ農民を移した。しかし小土地所有者は大土地所有者よりも、彼等のところには農民が遙かにすくなかつたといふ正にその故に、遙かに多く農民を搾取したところから、農民は彼等のところへ行くことを好まなかつた。小地主達は羨望を持つて大領地を眺めた、そこには多數の農民がゐた、そこには多くの耕された（開墾された）土地があつた、しかもその所有者達、「怠惰な富豪達」は、寢をべつて、舶來の酒と蜜とを舐め、彼等の見る所に依れば、何事をも爲さず、たゞ無暗に金を撒き散らしてゐるだけであつた。敵意を持つて小地主達は富裕な修道院をも眺めた、彼等は莫大なる資本を擁してゐる所から、その資金と言へば小額の俸給、軍務に對して、外征の報酬として受取られた些少の金額に過ぎない所の小地主達

よりも、遙かによく農民を吸収することが出来た。

かやうにして次第に封建階級は二つの或は、若し欲するならば、三つの部分にさへ分裂した、即ち廣大なる世襲地を領し、しかも益々零落しつゝあつた所の、往時のクニヤージ（公）乃至大領主の後裔である大封建貴族と、その反對に、絶大の努力をもつて新經濟を打立て、謂はゆる、爪に火を點して何かすこしばかりの財産を築きあげて世間へ浮び出て來た所の、小貴族と。がこの二つの階級に並んで双方からし等しく憎惡をもつて見られてゐた教會による大規模の土地領有が立つてゐた。これ等の三つの階級、大貴族、教會、小貴族がロシアの農村の上に君臨してゐた、が都市に於ては更に第四の勢力が益々強く、根を張つてゐた、それは——主として、外國と取引をしてゐた所の、少數の富商達——自分の番に於て、小商人團と賤しい人々の一團、即ち舗商人、手工業者、等、等を金で自分に縛り付けてゐた所の、ノオヴゴロドに於て彼等が獲てゐた如き自由は戦ひとつてゐなかつたけれども、しかも依然としてモスクワのクニヤージ（公）さへも一目置かざるを得なかつた所の勢力を有してゐた大商人の手に集中されてゐた、商業資本の勢力である。

正にこの如き要素から十六世紀に於けるモスクワの社會は出來てゐた。これ等の夫々に異つた階

級間の關係が友誼的であり得なかつたこと、彼等の間には、嘗て封建領主間に起つたと同様に、鬭争が起らねばならず、そこでは最も強き者が勝利を占めなければならなかつたことは見易き道理である。その最も強き者であつたのが金を渴望し土地を渴望してゐる小貴族に有力な味方を見出してゐた所の、勃興しつゝある、組織化しつゝある商業資本である。

これ等の、以前よりも、遙かに複雑化した關係から、十六世紀及び十七世紀初頭のロシア史に於てし付けられてゐる一切の變轉と動搖は發してゐる。その際當時の支配階級が既に、以前よりも、遙かに教養があり、彼等の間には非常に多くの文字を解する者、自分の思想を紙の上に述べることに馴れてゐた者があつた所から、鬭争は、以前よりも、遙かに意識的であつた。往時は或るどんなかの領主が、最も亂暴な、アフリカの蠻人に相應しい策略をもつて自分の隣人から土地を劫奪した後、修道院を建立するか或は、少くとも、既に存在してゐるものに掠奪物の一半を與へて、自分の罪業を消滅しようと努めてゐたばかりであつた。それ以上に彼によつて犯された罪の意識は進まなかつた。今や夫々の階級が、自分の正しいことを證據立てようと努めながら、相互に土地と勤勞階級に對する権力とを争奪しつゝある。外國人によつて書かれた歴史或は聖書、等、等からの引例を

もつて、彼等に必要なことが、すべての者にとつても亦非常にいゝことであるかの如く見せかけようと苦心した。時には虐げられ辱しめられた者達の味方となり、さながら國民大衆とその利益との代辯者でもあるかの如く振舞つてさへゐる。

十六世紀に吾々のところには突然、十四世紀のモスクワに夢想だもし得なかつた所の、政治文學政論が現はれてゐる、そしてこの鬭争の意識性がそれを、勿論、尙ほ一層鮮明な興味あるものにしてゐる。類似の場合に於て常にさうであるやうに、このルス人の間に成長しつゝある政論に於て最も才能ある者として現はれてゐるのは自分の爲めに道を拓り開きつゝある人々の新しい階級——新莊園的土地所有と都市の階級、ブルジョアジーの代表者である。彼等から當時の政論の最もよき作品が今日に傳はつた。これ等の作品から吾々は當時の階級鬭争について、——何を彼等が望んでゐたかを判断する事が出来る。十六世紀の中葉に或る小貴族土地所有の代表者が、ベレスウエートフなる名に隠れて、慘酷に大貴族を攻撃してゐる、大貴族、即ち「怠惰なる裕福者」は必ずやモスクワ帝國とその元首とを滅亡に導くに相違ないことを證據立てながら。彼は大貴族から權力を剝奪することを要求してゐる、そして土地所有者によつてではなく、俸給による官吏によつて政治を

行はれる所の、同様に雇傭の且つ當時に於ける戰術の最後の言葉なる——「火戦を有する。」即ち飛び道具をもつて武装された常備軍と、正しく編制された裁判と、諸税の正しい徴集、等、等を有する警察國家の豫圖を興へてゐる。そのプログラムはベレスウエートの死後百年を経て漸くルスの地に實現せられた如き廣汎なものである。殊に小貴族階級の政論家は強硬なる外交政策を主張した、彼は武力的征服を要求した。何よりも先づカザンの攻略を、次いで一般に攻撃的な、侵略的な戦争を。吾々は既に、當時の富裕ならざる土地所有者にとつては、國庫から俸給を受取る以外、他に何等の最初の經濟資金を得べき源泉も存しなかつたことを述べた。俸給は遠征に對して支拂はれた。此處からして「窮迫せる武士」の集團にとつては外征は望ましいものの一つであつた、外征中に掠奪を恣にすることが出来たこと、征服の結果として、地主達が土地狹隘からの出口を見出すべく希望してゐた所の、廣大なる土地が占領されたことは今更言ふまでもない。正にこの當時カザン汗國が實際にアストラハンに至るまでの全ヴォルガ沿岸地方と共に攻略されてゐる事實は、小貴族の集團の希望が空なる響きでなかつたこと、その要求が相當に權威あるものであつたことを示すものである。

それと共に吾々はこの集團の利益と商業資本の利益とが一致してゐたことを見るのである、若しも地主にカザンの土地が必要であつたとしたら、商業資本には、ヨーロッパ大陸へ絹及びその他各種のヨーロッパに於て非常に珍重されてゐた商品を當時出してゐた所の東方諸國へのロシアからの通商路として、ヴォルガが必要であつた。地主達は、かくて、商業資本に有力なる味方を見出してゐた、そしてこの者は、自分の番に於て、吾々が記憶してゐる如く、都市住民の全大衆を自分に従屬せしめてゐた。

封建大貴族の面前に恐るべき敵が立ちだかつた。彼等は尙ほ舊い記憶によつて政治的權力を掌握し續けてゐた、彼等は小貴族階級の政論家を打ち倒さうと試みた、侵略的對外政策は神の嘉せざるところである、ツァーリ（皇帝）が流血の責めを負はねばならないこと、神自身が皇帝に、一人ではなく、必ずや大貴族達と共に國家を統治すべく命じたかの如く主張しながら、しかしすべてそれは極めて精彩に乏しく、新興階級の壓迫に對して殆ど全く無力であつた。一方これ等の最後のものは、カザンの攻略に満足せずして、他の方面にも、即ち西方に向つても侵略政策を取る事を要求し始めてゐる。ヴォルガと裏海とを仲介して、西ヨーロッパと中央アジアとを結付けてゐる大水路

の南端を占領した後、商業資本は、地主達に依倚しつゝ、この水路の北端なる——バルチック海への出口を略取すべく始めてゐる。これと關係してゐるのが、ノオヴゴロドを征服した彼のイワン・ワシールエキツチの孫であるイワン・ワシールエキツチ・グロイズヌイ（雷帝）が行つた大戦争、所謂バルチック沿岸の爲めのリウオーニヤ戦争である。

しかし當時全く分裂し疲弊してゐたタール王族の苗裔の手にあつた所の、カザンとアストラハンを占領することは、比較的容易であつた、それに反してバルチック海沿岸に於てはモスクワ帝國は當時のロシアよりも遙かに開化せる軍國的強國——ポーランド及びスウェーデンに出會つた。リウオーニヤ戦争は失敗に終つた、がこの失敗に於て地主及び富商の團體は、勿論、何を構いても大貴族の罪を鳴らした。戦争の敗北を彼等は大貴族の裏切りに歸した。個々の場合に於ては一部分この見解は妥當であつた。リウオーニヤに於てモスクワ軍を指揮した一人の著名なる大貴族、クニヤージ（公）クルブスキイは、實際、敵側に内應した。不成功に終つた戦争は完全に地主達から外征によつて自分の土地を擴げようとする希望を奪ひ去つた。彼等は何處へも行きどころが無かつた、モスクワ帝國それ自身の版圖内にある舊大貴族の世襲地以外には、最早占領すべき何物もなかつた。

つた、同時に商業資本も戦敗によつて甚だしく氣色を害されてゐた、彼も亦その原因を大貴族の裏切りに、さうでなければ、少くとも、大貴族の怯懦と無能とに歸してゐた。

一五六四年に地主達は富裕なる商人團と共に政變を起こした。彼等は權力を握つた、が大貴族群に對しては、彼等の裏切りの故に、慘虐なるテロールが行はれた。殆ど全部の大貴族の家族が容赦なく鑿殺された、そして土地は沒收されて「特別區域」に編入された。「特別區域」、「帝領」と地主達が創設した所の國政のその新しい形式は稱せられた、その本質は、今や名義上、以前の如く皇帝と貴族會議ではなく、皇帝躬からが、政治をとることになつたことにあつた。貴族會議は保存された、しかしそれは一切の意義を喪失した。小貴族團と商人團との支配はかくて專制政治に於て、皇帝の權力の絶大なる伸張に於て表現せられた。テロールは大貴族のみに制限されなかつた、それは舊制度に結付いてゐた社會群全般の上に（教會、修道院、ノオヴゴロド商業資本主義の遺物、等、等）擴張され、國民の記憶に深く刻み込まれて、當時皇帝であつた所のイワン・ワシーリエキツチをグロズヌイ（雷帝）と綽號する動機を與へた。それは、勿論、イワンが個人として特に残酷な人間であつたこと及び彼が個人として轉換に多くの意義を有してゐたことを意味するものではない。鬭争は個人間ではなく、階級間に行はれたのである。しかしイワン雷帝がこの鬭争に至大の關係を持つてゐたこと及び彼自身が當時擡頭しつゝあつた政論家の一人でさへあつたことは興味ある事實である。國外へ遁れたクルブスキイに與へた書簡を初め、自分の親書の中で、彼は自分流にテロールを辯護して轉換の必然性を證據立てようとしてゐる。

權力を掌握した後、商業資本と中莊園的土地所有の代表者達が、決してそれを農民大衆の状態を改善する爲めに利用しなかつたことは自明である。ペレウエイトフが自分の書きものに於て極力奴隸制度を非難して、奴隸は臆病で戦争の役に立ち難いことを指摘して、國民大衆を奴隸にすることが軍事的見地からさへも不利であることを證明してゐるに拘らず。すべてこれ等のよき言葉は今やまつたく忘れ去られた。富裕なる大貴族の世襲地を領有した後、地主達はそれを掠奪し始めた、舊大貴族に夢想だもしえなかつた程度にまで農民を搾取した。農民から土地を取上げて、それを旦那の農場に變へてしまつた、屢々農民自身をも、彼等から彼等の哀れな財産を沒收して、文字通りに剥ぎ取つた。金による年貢は益々大きく／＼なつた。その筈である、往時は或るどんなかの大貴族の世襲地の農民はたゞ大貴族の一家とその家僕とを扶養してゐればよかつたが今やこの世襲地が二

十人の地主の間に分割された。従つて二十の家族と彼等の家僕とを扶養することが必要であつた。しかも土地の利用法は往時のまゝであつた。森林を拓り開いて、それを耕地にし、肥料を施さずに植付けて、そして地力が盡きると、それを棄ててしまつた。十六世紀の末葉にはモスクワ近郊に於て外國人は、彼等が嘗て聞いてゐた所の大森林の代りに、切株だけを發見した、そして土地は、その大部分が藪と矮林とに覆はれて空しく横たはつてゐたほど、地力を吸取られてゐた。

零落れた農民の群は眼の向く方へむかつて遁れた。しかし地主達は無償の勞働力と別れることを欲しなかつた、で政府に要請^{せが}んで逃亡農民に關する法律を頻りに發布させた。逃亡農民の逮捕と復歸に關するこれ等の法律が後年、恰もイワン雷帝の息子、フョードル・イワーノキツチ皇帝の時代に農民が、土地に定着させられた如く言はれる動機を與へたのである。

地主と商業資本の勝利はかくて農民に對する搾取を彌が上にも激甚ならしめた。新らしい農奴制度が現はれた、それは以前の封建制度よりも遙かに悪く、苛しかつた。そして今やこの新らしい、残酷な農奴制度が早くもロシア全體を捉へた。農民達がそれから身を隠すことが出来るやうな幸福な隅は、何處にも無かつた。農民大衆の不満は自然的に大きく／＼なつて行つた、況んやこの大衆が、掠奪的經濟の結果として、收穫が増減して行つたところから、彌益と飢饉に瀕するやうになつては尙ほ更である。

次ぎの十七世紀の初め、フョードル・イワーノキツチの後繼者なる、皇帝ボリス・ゴドノーフの御代に、この者はフョードル・イワーノキツチに嗣子が存しなかつたところから、既に直接に地主達によつて皇帝の位に推舉されたのであるが——このゴドノーフの御代に、同時代者達が最も戰慄すべき色彩を用ゐて描いてゐる所の眞の饑饉がはじまつた。當時人肉をくらふまでに及んだとさへ傳へられてゐる。果してさう云ふことがあつたか無かつたか、しかし兎に角地主達の搾取がその當時、曾て見られなかつたほどの耻知らずなものになつてゐ、農民の奴隸状態が、これまた曾て見られなかつたほど、慘澹たるものになつてゐることは事實である。農民の飢饉に乗じて、地主達は今や一塊のパンの爲めに人々を奴隸にした、しかもこの一塊のパンをも始終は農民達に與へないで、勞働時間内だけ與へ、その後では不幸なる者達をどうならうとも構はずに追拂つた。逃亡者の復歸に關する厳しい法律に拘らず、農民の四方八方への逃亡が當時一層増加したことは言ふまでもなきことである。逃亡農民から森林中に、皇帝の軍隊が彼等を一掃しようとして常に失敗を重ねてゐた所

の、武装された軍隊が編制された。しかし最も覇氣に富んだ精力的な者達は附近の森林中に遁げ込むだけで満足しなかつたが、當時尙ほ労働者の手がすくなかつた所の、それ故にそこでは地主達が農民を大切にしなければならなかつた所の、又最後の者が自から漸を追うて一種の地主、獨立の土地所有者となることもさまで困難でなかつた所の、モスクワ帝國の邊境にまで脱出しようとする努力をなした。ロシヤの南境、今日のリヤザンスカヤ、ツーリスカヤ、カルージスカヤ諸縣の南方、又モスクワ帝國の版圖内に入つてゐた限りに於て、オルロフスカヤ、ウオロネジスカヤ、チエルニゴフスカヤ、及びその他の隣接諸縣が、丁度さういふ状態にあつた。モスクワ帝國のこれ等の邊境は當時尙ほ植民地となつたばかりであり、創造されたばかりであつた。彼等は深い森林に被はれてゐた、それはこれ等の森林の助けをかりて、殆ど毎年のやうにこの邊境地方に生ける商品（奴隸及び女奴隸）を漁りに現はれた所の、クリミヤのタ、ール族の侵入を防ぐ爲めにことさらに保存されてゐたのであるが。

より果敢なる者達はこの邊境の地に移住しただけに止まらなかつた、そこでは中部ロシヤに於てよりも、遙かによく暮すことが出来たのであるが、何故なら此處では一人の地主に對して二人の農民の割合であつて、従つて農民を自分の土地に抑へて置く爲めに、地主は彼等の面倒を見なければならず、さう酷くは彼等を搾取することが出来なかつたから、——より果敢なる者は、此處にも止まらずして、國境の森林地帯のあちら側の、モスクワ皇帝の權力が單に名義だけであつて、従つてここでは農民が皇帝の巡警と地主と當時の警察とから完全に安全であり得た所の、既に全く自由なる土地へと飛び出した。成程、そこには彼等の眼の前に、タ、ール族の出没する、モスクワ帝國の南境よりも一層生活が危険であつた所の、曠野が展げてゐた。住民の一半が農耕に従事してゐた間に、他の一半は、不意の襲撃から労働者達を防禦しながら、鐵砲を持つて立ち、注意深く曠野を見守つてゐた。生活は嚴しく戰鬪的であつた、しかしその代りこれ等の新らしい場所に於ては、モスクワ帝國の南境よりも、尙ほ一層自由であつた。此處には森林中にあらゆる種類の鳥獸が豊富であり、ドン河に注ぐ諸流域及びドン河自身に魚類が豊富であつた。此處では苦しい農耕に努めないでも、より安易な狩獵經濟に従事することが出来た。

かやうにして、モスクワ國境の南に自由なるコサツク移住民が形成された。すべてこれ等の人々は、苦澁な束縛を脱する爲めにモスクワから去つたのであるとは言へ、古巢へ歸るといふこと、し

かし、勿論、逃亡農奴としてではなく、賦役労働にも行かないでも又税を拂はないでもいゝ所の、が恐らくは、大貴族の領地に定住して自から地主ともなり得る所の、自由民として歸ること以外には、まづたく何事をも望んでゐなかつた。かゝる空想は特に、新規の場所に於て何等かの經濟を立て得た、従つて既に、勿論、自分の比較的豊富なそして幸福な運命をモスクワ近郊の農村の當り前の農民の生活と交換しようとは思つてゐなかつた所の、移住民中の最も幸福な部類の人々の腦裏に刻み付けられてゐた。

モスクワ政府は、南方ウクライナの地に集つたこの半ば自由なる又は全く自由なる大衆が、如何なる危険を地主的國家に及ぼすかを、よく知つてゐた。しかし彼はこの聚集に對して何事をも爲し得なかつた。一方、クリミヤのタ、ール族を防ぐ爲めに彼にはこれ等の勇敢な、武装された、戰鬥に馴れた人々が必要でもあつた、そこで彼は、これ等の地方に追放人、普通の犯罪者及び所謂國事犯人、不興を蒙れる、例へば、處刑された大貴族の一族、等、等を送つて、彼等の數を増しさへもした。彼はたゞ出来るだけこれ等の人々をモスクワ國家の内部へ歸らせないやうに努めた。皇帝ボリス・ゴドノーフの時代には都市に立入ることさへコサツクは禁ぜられ、火藥、鐵砲、等、等を手に入

入れることを妨げられた。この二重政策——一方に、自由なる人々をタ、ール族に對して利用し、他方に、百方彼等を壓迫する——は、南方に集中されたコサツク及びその他のすべての自由民をして層一層モスクワの政權を憎ませ、自分の敵と見做させるやうになつた以外、勿論、何等の結果をも齎らさなかつた。同時に、屢々この政權のお蔭で、彼等は益々軍事的に強大となりつゝあつた。

丁度モスクワの饑饉の最中に、十七世紀の初頭に、兩者の關係は極度に逼迫した、そしてコサツクの間には、モスクワの現皇帝（吾々は彼が相續者ではなく、當時のモスクワでは珍しいことであつた所の、選舉された者であつたことを見た）は——眞正のものでなく、眞正の皇帝は何處かに、寧ろコサツク民の間に隠れてゐるのだといふ噂が、立ちはじめた。

その當時よりも凡そ十年前に人知れず消えてしまつた所の、イワン雷帝の末子が、恰もこの眞正の皇帝であるかの如く考へられた。政府の公文書によれば彼は不幸な偶然から、遊戯中に傷付いて死んだのであつた。が民間では、ボリス・ゴドノーフが刺客を送つて彼を殺させたかのやうに傳へられてゐた。一と口に言つて、彼がどうなつてしまつたか、誰もよく知らなかつた。そして今や、コサツク民の間に、彼は決して自刃したのではなく殺害されたのでもなく、が生きてゐるといふ噂

が立ち始めた、そして間もなく、コサツク達が雷帝の末子ドミートリイ・イワーノキツチであることを認めるに躊躇しなかつた所の、同じ年恰好の、傳へられる所によれば、容貌さへも似てゐる一人の青年が見出された、かくて、「真正ならぬ」皇帝ボリス・ゴドノーフに對立させることの出来た新皇帝が発見された時、——コサツク革命の開始の爲め、壓迫と専制と饑饉の爲めにモスクワ帝國から遁れた人々の、既に奴隷の資格に於てではなく、主人の資格に於ての古巢への復歸の爲めの、一切の準備が整つた。が國內に於ては、モスクワ帝國の内部に於ては、饑饉によつて最後の絶望にまで追ひ遣られた所の大衆が、たゞどんななかのでも救ひ手を待ち望んでゐた、従つて同様に小貴族階級の皇帝であるボリス・ゴドノーフを正統でなく、彼等の状態をいくらかでも善くするか樂にするかして呉れる任意の皇帝を正統と認めようとしてゐた。

第五章 農民革命

新皇帝、ゴドノーフの競争者は、最初ドニエプル河上のコサツクの最も南の根據地なるザパロージェに、次いでその當時モスクワ國にではなく、ポーランド・リトワ國に屬してゐたキエフに現はれた。この國に於て彼は自分の爲めに新らしい支持を見出した。第一に、そこには追放者達、ゴドノーフと彼の制度とから遁れて來た人々の多くが集まつてゐた。それは一部は商人、一部分はゴドノーフによつて處刑された大貴族の縁類及び従僕その他であつた。すべてこのエミグラント(移民)の一團が喜んで新皇帝を迎へた。が次いでポーランド・リトワの地主達が彼に注意を向け始めた。西部ロシヤ、即ち當時のポーランド・リトワ領に於ても同様に貨幣經濟と商業資本の發達が起つてゐた、モスクワ國に於ての如く、たゞそこではすべてそれが丁度一世紀だけ早く始まつてゐた。モスクワ國家に於てもさうであつたやうに、そこでも地主達は既に十七世紀初めへかけて零落れて、同様に新らしい土地を求めてゐた。一部分彼等は、自分の農奴を移住せしめて、當時人跡稀であつ

た今日のキエフスカヤ及びウォルインスカヤ縣の南部諸郡を植民した。しかしその移住民はタ、イル族の襲撃の絶えざる脅威のもとにあつた、従つてたゞ多數の武装された家僕と、大砲及びその他の武器を買入れ、要塞を築き、等、等する爲めの十分な資金を持つてゐた所の、最も富裕なる貴族・地主のみが、この植民に従事することが出来ただけであつた。いづれにしても、それは複雑なまた困難な事業であつた。南方に向つて進出するよりも、東方に向つて進出する方が容易く手軽であるやうに思はれた、さうする可能さへあるなら。しかも今や、皇帝ドミートリイ・イワノキツチの出現はさながらこれに可能性を與へたかの如くであつた。新皇帝を助けながら、ポーランド及び西部ロシアの地主達はこの方法によつて土地及びその他一切の當時のモスクワ國の富の多くを受取ることを希望してゐた。彼等は活潑にドミートリイを支持し始めた。

吾々はボリス・ゴドノフの反對者を助けたところの各種の勢力を見る。しかし最も主たる勢力は、勿論、コサツク民團と焦燥をもつてコサツクのモスクワ入城を待つてゐた所の、虐げられ零落させられた人々の一團であつた。若しもこの勢力がなかつたならば、何事も出て來なかつたであらう。ポーランドの地主達はドミートリイを助けようなんてんで考へなかつたであらう。彼等はて

んで彼を問題にしなかつたであらう。若しも彼等が彼を支持し始めたとせば、それはたゞ彼自身が可成りに堅固に立つてゐたのと、地主達も利用することの出來た顯著なる勢力を彼が代表してゐたからである。然るにブルジョアの歴史家は、彼等によつて名付けられてゐる「暗黒」時代が國民大衆の抑壓者に對する叛逆であつたことを隠蔽しようとして欲し、後世の史家に人爲的な説明を與へようと欲して、恰も新皇帝僞ドミートリイ或は僭稱者ドミートリイ（彼等によつて名付けられた所によれば）が、正にポーランドの地主達とカトリック教會によつて尻押しされたかの如く傳へた。それによつて彼等は彼を貶し、恰もそれが或るどんなかの外國人であつたかの如く、そしてそれを外國人どもがモスクワへ連れてでも來たかのやうに、彼の意義を小さくしようと欲したのである。國民の抑壓者と彼等の暗い仕事を辯護しようとした者達とは、その後も常にその如く爲したのである。極く最近にも、國民が自分の自由の爲めの最後の闘争に、一九一七年に、立上つた時にも、ブルジョアの新聞紙は同様に、この仕事はドイツ人が計畫したのである、すべてこれは買収されたものである、外國の資金で行はれたのである、等、等と語つた。見よ、常にそしてあらゆる時代に同じことが起こつてゐることを。自分の自由の爲めに立上る國民を再び奴隸にしようとしてゐるばかりで

なく、百方、彼がその爲めに眞實に闘争したところのものを、汚辱し冒瀆しようとしてゐるのである。

僭稱者ドミートリイが實際に何人の皇帝であつたか、それを彼は、モスクワへ到着するや否や、明かにした。それには時間がかゝつた。ポーランドの軍事的援助、地主達によつて募集され武装された所のポーランド傭兵の一隊は、彼が彼等から期待してゐた如き利益をば、彼に齎らさなかつた。ボリス・ゴドノーフの軍隊が堅固に支持してゐた間は、僭稱者ドミートリイは相次いで戦を失つた、そして若しも彼の旗の下に戦つた所のコサツク兵團の勇敢と戦術とがなかつたならば、彼はゴドノーフの軍隊のために完全に掃蕩されたかも知れなかつた。しかしこの軍隊は大部分同様に下層民から編制されてゐた。その歩兵隊、狙撃隊の成員は貧しい都市の住民から募集されてゐた、従つて思想的にも職業的にも殆んど彼と一致してゐた。遠征の合間々々には狙撃兵は商賣をしたり、種々な手職に従つたりしてゐた。彼等は頭の天邊から足の爪先きまで、吾々が既に見た如く、商業資本の壓迫の下に、農村に於ける農民に劣らず、たゞ多少趣きを異にして、呻吟してゐた所の、「賤しい」廊外居住の貧民であつた。がゴドノーフ軍の士官達は大部分、これまた同様に時としては彼

等が何等かの手工業に従事することを餘儀なくされ、その履歴書に「裁縫師」とあつたほどに貧しかつた大貴族の子等と小地的的小貴族とから成つてゐた。彼等の中の南方國境附近に立ち去つた者達は、そこでは、吾々が記憶してゐる如く、農民が甚だ稀少で、地主達の所有する農奴も非常に少數であつたが、いつの間にかコサツク民團の裕福な上層と融合してしまつてゐて、何處に小地主たる大貴族の息子が終り、そしてコサツクの頭目が始まるか、見分け難い程であつた。ウクライナの曠野地帯に接近した都市々々のこれ等の小貴族及び大貴族の子等が最初にゴドノーフに裏切つた。彼等はゴドノーフの陣營に叛亂を起こした。驚かされた皇帝の將軍達は遁げ歸つた。狙撃隊は尙ほ暫く支へてゐた、しかしその後彼等も新皇帝の側に移つた。ゴドノーフのところは結局彼によつて傭はれた少數のドイツの傭兵だけが残つた、しかし彼等は彼の玉座を救ふことが出来なかつたほど少數であつた。すべての者に見棄てられて、ゴドノーフは毒を仰いだ、そして彼の家族は蜂起したモスクワ市民によつて鑿殺された。僭稱者ドミートリイはその時モスクワに入城した、そして最初の自分の勅令によつて、彼が何人に依倚し何人の利益の爲めに政治をとらうとしてゐるかを明かに理解せしめた。かくの如き勅令の一つによつて、「負債の爲めの奴隸」が、即ち債務が、非常に縮少

された。往時はカバラ(負債)、即ち債務が全家族に歸せられた、が今やそれはたゞ一人の人間にのみ歸せられることとなつた、即ち父親が消却し得ざる負債に陥いつても、妻及び子供達は自由であつた、その上債務は實際的にはたゞ彼が借金したところの者が生きてゐる間だけ有効であつた。主人が死ぬや否や、奴隷は再び自由の身となつた。

更に他の勅令によつて殆ど、ゴドノーフによつてかくも數多く發布された逃亡農奴に關する法律が、廢止された。饑饉時代に地主達のところから遁げ去つた所のすべての農民に、——が當時農民は特に多數自分の主人達のところから遁げ去つたのであるが、——すべてこれ等の農民に各自の地主達の壓制の下に復歸しないで、彼等が生計を立つるに至つたその場所に止まることが許された。地主達に、特に大地主達に、これが氣に入らなかつたことは自明である。それは富商達にもあまり氣に入らなかつた、特に彼等が、明かにモスクワに足場をかためて駐屯する意向を示し、そしてその後からは必ずやポーランドの商人團が外國の商品を携へて入り込み、モスクワの商業資本からその獨占權を奪ふに相違ない所の、ドミートリイと一緒に來た外國人共を見ては尙ほ更である、が吾々は既に一五〇年前、雷帝の祖父イワン・ワシーリエキツチがノオヴゴロドを攻略すべく赴いた

時に、如何に彼等が必死をかけてこの獨占權の獲得の爲めに闘つたかを記憶してゐる。大貴族と富商の一團がドミートリイ反對の煽動を行つた。その者はカトリックであつた。彼はそれを隠してゐた、しかしそれは總ての彼の日常生活に現はれてゐた。彼はロシアの斷食日、ロシアの祭日、等、等を餘りよく守らなかつた。これが、彼はカトリックの信仰をロシアに弘めに來たのであるといふことを、國民の頭に注ぎ込む爲めに、利用された。正教の僧侶によつて總ての異端に對する排斥憎惡の裡に教育された國民には(教會の教旨はカトリック教徒と同じ食卓から物を喰ふことさへ禁じてゐた)、すべてそれが影響した、しかし就中ドミートリイを窮地に陥れた者は、勿論、彼に従つて來た所のポーランドの兵士達であつた。彼等は到る所で亂暴を働き、掠奪を逞しうした。都市の平民、手工業者達、舗商人達は正に一種の外國の侵入らしきものが始まつてゐるのを感じ始めた、そして益々注意深く大貴族と富商團によつて放たれた煽動家の説く所に耳を傾け始めた、ドミートリイは飽く迄も自分を信じ切つてゐた。ゴドノーフに對する戰勝が彼を有頂天にしてゐた、そして彼はモスクワには彼に双向ふ者はゐないと思つてゐた。然るにその時モスクワに於ては大貴族と富商との間に密約が成立してゐた。遂に、一六〇六年三月一七日の夜に、密約者達は事を擧げた。大

貴族ワシリーイ・イワノキツチ・シユノイスキイが、彼はこれより數ヶ月前に密約の嫌疑を受けて正に殆ど處刑されようとしたのを、ドミートリーの庇護によつて赦されたのであるが、自分の武装された奴僕を率ゐ、他の大貴族達及び彼等の家來達の統領となつてクレムリに闖入した、ドミートリーは殺された。同時にモスクワの廓外住居民を使喚して、ドミートリーに従つて來たポーランドの商人及びポーランドの地主の邸宅を襲はせた。かくて、すべては外國人に對する、恰もロシアを隸屬せしめようと欲してゐるらしいポーランド人に對する叛逆であるかの如く一般の國民に思はせた、が實際には富裕なる地主と資本家の利益に反する政策をとつた皇帝を殺す爲めに叛亂を利用したのである。これ等の最後の者達のドミートリーに對する憎惡は、彼等が彼を殺しただけでは満足しないで、反貴族的な皇帝の死體を焼いて、そしてその骨を大砲に填めて發射したほどに、大きかつた。

このことが爲された後、商人及び大貴族達は自分達の間から皇帝を推戴した。密約の首領ウエー・イ・シユノイスキイが適當な人物と思惟された。大貴族達はあまり彼を好まなかつた、何故なら彼は彼等の見るところでは裏切者であつたから、雷帝の特別地域時代に彼はこの大貴族の世襲地沒收

による帝領設定に參畫してた、それは大貴族を殲滅する爲めにモスクワの中小侍階級を援助したことを意味する。しかし自分では、その出身よりすれば、彼は顯著なる大貴族に屬し、大貴族達にとつては味方であつたのだ。それと共に彼にはモスクワの商人團との間に至大なる關係があつた。今日のヴラヂミルスカヤ縣の廣大なる産業的世襲地が彼に屬してゐた、そして今日に至るまでモスクワの商業區域の一部はシユノイスキイ屋敷と呼ばれてゐる、嘗てシユノイスキイ家が有してゐた商業的意義を想起せしめながら。この屋敷の眞中に立つてゐる預言者イリヤの教會の鐘樓から實に三月一七日の夜にクレムリへの襲撃の合圖が與へられたのである。モスクワの商人團はそれ故に歡喜をもつてシユノイスキイを迎へた、他の商業都市——ニージニイ、ヤロスラーヴリ、ウオログダー——の商人團も終始彼を支持する事に努めた、それは彼自身が自分の詔勅の中で認めてゐる。シユノイスキイはかくて大貴族と商人團との、大貴族よりはより多く商人團の、皇帝であつた。彼は再び、ゴドノーフと同様に、ロシアに君臨してゐる商業資本の傀儡であつた。しかしゴドノーフの行動の中に吾々が當時の資本主義の善き方面、秩序を立て、増大しつゝある大衆の擗取を拘束し、等ししようとする努力をも見る時に、シユノイスキイにあつては吾々はたゞ否定的方面を見るのみで

ある。それは貪慾な、甚だしく破廉耻な、偽善的な、度々彼が既に公に語つた所を反古にした所の、人物であつた。彼は、例へば、最初にゴドノーフの要求によつて、ドミートリイが死んだこと、及び彼自身はその死骸を見たことを宣言した。それから、僭稱者ドミートリイが勝利を占めると、彼は彼を皇帝として迎へた、即ち最初には彼は嘘をついたのだといふことを自認した。が更に、ドミートリイの没落の後には、彼は再びボリス・ゴドノーフに殺されたドミートリイの遺骸を發見してゐる。かやうに同一の人間について彼は三度まで全く違つたことを言つてゐる。彼は再び農奴制度を固めようと企圖した。逃亡農奴に關する法律が再び復活された、そして地主達は彼等の領地から遁げ去つたすべての者を十五箇年溯つて搜索することが許された。しかしそれは空なる嚇しであつた、何となればシュウイスキイの即位後間もなく地主達が農民を自分のところへ連れ戻らうとして追ひ廻し始めたのではなくして、農民が地主達を、彼等を殺して彼等の領地を奪ふ爲めに、追ひ廻し始め、そして地主達はモスクワへ遁げ込まなければならなかつたから。

既に一六〇六年の秋には、モスクワ國家の南方一帯が叛亂の巷であつた。ドミートリイが南方に於て集めたところの軍隊が、彼の滅亡を知るや否や、彼等は、恰も一人の人間の如く、新政府に叛

旗を翻した。彼等は絶えず、モスクワに於て彼等の愛する者が陥れられたことを記憶してゐた。すべてこれはシュウイスキイ及び彼の同志が嘘をついてゐるので（シュウイスキイは、吾々が記憶してゐる如く、始終嘘をついた）、實はドミートリイは助かつてそして何處かに隠れてゐるのだといふ噂が立つた。直きにこの名を自から取つた人物が發見された、そして彼こそは救はれたドミートリイであると吹聴された、そして皇帝の顔を知つてゐた者が極めて少數であつたので、欺瞞は容易に成功した。南方の國民軍はモスクワに向つて進發した。シュウイスキイの状態は日一日と困難になつた。しかしこの場合、若しも彼に彼の軍隊が裏切つたとしたら、彼には彼の狡猾と奸計との助力があつた。彼は簡単に、此處でも第二のドミートリイの民軍の主力ではないまでも極めて大なる勢力を形づくつてゐた所の、小地主達を買収した。これ等の地主達は、如何に彼等がドミートリイに對して忠實であつたらうとも、どうしても矢張り完全には農民の意向に同情を持ち得なかつた。大貴族と富商とに對しては彼等は叛逆することが出来た。しかし叛逆した農民が地主の屋敷を破壊し、地主を殺し、彼等の財産を劫奪し始めた時、ドミートリイ軍の地主達は自分の裡に小貴族を感じないわけには行かなかつた。

がその間に農民の叛亂は益々廣く／＼擴がつた。若しも第一のドミートリイのゴドノーフに對する擧兵の際に農民がまだ殆ど動搖しなかつたとしたら、今は彼等は全大衆を擧げてシユノイスキイに反抗した。彼等の指導者なる、嘗てタ、ール族のもとに俘虜となり、外國に遁れたことのある、逃亡奴隸の、果敢な機略的な人物であるイー・イー・ポロートニコフが、全農民大衆に、彼等がその下に苦んでゐた所の壓迫を押し退け、さうして自分達で地主達の場所に坐り、彼等が農民から掠奪したものを掠奪し返すべく呼びかけたのである。叛軍のこれ等の二つの部分の間には、——小貴族と農民——先きへ行けば行くほど、不和が激しくなつた。そしてシユノイスキイに反抗して立つた軍隊がモスクワに近付いた時、彼等の間には分裂が生じた。シユノイスキイは地主達にあらゆる種類の恩惠を約し、彼等に土地を與へ、その首領達を貴族會議に列せしめた、そこで最も決定的な瞬間に彼等は自分の農民側の同志を棄てた、が農民とコサツクだけでは皇帝の軍隊に敵すべくもなかつた。ポロートニコフは打ち敗られた、彼はツィラへ通がれた、そしてそこで包圍を受けて皇帝の軍隊に捕へられた、コサツク達は再びモスクワ國の南境に退却した、しかしたゞほんの暫くであつた。直きに彼等は立ち直つた、そして、一部は先頃の復讐をする爲めに、一部は單に掠奪を逞しう

する爲めに、再びモスクワ國家に侵入して來た所のポーランド軍隊の援助を得て、コサツク達は今やモスクワの間近まで押し寄せ、當時のモスクワの城門から西北の方角へ十五露里の地點にある、トシノに據つた。トシノへ僭稱者ドミートリイも亦その本營を移した。その周圍にモスクワの宮殿に倣つた一大宮殿が造營された。恰もトシノに第二の首都が生れたかのやうであつた、そしてそこからコサツク達とポーランド軍隊とを撃退することはシユノイスキイには不可能であつた。次第に大貴族迄が彼を見棄て始めた、そして彼等の多くはトシノの宮廷に仕へる事を耻じなかつた。その筆頭は當時の大貴族中の最も舊い家柄である、死に絶えたモスクワ王朝の近親なる、フョードル・ニキーチツチ・ロマノーフであつた、彼はゴドノーフの爲めにフィラレトなる名のもとに僧侶にされ、その彼をドミートリイはロストフの大教主にしたのである。トシノに移つた後、フィラレトは總主教となつた。二人の皇帝があつたので、自然當時の教會にも二人の總主教があつたわけである。

約二ケ年間モスクワ帝國はかくの如く二人の皇帝を戴いてゐた、一人はトシノに在るコサツクと農民の皇帝、それをモスクワではトシノの泥棒と呼んでゐたが、しかしその者はトシノに在つて他

のすべての者と毫しも異るところなき君主であつた、それからもう一人は——クレムリの、地主と商人との皇帝である。しかし時と共にこの最後の者は衰微した。

何よりも先づ、絶間ない國內戦争がモスクワ國內の商業を甚だしく困難ならしめた。都市相互間の通信から、吾々は、丸一年間カザンからベルムへ又その逆に一つの隊商も通行し得なかつたことを知つてゐる。既にこの一事だけでも商業資本をして益々注意深く慎重に現實の問題に對することを餘儀なくすべき筈であつた。第一に、革命は村落から次第に都市へと移行した。都市の民衆は、吾々が見た如く、最初にはまだ地主と資本家との煽動に乗つてゐた。モスクワに於ては彼等は賤民を使喚して第一のドミートリイに叛旗を翻へさせる事に成功した。しかし次第に都市の住民も、商業資本によつてたゞ、それが農村に於て農民を搾取してゐたよりも多少軽い程度で、迫害され搾取されつゝある彼等も、どちら側に彼等が味方しなければならぬかを理解し始めてゐる。そして今や「優良なる人々」即ち富商達、各都市の富豪達が自分の通信の中で不安を持つて、「かしこ」に於ては「賤民」がドミートリイ・イワノフキツチの十字架に接吻した、が優良なる人々は足の向く方へ逃げ出さなければならなかつたと報じ始めてゐる。大都市の中心地に於ては、例へば、ブスコフ

に於ての如く、事件は眞の市街革命にまで進展した。此處では手工業者及び小商人の大家が狙撃兵及びコサツク兵と共に權力を奪取した、そして一種の民主的な共和政體の如きものを建設した、が都市に居合せた富豪達、地主及び大商人達は、最初監獄に收容され、そしてその後大部分擧殺された。

すべてこのことが都市の資本に、内亂の繼續は彼をも完全なる滅亡をもつて脅かしつゝあることを示した。それならば何處に助けを求めたらいいか？ 富商達が地主達と共に擱んだ第一の考へは、外國の援助であつた。モスクワ帝國には既にモスクワの間に、ドミートリイ及びコサツク民團を「助ける」爲めに來たところの、しかし實は内亂を利用して掠奪する爲めに來たところの、ポーランドの軍隊が駐屯してゐた。それは、勿論、内亂を止めようとする者には、惡しき援助者であつた。しかし彼等に對してはポーランド政府に交渉してそして彼からポーランド正規軍の援助を請ふことが出來た。この時にトシノ側に移つた地主達が、同様に自分の立場に苦しみ始めた。彼等も亦抑々の初めは「賤民」の叛亂を、自分達の目的達成の爲めに、利用する心算であつた。しかし直きに彼等はトシノに於て、さながらコサツク民團と叛逆を企てた農民との爲めに俘虜の如くなつてゐ

る自分を感じた。二重の密約が進行した、モスクワに於ては、内亂を鎮定する力がなく又出来なかつた所の、ウエー・イ・シユースキイから如何に免れるべきかが議せられた、トシノに於ては——明かに奴僕達の皇帝であつて、如何にしてもこの者から小貴族と商人團との皇帝を作ることが不可能であつた所の、ドミートリイから如何に免れるべきか。二つの密約は直きに一つに合した。モスクワ市民及び北パウオルジエ地方がシユースキイを廢する、がトシノはドミートリイを廢する、そして兩者共同してポーランドの皇太子ヴラヂスラーフを帝位に即かしめる、この者と共にロシアへポーランドの軍隊が来るであらう、そして内亂を鎮定するであらう、といふことに決まつた。

ポーランドに使者が派遣され、ヴラヂスラーフの父なる、シギズムンド王との間に條約が締結された。條約は、それがロシアの憲法の最初の試み、即ち君主の權利義務を規定して、そしてそれを彼にとつて強制的なるべき書かれたる條約によつて確實ならしめようとする、最初の試みであつた點に興味がある。この憲法が決して農民の爲めにも又都市の住民の下層階級の爲めにも豫定されてゐなかつたことは自明である。最後の者についてはそこには何事も語られてなかつた、が農民について言へば、彼等についてはたゞ、逃亡農奴に關するすべての規定及び勅令が復活されなければならぬこと、及び農民はモスクワ帝國からポーランドへ、又その逆に、移住することが許されてはならないといふ意味に於て記載されてゐるに過ぎない。しかしその代りこの條約には詳細に皇帝は——必ず貴族會議と共に政治をしなければならぬことが規定してある。が重大なる場合には彼は地主及び商人の有産階級の代表者より成る國民會議を召集する必要があつた。これ等の協賛を経ずして彼は新しい法律を發布することは出来なかつた、當面の政務はことごとく貴族會議の掌中であつた。

これは必ずしも有産階級が革命を自分の利益の爲めに利用しようと努めた最初ではなかつた。シユースキイが帝位に即いた時も、彼等は同様に彼をして、彼が何人をも處刑しないであらうこと、裁判と法律に準據するに非ざれば、何人からも所領地を沒收しないであらうことを宣誓せしめた。その時もそれがたゞ地主と商人にだけ關係してゐたことは自明である、そこには率直にかう語られてあつた、「地主よりその世襲地を沒收せず、又商人よりその商品と資本とを沒收せず。」平民について言へば、彼等はこの詔勅の後にも以前と全く同様に統治されてゐた。

モスクワとトシノの密約者達とポーランド國王との合意に基づいて、シユースキイは廢されて

剃髪された、ドミートリイはコサツク民團が彼を支持した爲めに、廢されはしなかつたが、しかしポーランド軍の力でトシノから撃退された。モスクワ國家、即ち地主と商人の國家は、再び統一されたかに見えた。そこには再びたゞ一つの首都——モスクワがあつた。しかし極めて速かに密約者達は、彼等がホト、ギスを薦に替へたことを信じなければならなかつた。シギズムンド王は決してモスクワ帝國の秩序を回復する目的で自分の息子をモスクワの人々に與へたのではなかつた。そんなことはすこしも彼の興味を惹かなかつた。彼は當時のポーランドの帝國主義の代表者であつた。吾が既に述べた如く、ポーランドがその經濟的發達に於て殆ど一世紀間ロシアよりも進んでゐたことによつて、遙かにモスクワ人を凌駕してゐた所の、ポーランドの地主達は、廣汎なプランを立ててゐた。吾々は既に、彼等にも同様に土地が必要であつたこと、そして彼等がこの目的を持つて既に第一のドミートリイを利用しようとしてゐたことを見た。今や彼等は第一の場合よりも遙かに都合のいゝ機會に恵まれた。彼等は、彼等が以前に、これより六〇年前に、以前は同様に獨立の國家であつた所のリトワをポーランドに併合した如く、簡単にモスクワ帝國をポーランドに併合しようと空想してゐた。新皇帝ヴラヂスラーフがまだモスクワへ來もしない中から、彼等は早くも政變を

利用すべく急いだ、そして國王シギズムンドは右に左に土地を分與し始めた、或る理由から新皇帝を喜ばなかつた者達から、或はかゝる口實さへも無しに、それを取上げながら。モスクワの地主は或る美しい日に、彼の土地がまつたく彼のものでなく、それは何處か數千露里を隔てた、ワルシャワに於て、他の所有者に與へられてゐるのを知つた。

斯くの如き秩序が地主達にまつたく氣に入らなかつたことは自明である、その上商人達も直きに、ポーランドとの密接な關係がポーランドの商業資本、即ち商賣敵のモスクワへの進出と、従つてこれ迄モスクワの資本が自宅に於て享樂してゐた獨占權の終熄とを約束してゐることに思ひ當つた。要するに、非常に早く國內に再び新政府に對する動搖が上層階級の間が始まつた。動搖のこれ等の經濟的原因については、土地に對し、資本に對する危惧については、公然と論議されなかつたことは自明である。これについてはたゞ、ポーランドの政治家達との條約に基づいて今や國家の要路に立つてゐた所の、モスクワの大貴族達の秘密な往復文書の中にのみ讀むことが出来る、が第一のプランとしてヴラヂスラーフに不満なる者達は、彼はロシア人でなく正教徒でない、がカトリックである、それ故に彼を皇帝として認めることは差すべきことであり、してはならないことである、と

いふことを掲げた、恰も彼が、彼を選んで彼に宣誓した時には、ポーランド人でもカトリックでもなかつたかのやうに。しかしあの當時は彼によつて利益を獲ようと望んでゐた、ところが今やヴラデスラーフからは何一つ獲られないことが明かになつた。

ヴラデスラーフを選定することによつて擱まれた、主要なる根本の目的が、達せられなかつた。國內戦争は終熄されなかつた許りでなく、尙ほ一層炎々たる焔を上げて燃え盛つた。モスクワを占領したり、大貴族やその他の大地主の所領地を、カルタ札のやうに、撒き散らしたりするには十分に強かつたポーランドの軍隊も、民主的な革命を鎮壓することにかけては全くの無力であつた。彼等のところには何よりも先づ兵力があまりにすくなかつた、第二に、この場合又しても、第一のドミートリーの時と同じやうに、トシノが強かつたのは決して、ドミートリー反對の密約者達が考へてゐた如く、ポーランド兵のためではなくして、實にコサツクのためであつたことが解つた。ポーランド兵が、自國政府の命令によつて、ドミートリーを見棄てた時、彼は決して、彼の反對者が考へてゐた如く、没落しなかつた、たゞトシノを出てすこし遠くモスクワから離れただけで、依然として、地主と商人とのモスクワが再びその前に震へ上がらなければならなかつたほど強い、コサツ

ク隊の首領として止まつてゐた。密約者達が關係してゐたかゝつたか不明であるが、ドミートリーが殺された時でさへも、——當時の年代記作者達は彼の死を偶然に歸してゐる、——コサツク民團の運動は依然として脅威的であつた、何故ならドミートリーには一人の息子が残つてゐて、コサツク達は彼を帝位の候補者として押し立ててゐたからである。要するにシュイスキイ及びドミートリーに對する二重の密約は決定的に何等の結果をも齎らさなかつた、従つて有産階級は自分の困難な境遇からの他の出口を求めなければならなかつた。

上層に於ける變化は、——それは明かであつた、——何物をも結果しなかつた。下層に變化を起させ、地主と商人とに反抗してそして彼等を脅かしてゐる所のこの大衆を粉碎すべく企圖することは然らば可能であつたか？ 吾々は、この大衆が單元的でなかつたこと、それは境遇を異にし利害を異にする人々から構成されてゐる事を見た。その最上層にはコサツクの團長、頭目及びその他のコサツク隊長と、モスクワ國の主として南境地方よりの小地主的貴族とが立つてゐた。それは同様に土地所有者であつた、しかしたゞ、百どころか十の農奴をさへ持つてゐない、時には全く農民のゐない二三十町歩の土地を領有してゐる所の、小地主に過ぎなかつた。その財産状態よりすれば

それは今日の富農に近きものであつた。その下に手工業者、農民、奴隸、等、等が立つてゐた。

吾々は、シユースキイが既に一度この上層を引抜いて、そしてそれを自分の側に引込まれた事を、又さうすることによつて彼の最初にして最後のポロトニコフ軍に對する勝利が説明されたことを見た。シユースキイのこの経験を再び繰返すほかなかつた。民主的な革命が進展するに従つて、コサツク隊の上層は、嘗てトシノの皇帝の藩屏であつた所の大貴族及び小貴族が感じたと同様に、何となく居心地悪く感じ始めた。彼等も亦、これ等の上層も亦、國內戦争を、彼等のすべてが土地と金を十分に掻き蒐め得た所のこの戦争の最中に收得することに成功したものを、確實に自分の物にする爲めに、中止したく思つてゐた。彼等を完全に自分の側に引入れる爲めには、商賣人には、商人達にはたゞ、徹底的に且つ十分に廣く自分の財布を解くといふもう一つの努力をすればよかつた。エジエゴロドの商人ミーニンが「ポーランド人と異端者からモスクワを自由にする爲めに」民軍を募集し始めた、そしてその際、——そこに彼の天才的な工夫があつたのであるが、——この民軍に來たり投ずる者に、その以前皇帝の親衛隊すらも受けてゐなかつたほどの俸給を約束し始めた。當り前の兵卒に以前に親衛隊の士官達が受けてゐた以上が約束された。かくの如き方法が、

同時代者達が語つてゐる如く、一方地主及び商人と、他方——小侍と裕福なコサツクとの間に完全な一致を持ち來たしたのは當然である。彼等は有産階級に仕へる方が、國民大衆と仲好くして、明かに貧民の利益の爲めに行はれてゐる所の、何人にも如何なる富をも提供しない所の、民主的な革命に助力するよりも、比較にならないほど有利であるのを見た。

すこしづゝトシノの陣營の全スタッフがミーニンと彼によつて募集された軍隊の上に商人團から任命された總指揮官——ボジャールスキイとの側に移つた。叛逆せる大衆は、首領達に取り残されて、抵抗を持續する事が出来なかつた。僭稱者ドミートリイの息子を支持することを續けて來たコサツクの少數派は、ウォルガ方面へ、そこから又遠くへ、潰走しなければならなかつた。地主及び商人の民軍の前には今や唯一の組織的な敵——クレムリのポーランド軍があるばかりであつた、しかし彼等に打克つことは、有産階級の側に移つたコサツクの助力がある以上、困難でなかつた。皇帝ヴラヂスラーフは廢された、——廢されたとは言ふものの、選ばれた時と同じく、たゞ名義上だけであつた、何故なら自身彼は年少の故をもつてモスクワへ來もしなかつたのだから。モスクワに於ては、恰も第一のドミートリイの時の如く、再びこの地に入り込まうとしてゐるかに見えたカト

リツク教に對する正教の勝利が祝はれた。當時モスクワの商人團の間には最初の愛國的な氣持が現はれてゐる。商人團はその飛檄の中で、正教の信仰の爲めのみでなく、自分の祖國の爲めにも、また彼等はかう附け加へてゐる、主なる神が我等に與へた所の財産を守護する爲めに、立ち上がるやうに呼びかけてゐる。祖國の擁護と自分の財布の守護がこれ等の人々のところに於ては、あらゆる時代のブルジョアジの場合と同様、かくて、一に融け合つてゐた。

斯くの如きパトリオチズムは、自分の利益を細心に擁護することを妨げなかつたばかりでなく、反對に、それを助長したことは自明である。資本家及び地主は、國內に根を張つてゐない外國人の皇帝を戴くことが自分達の利益であるのを見て、皇帝をスウェーデンに求めることさへ敢へて辭さなかつた。ポジャールスキイが實に、モスクワの帝位にスウェーデン皇子を迎へるといふ説を主張した。しかしそこへ、それ無くしては商業資本が何事をも爲し得なかつた所の、一つの勢力が割込んだ。有産階級の側に轉じたコサツク團と小地主的貴族並びに大貴族の子等には、實はトシノに於て有名であつたところの、自分達の候補者があつた。それはトシノの總主教フィラレート・ニキイチツチ・ロマノーフの息子であつた。總主教自身は當時ポーランドにあつて、國主シギズムンド

と交渉中であつた、それに一旦僧侶になつた者を皇帝にする事は不可能であつた。しかし彼には、十六歳になる少し愚かな、とは言へ、ロマノーフ家の總領として、コサツクと小貴族間に有名であつた所の、息子があつた。ガリシヤの小貴族が最初にこの候補者を推した、そして小貴族と商人と民軍の幹部達がそれに不同意を表明した時、出席者の中からドン・コサツクの頭目が立ち上つて最も強硬にこの候補者を主張した。ポジャールスキイ及び彼の同志は、答をもつて斧と争ふことの出来ないのを知つた、ウエーデン皇子についての自分の空想を抛棄して、必然の勢に屈服した。コサツク達と小地主的貴族の候補者が皇帝になつた。國民會議が召集された、それはたゞ既に確定せる事實に承認を與へるだけであつた。

かくてロシヤにロマノーフ王朝が君臨した。革命軍の上層の下層に對する裏切りの結果として生れた彼女自身が、自分の番に於て幾何もなく彼女を推した者達を裏切つた。民主的な革命によつてではないとしても、兎に角この革命の隊列から出て來た人々によつて帝國の主班に据ゑられたロマノーフ家は、農民や奴隸にでない迄も、何れにしても貴族社會の下層に助力した筈であると考へられるであらう。そんなことは何も無かつた。事實、初期ロマノーフ朝時代に最も便宜を得たものは

大商業資本であつて、大商人達は次第に國家の財政を自分の手に收め、諸税を課し、收税を始めその他有利の事業を請負つた。土地領有について言へば、こゝでもロマノフ家は雷帝が破壊し始めた所のものを復興することに成功した。彼等の時代にモスクワの帝國內には再び廣大なる世襲的土地領有が起こつてゐる。何よりも先づ皇室とその近親とが廣大なる土地を自分の物にした、新皇室に助力し又は仕へたすべての者が彼等の後に隨つた。追放されたり壓迫されたりしてゐる大貴族の場所に、新しいアリストクラシーが發生しつゝある、それが以前の者と違つてゐたのは、その者が大領主、即ち封公乃至大貴族の出であるのに對して、この者は——屢々最も軽い身分の新らしい人々であつたことである。しかし時の経過と共にこれ等の貴族は往時の大貴族に劣らざるものとなつた。そして自分の所領地に數千乃至數萬の農奴を貯へて彼等は再び一種の領主たるに至つた。若しもルスの地に、雷帝によつて廢滅されたすべてがそつくりそのまゝ復興されなかつたとしたら、それはたゞ經濟的發達が遠く進んだが爲めに、往時に逆轉することが不可能であつたからに他ならぬ。

ミーニンとボジヤールスキイを代表者として商業資本は勝利を占めた、そこでは商人が主人であつた、そして地主は——第一のそして最も忠實なその下男であつた。初めのうち商人と地主は、暗黒時代の一列の失敗に終つた皇帝のお蔭で著しく猜疑的にされた結果、鋭く自分の推戴者を監視した、商人及び地主派が絶對多數を占めてゐた所の國民會議も、數年間すこしも分裂することなく、その上その後極めて頻繁に召集された。次第に、しかしながら、有産階級は新王朝に對する信頼によつて浸透された、特にミハイル・フョードロキツチの父、當時第一流の傑出せる政治家であり外交官であつた、總主教フィラレートが外國から歸つて以來、さうであつた。ミハイルが崩じた時、その息子アレクセイは最早如何なる動搖も争ひもなしに皇帝の位に選ばれた。

誰もロマノフ家が忠實に商業資本に奉仕してゐるのを疑はなかつた。王朝は商業資本に奉仕したのみでなく、それと共に成長したかに見えた。帝室は既に雷帝の時代から商業に關係してゐた。雷帝は補助金——「助成金」——を外國に赴く商人に與へた。彼の息子フョードル・イワーノキツチは、モスクワで營業してゐたイギリスの商事會社の株主であつた。ロマノフ家の皇帝は、ある外國人の至妙の表現をかりるなら、自分の國家の第一流の商人であつた。大商人、モスクワの富商がこぞつて皇帝の直接の代理者となり、すべての貴重品、ベルシヤから受取られる絹、ロシヤ獨特

の方法で加工された所の、そして特に西ヨーロッパに於て珍重されてゐた所の、高價なるシベリヤ産の毛皮、皮革、等、等の商賣が皇帝の專賣となつた。次ぎの十八世紀の初葉、ロマノフ家がモスクワの帝位に即いた後凡そ百年を経たころには、宮廷は、他の外國人の傳ふる所に據れば、恰も商館の事務所の如くであつた。そこでは始終、苛性加里や亞麻や大麻や等、等についての各種の商談が行はれてゐた、だからそれとは全く違つた宮廷の會話を聞き馴れてゐた外國人達は驚きのあまり呆然たらざるを得なかつた。富商達は一種の特權階級になつた。それは商業的小貴族であつた、——小商人の全集團がそれから金を借りてゐた、それは地主達が農民を縛り付けてゐたよりも、いくらか増しではあつたが。

第三の外國人は、——すべての外國人がモスクワ國家のこの特殊性に目を見張つてゐた、——若しもモスクワ國家に叛亂が起きたとしたら、眞つ先きに富商達が首を失ふに相違ないと證言してゐる。しかし小貴族・商人的權力は嚴に國家の「秩序」を維持することに努め、小貴族及び商人達が十七世紀初葉の國民運動を「暗黒」と呼んでゐた、この稱呼の據つて來た所のあつた事件が再び繰り返されることの無いやうに、あらゆる手段を講じた。何よりも先づ皇帝の玉體そのものが、殺

害された第一のドミートリイ、乃至は玉座からおろされて頭を剃られたシュウイスキイに起こつた如き不祥事が繰り返されないやうに、嚴重に守護された。鐵砲を持つて宮殿の附近に立寄ることが、勿論、番兵を除いて、嚴禁された。クレムリの城門、所謂スバスキイ門をさへ、國民は帽子を被つたまま、通ることを敢てしなかつた。宮城内を馬を曳いて通り抜けようとした爲めに、一人の奴僕は慘らしく答で打たれた。要するに新王朝に對する、イワン三世及び雷帝の王朝すらも自分に要求しなかつた程の、尊敬を、全人民の頭に叩込まうと努めた。次ぎに警察がよく組織された。殆ど全國家の最上位にロマノフ家の時代には「秘密探偵局」が置かれてゐた、そしてその軽い手から一切の秘密な「局」及び「省」が十八世紀全般を通じて吾々を送迎するのである。十九世紀にはすべてこれ等の秘密官廳が憲兵隊本部と警視廳の手に委ねられてゐる。探偵局は最初から、初期ロマノフ王朝から、絶大の委任權を附與されてゐた。貴族會議、即ち元老院の議員さへも、後年傳へられた所によれば、この局には立ち入らなかつたし、その事務には全く關與しなかつた。それはこのモスクワの元老院の統制の外にあつたのである、それは皇帝に直屬してゐた、そしてその官吏は實際には、貴族會議の議員よりも、より大なる權力を有してゐた。

しかし斯くの如き警察は當時にあつても一つの組織的な力、謂はゞ、この統治の頭腦であるに過ぎなかつた。が頭腦には手が必要であつた、そこで初代のロマノーフ達は、全く信頼するに足る、そして、出来得るなら、國民大衆に關係の無い、よき軍隊を創ることに苦心した。往時の、家臣たる地主と主として都市の住民の下層から募集された傭兵隊、狙撃隊から編制された所の、モスクワ皇帝の民軍は、大して信用が置けなかつた。それは十分に訓練されてゐなかつたし、十七世紀初頭の事件が指示した如く、容易く國民的動搖の渦中に引き込まれた。これ等の狙撃隊と小地主とを吾は或る時はこちら側に、或る時は他の側に、或はトシノに、或は皇帝ワシーリの側に、見出す。ロマノーフ達は先づ外國の傭兵を非常に澤山抱へることから始めた。吾々は當時ドイツ人軍隊が、他のすべての軍隊がドミートリイ側に轉じた後、ゴドノーフの政權の最後の據點となつたことを記憶してゐる。しかしゴドノーフのところには、これ等のドイツ兵があまりにも少なかつた。ロマノーフ王朝の初期に西ヨーロッパで大三十年戦争が起つた、當時戦争を職業とする人々が多量に生産されて、市場で好むだけの兵力を手に入れることが出来た。これ等の人々からモスクワの諸々の聯隊が編制され始めた。直きに、しかし、それが一方に甚だ高價であること、他方——それが必ずし

も當てにならないことが解つた、何故ならこれ等の人々はたゞ金の爲めに仕へてゐるので、従つて彼等はまた金で買収される危険があつた。すこしづゝこれ等の高價なしかも全くは信用の置けない新軍隊の構成要素が、國民大衆の中から取られた、しかしそれから全く、永久に引き離された、人々によつて補充され始めた。それは往時の如く時々呼び集められた民軍ではなかつた。人は兵卒として生涯とゞまつた。彼は全くその郷里から引きはなされた、兵營が彼の爲めに第二の家になつた。

『我等兄弟は——重い背囊、我等の姉妹は——鋭いサーベル、我等の子達は——よく中る彈丸』とニコライ一世時代の軍歌が歌つた。

かく考へることに兵士は馴れてしまつた、その上彼は棍棒と訓誨とをもつて、彼は専ら皇帝に仕へなければならぬこと、若しも皇帝が命するなら、彼は父親でも、母親でも、誰れでも射殺しなければならぬことを、叩き込まれてゐた。ドイツの士官若しくはドイツ人に教育された士官を隊長にして、これ等の新兵から直きに、その武装、編制及び規律に於て比較にならないほど往時のモスクワの民軍に立ち優つてゐた所の、正規軍が作り上げられた。かゝる軍隊を擁する以上は、如何な

る國內の動搖をも恐れる必要がなかつた許りでなく、商業資本は此の如き武器を頼んで、百年以前には殆ど空想することさへも出来なかつたほどの果敢にして精力的な外交政策を遂行することが出来た。

正規軍の内的意義が最初に現はれた、ロマノーフ家の即位は國民大衆の状態をよくしなかつたばかりでなく、反對に、悪くした、何故なら最初或は益々新しい農民大衆の上に擴張され、或は退嬰してその固い爪の下から農民を放し、絶えずぐらつてゐた所の農奴制度が、ロマノーフ家の治世になると全く安定してしまつたからである。十七世紀の中葉には、農業經濟が單に副次的であつた所の、従つて地主達が振り向いても見なかつた所の、北部ロシアの一部分を除いては、農奴以外の如何なる農民も残つてゐなかつた。極く稀に吾々は自分の主人と同様である所の、即ち金を出して雇はねばならぬ自由の農民に出會ふのみである。壓倒的多数は自分の主人に一切の「契約書」なしに定着させられてゐた、そして地主の所有物と見做されてゐた。例へば、地主が借金をすれば、彼の農民がその負債を背負つた。負債を負はされた者達は拷問に掛けられた、即ち彼等が負債を消却するまで、毎日棍棒で擲られた。かくて今や、地主の代りに彼の農民が窮命に遭つた、それは全く

往時に奴隸達がこの運命に渡されたのと同じであつた。かくて今や農民と奴隸との間には最早如何なる相違も存しなかつた。

商業資本の壓迫の下にある都市階級の狀態も改善されなかつたことは自明である、新軍隊及び一般にすべての行政機關の維持が大なる支出を要求したところから、更に住民の下層階級の上に横たはつてゐた所の——農民及び都市の下層住民——諸々の租税が甚だしく引上げられた。これ等の諸税の型は今や一部分、新軍隊の型もまた取つて來られた所から、輸入された。例へば、ロマノーフ家第二世の皇帝アレクセイは西ヨーロッパを模倣して、鹽税をおこした。それは暴動を勃發させた、しかしこの暴動は、新軍隊の力で鎮壓された。名目貨幣、所謂銅貨ルーブルを流通せしめんとした政府の企圖に伴つて起こつた他の暴動もまた同様にして鎮定された。當時は常にモスクワ政府のみでなく、銀に銅を混へて、貨幣の質を悪くすることが通例であつた。國民は殆どそれに氣付かなかつた、従つて質を悪くされたルーブルが全價値のものと同様に通用してゐた。そこで、段々、政府は全くの銅貨を鑄造して、銀貨としてそれを流通せしめようといふことを考へるに至つた。しかしそれは早くも人の目に付いた、そして銅貨は、おまけに非常に多量に鑄造されたのが、急速に

その價值に於て下落し始めた、それに連れてすべての商品が一齊に騰貴し始めた。それが再び國民的騷擾を誘發した、しかしロマノフ政府は、それに打克つべく、十分に有力であつた。

初期ロマノフ王朝が關係した最も大きな叛亂、それはドン地方を根據としたコサツク・農民の叛亂、ステパン・ラーヂンの叛亂である。それは商業資本主義の發達と直接に關連してゐた。その舞臺はボウオルジエ（ウオルガ沿岸）地方であつた、それは恰もモスクワ時代のロシアの最重要なる通商路、——モスクワの國境と、最も貴重なる東方の商品が輸入され、それが更に大なる利益をもつて皇帝の御用商人達により西ヨーロッパへ、即ちモスクワやアルハンゲリスクのイギリス及びオランダの商人に轉賣されてゐた所の、ベルシヤ國とを連絡してゐる大河、ウオルガが貫流してゐたその場所である。この通商路に沿うては、荷揚人足、曳船人夫、あらゆる種類の小商店の雇傭者、續いては小商人及び手工業者、等、等の土地を所有しない人々の多數が群がつてゐた。莊園的土地領有はウオルガ沿岸の黒土帶地方に於て急速に擴大した、しかもこの地方の地主達が多くの土地を所有し、その割に地主達によつてモスクワ國家の中心地方から連れて來られた農民がすくなかつたところから、この地方に於ては、必然的に、賦役勞働が最も慘酷を極めてゐた。農民達は他の

如何なる場所に於てよりも多く働かされた、その上悪いことには直ぐ近くに、境を接して、自由のドン、ロマノフ家が長く打ち破ることも手なづけることもなし得なかつた所の、コサツクの巢があつた。國內の秩序を立てるに急で、彼等は國境のあちらがわに住んでゐた所の、帝國から遁れ去つた人々に手入れをするほど十分に有力でないのを感じてゐた。この番が廻つて來たのは餘程後になつて、約百年を経た後であつた。ドン・コサツクは暗黒時代の後非常に長い間モスクワ國家の内政に干渉しなかつた。吾々は、十七世紀初頭の革命の終りにこのコサツク民團の軍隊が分裂して、そして、コサツクの士官級——頭目達——が有産階級側に轉じたことを記憶してゐる。コサツク民團はこれが爲めに解體（崩壊）した。その一部は小貴族の手に陥つた、残りのものをロマノフ政府は同様に分解させるべく苦心した、ゴドノフが爲した如く、彼等を愚弄するだけでなしに、反對に、麥を與へて彼等を手なづけることに腐心し、そして彼等を隣りの——トルコ族及びタール族にけしかけながら。掠奪と侵略とが十七世紀のコサツク民團の全注意を吞みつくした、しかしトルコの主要なる要塞であつた、アゾフが、彼等の手に落ちて、そしてコサツク團が無邪氣にもモスクワに向つて支持を請求して來るやうなことになつた時、——モスクワは素氣なく拒絶した。彼女

にはアゾフは必要でなかつた、必要だつたのはたゞコサツクを手に入れることであつた。コサツクはアゾフから撃退された、そしてトルコは、この要塞がトルコの抜くべからざる根據地となつたほど、嚴重に防備を施した。南方への進出が阻まれた、コサツク民團は他の方面に、南東の方向に、出口を探すことを餘儀なくされた、そして全く自然に、商業資本にとつてかくも重要であつた所の通商路——ウオルガ下流と裏海とに現はれた。コサツク達は最初ロシア人ではなく、ベルシヤ人を掠奪した。しかし彼等がロシアの商業の利益をも破壊し、そしてモスクワ政府との衝突が全く避くべからざるものとなつたことは、全く自然である。が一度これ等の場所に於て鬭争を始めた以上、コサツク達は嫌でも、吾々が既に述べた所の、すべてこの細かい、負債を負へる、被抑壓民の中心にならねばならなかつた。ステパン・ラーチンがポロトニコフの後継者になつた。彼の指導のもとに叛逆者達はアストラハンを攻略し、ツアリーツイノを攻略し、ウオルガを溯つて、モスクワに向つて進出した。しかしシンピルスク附近で彼等は新らしい、外國式に教育されたモスクワの軍隊に出會つた、そして全滅させられた。ラーチンは俘虜になつた、そしてモスクワで處刑された。かくして民謡の中にその記憶をとゞめはしたが、しかし十七世紀初頭の革命よりも遙かにすくなく商

業資本と彼によつて創定された秩序とを震撼させた所の、この新らしいコサツク・農民の革命が終つた。が叛亂は、ラーチン以後百年間もはや類似の叛亂が起り得なかつたほど、確實に鎮壓された、従つて殆ど同一の場所に、吾々が後に述べるであらう所の、新らしいブガチョーフの叛亂が猖獗を極めた爲めには、十八世紀の中葉に於ける農民に對する壓迫者の壓迫が言語に絶するものになければならなかつた。

内敵との鬭争に於て新軍隊がロマノーフ家に示した最後の好意は正に舊軍隊に對してである。狙撃隊は、新制度が狙撃隊の存在そのものを脅かしつゝあることを、漠然と感じながら、動搖し始めた、そして皇室の内部的不和を利用して、暫くモスクワを支配した。彼等は直きに、ロマノーフ家の中でも最も精力的な、最も天才的な又最も注目すべき皇帝ピョートルに率ゐられた、外國編制の新軍隊によつて撃ち破られた。ピョートルが外遊に赴いた時、狙撃隊は二度目の叛亂を企てた、そして完全に且つ一人残らず、ロマノーフ家の中で最も天才的で精力的である許りでなく、また最も殘酷なピョートルによつて、根絶やされた。「杭はこれ皆な狙撃兵」と當時の暗い俚諺は、ピョートルがクレムリ宮殿の城壁の杭に、直接戦場で射殺された者までも蒐めて來て、叛亂の首謀者達を梟け

たことを語つてゐる。

しかし當時新軍隊が商業資本に必要であつたのは常に國內の敵を鎮壓する爲めのみでなく、又彼が百年前には考へることをさへ躊躇したであらうほどの大規模な果敢な對外的企業の爲めでもあつた。既に十七世紀の中葉にロマノフ政府は極めて巧妙に西部ロシアに發生したコサツク・農民の革命を利用した。かして、ポーランド・リトワ王國の東南部には、モスクワ國家にあつたと全く同じことが起こつてゐた。同様に商業資本が發達してゐた、この商業資本の影響の下に往時の封建的隷屬の場所に殘酷な年貢、苛酷な賦役勞働、——約言すれば、西部ロシアに於て『フロープ』と呼ばれてゐた所の農民から、聽て市場に現はれ、商人の手によつて全ヨーロッパ大陸に播き散らされた所の、餘剰生産物を搾取する一切の手段が現はれてゐた。ポーランドの麥はリスボンでも、ナポリでも、常食となつてゐた。従つてポーランドに於ける不作は時としてイタリーの饑饉を意味した。モスクワ國家の場合と同様に、新制度は新しく植民された地方、即ちブリドニエプロキエ（ドニエブル流域）地方、今日のキエフスカヤ、ウオルインスカヤ及びその他の隣接諸縣に於て、特に甚だしき苦痛を感じしめた。

ところが直ぐ近くに、目と鼻のところに、ドニエブル河上に、コサツクの巢——ドンの場合と同じ方法によつて逃亡「農民」から形成された所の、ザポロージェがあつた。此處でモスクワ時代のロシアにあつたことが繰り返されたのは自然である。そしてモスクワ國家が十七世紀の初頭にコサツク・農民の叛亂を見た如く、同様に十六世紀末から十七世紀前半へかけてはブリドニエプロキエ（ドニエブル流域）地方に於ける一列のコサツクの叛亂によつて充たされてゐる。ポーランド政府は、最初から優秀な正規軍と、シユーイスキイ時代のモスクワに於けるよりも、卓れた警察組織とに倚依して、長い間これ等の叛亂と戦つてゐた。此處では、しかし、小貴族・商人的政權の敵も亦遙かにいゝ加減のものでなかつた。大ロシアのコサツク及び農民は暗い、文盲の大衆であつた。西部ロシアのコサツクと「フロープ」（農民）は都市の町人階級の代表に於て自分の智識階級（インテリゲンチヤ）を有してゐた。このリウオーフ、キエフ、ジトミール及びその他のウクライナの都市々々（まちまち）の都市的町人階級は自國の商業資本から、モスクワのそれが自國のそれから受けてゐた以上の壓迫を受けてゐた。ポーランド政府は、言ふまでもなく、モスクワのそれと同様に、富裕なる商人團の味方であつた、そして事毎にウクライナの町人階級を壓迫し窘窮した。しかしその者は自分の組織

を、西ヨーロッパのそれに類する、教會組織を持つてゐた、即ちウクライナの手工業者達及び小商人達は病院、學校、等、等を有する、教會を中心とした自分達の「組合」を作つてゐた。商業資本はこの組織を破壊しようとする、十六世紀の末葉にポーランド政府は西部ロシアに「ウニヤ」(連合希臘教)を採用した、即ちウクライナの教會をポーランド政府によつて任命され、自分の番に於て一般カトリック教の中心、ローマ法王に服従してゐた所の、大僧正の支配の下に置いた。國民に向つてはこの官許の教會を「すべてのキリスト教徒の一教會への結合」(此處からして「ウニヤ」なる名稱が出てゐる、それは「聯合」を意味する)として美しく説明した。しかし町人階級は、聯合希臘教が彼の組織に致命的な打撃を與へるであらうことを知つた、そこで官許の「聯合希臘教」の大僧正に従ふことをしないで、極力聯合に反抗した。その結果町人階級の組合に壓迫が加はり、益々町人階級を「フロップ」(農民)の革命の側に追ひやつた。正教の信仰がこの最後のものの旗じるしとなつた、そしてキエフの宗教大學が——その智識の中心に。コサツク及び「フロップ」(農民)は此處では、かくて、「パン」(ポーランド貴族)——地主及び地主的政府の壓迫に苦しんでゐただけでなく、この壓迫に對する自分の叛逆の豫め準備された、理解し得る辯護を持つてゐた。

若しも叛亂が此處でモスクワ・ルスに於けるよりも、よりよく組織されてゐたとせば、それはポーランド政府がモスクワのそれよりも遙かにその政策が拙劣であつたからである。この最後のものは、自分の微力を感じ、叛逆者達を分裂せしめ、買収することに努めてゐた。ポーランドは、自分の力を頼んで、このことを顧みなかつた、そして貧しい「フロップ」(農民)をも、富裕なるコサツク「地主」をも、都市の小商人をも、法王若しくは大僧正の聯合希臘教を認めなかつた正教徒をさへも、一様に壓迫し窘窮した。彼は自分の敵を分裂させる代りに、彼等を團結せしめた。これが爲めにコサツク民團の上層の、富裕なる階層の代表者の一人である、ボグダン・フメリニツキイを首領とした、一六四八年のコサツクの叛亂は、ポーランド・リトワ政府軍に對して赫々たる勝利を収めることが出来た。しかし勝利を最後まで持ち続けることはフメリニツキイには出来なかつた、彼は同盟者を求めなければならなかつた。これを極めて巧妙にモスクワの國家が利用した、彼はフメリニツキイを庇護した、そして斯くの如くしてウクライナが、最初はドニエブルの左岸とキエフが、モスクワ國家の手に移つた。ウォルガの通商路の外に、この最後のものは今や黒海に出る他の通商路——ドニエブルを押へた。しかし彼がこの新通商路を利用した以前に、黒海の爲めの闘争が

モスクワの商業資本にとつて主たる鬭争となつた以前に、多くの時間が経過した。順番は他の方面にあつた、西ヨーロッパへの最も近い出口はモスクワ・ルスにとつて黒海でなく、バルチック海であつた。そしてバルチック海の爲めのこの鬭争に於て、所謂一七〇〇—一七二一年の大北方戦争に於て、特に商業資本にとつて貴重であつたのは正に彼の新しい武器——外國の型によつて編制された軍隊であつた。

第六章 ロマノフ家の國家と教會分離

上層階級に味方した小貴族とコサツク國の一部との力によつて農民大衆を彈壓した初代のロマノフ達は、かくて、農奴制と官僚主義と常備軍とに支持され、かくして十九世紀の半ばまでロシアに存在し續けたところの國家を創建した。唯この時に於て、その後の經濟的發達、即ち商業資本主義に代はる工業資本主義の出現の爲めに、——この國家體制は崩れ始めてゐる、農奴制が衰へ、次いで官僚の權力が弱まり、そして最後にこの國家にかれの主たる支柱である——常備軍が背いてゐる。しかし、次第に崩壊しながらも、ロマノフの體制はその殘骸の中に一九一七年の革命まで生き残つてゐる。ロマノフ家の君主政體と共に吾々は、かくて、ロシア史の最近世期に入るのである。しかしこの君主政體の特色づけを完全にする爲めに、尙ほ一つの、吾々がこれまで觸れなかつた方面について記述する必要がある。それは資本主義的な、官僚的な（官吏的な）、又、軍國的な國家であつたばかりでなく、それはまたロシアに於ける最初の世俗的な國家でもあつた。ロシア教會はロマノ

フ家の時代に至つて任意の局若しくは省とまつたく同様なる世俗的の官廳となり了つた。大僧正が縣知事とまつたく同様の官吏となり、宣教師は警察官若しくは巡警と全くおなじものとなつた。その當時、即ち十七世紀の半ばに起つた所の、國家に對する教會のこの服従について、すこしく述べる必要がある。

僧侶と教會の存在には實際的な意味があつた。吾々は既に間接に、教會と僧侶とが、特に修道僧と修道院とが貨幣經濟の最初の嚮導者であつたことを述べる所があつた。彼等の手には信徒たちの喜捨のおかげで、莫大な資金が集中されてゐた、他の信徒たちは自分の財産の保管を彼等に托した、かくて教會は商業倉庫となり、修道院は古代ロシアが、彼女と共に中世の全ヨーロッパも亦、知つてゐた最初の銀行業者となつた。しかし教會の爲めの總てこれ等の喜捨に人々が與へてゐた説明は、勿論、吾々が與へてゐるのは全く違ふ。當時の人々にとつてはすべてこれが經濟的意義なるものはまつたく存しなかつた。彼等が喜捨したのは靈魂を鎮め和らげる爲めであつて、それと語ることが出來、交通することが出來たのはキリスト教の僧侶であつた。殊に人間にとつて怖るべき瞬間は、勿論、死そのもの、彼自身が「靈魂」になる時である。それは彼自身にとつてよりも、この靈魂か

ら善惡いづれを期待すべきかを知らなかつたところの彼の近親者たちにとつて、より以上の恐ろしい瞬間であつた。かくてそこに宣教師が現れた、各種の妖術を行ひ、種々の言葉を發し乳香を燻ゆらし、供養をなし、かくして死者の靈魂と生きて残れる近親者とを和睦させた。死者はこのこと後に善き靈魂に變じ、最早如何なる惡をも彼から期待せず済んだ。正にこの故に教會はこれに際して特に莫大なる贈物を享けたのである。死者の財産からひとり動産ばかりでなく、廣大なる土地をも與へられ、かくして教會は最大の土地所有者となつた。自分の所有地を教會は増加することが出來た、その商業的企業によつて集積された金をもつて修道院は地主達から土地を買取つた、これ等の地主達に最も苛酷な條件で金を貸し與へながら。教會はロシアの農民の最も狂暴なる擄取者の一人であつた。農民束縛の最初の創始者がトロイツカヤ・ラーヴラ（三聖者寺）であつたことを忘れてはならぬ、それは十五世紀に率先して農民を自分の領地から出さない權利を收得し、そしてまた率先してこれ等の農民を、暗黒時代の後に、巧に機會を捉へてその搜索の爲めに十一箇年の期限を得て置いて、即ち暗黒時代に立去つたすべての農民を連れ戻さうと努めながら、搜索に狂奔した。トロイツカヤ・ラーヴラはそれでもつて他の地主達に例を示した。しかし住民の大衆にとつて

は問題はまったく僧侶が善良であつたかそれとも悪辣であつたか、溫和であつたかそれとも殘酷であつたかであつたのではなく、この僧侶なるものが當時の人間の想像の裡に創られた所の、そしてそれに、この人間の信じてゐるところに據れば、一切の彼の幸福が懸かつてゐる所の聖靈と惡魔の世界に調子を合はせて行くことが出来たことであつた。

當時の人々に對する教會の影響は、勿論、甚大であつた。教會の人々は、彼等はどんなことでも爲すことが出来る、實を言へば、皇帝をも彼等だけで立てるのである、教會が皇帝に與へるところの聖油塗布のおかげで初めて、彼は眞の皇帝となるのであると教へた。彼は教會に仕へてゐる間だけ皇帝である。彼が仕へることを止める時、その時彼は王座に對する一切の權利を喪失する。實際には、しかし、既に十六世紀に於てはそれは單なる理論に過ぎなかつた（即ちたゞ書物の上だけであつた）、事實はモスクワ王國が統一され、廣大な地域の土地、商業資本、等、等がその手に收まるや否や、それは教會を自分の意志に従はせ始めた、何となれば教會の實力は、繰り返して言ふが、勿論、人々がそれについて考へてゐたことにはなく、それがその手に握つてゐた所のものにあつたからである。既に雷帝の時代に、舊大貴族の沒收された世襲地だけでは不足を告げ始めてゐた所

の、小地主たちの土地領有慾を満足させる爲めに正教々會からその土地を取上げようとする試みがなされた、そして既に雷帝は、彼に反抗することを敢へてしたモスクワの大主教フィリップを、最初大主教職から黜け、次いで彼が幽閉されてゐた所のその修道院に於て絞殺すべきことを命じた。

十六世紀末の「暗黒時代」の直ぐ前には、住民に對する教會の權力は著しく縮小されてゐた、そして當時の著述家なる信心深い人々は（當時文字を解する者は、主として、宗教家であつた、従つてすべての文字を解する人々は教會の書物によつて教育され文字を教へられたところの宗教家であつた）、「國民」が墮落したと言つて嘆いた。彼等の物語からして、國民の有産部分が墮落してゐたことを知ることが出来る、何故なら斷食に關する教會の規定を破り、美食をなし、爛醉し、高價なる衣服を著飾つて歩くなど、——すべてこれ等の罪は、勿論、たゞ富裕なる人々のみが犯し得たからである。教會の權力は、かくて、商業資本の力が増大するに連れて破壊されて行つた。

特に破壊的に商業貨幣經濟が古代ロシアの人々の禁慾主義に作用した。禁慾主義とは何か？ すべての者が、勿論、古代ロシアの多くの神の弟子達によつて行はれた種々の苦行の話を聞いて知つてゐる。これ等の神の弟子達は苦行者と呼ばれてゐた、何故なら「苦行」が彼等を神及び聖者達に

氣に入るところの人々に爲したからである。何が苦行であつたか？それは人間が食はないこと、直かに板敷の上に眠ること、終夜跪づいて祈禱をすること——要するに、自分をあらゆる困苦と缺乏とに渡すことであつた、そしてそれによつて、彼の信仰によれば、神の意に合してゐた。どうしてそれが神の意に合してゐたか？然り人間が自分から奪つた諸々の満足が、一種の或る不可解な方法で、彼がその恩恵を希つてゐた所の、靈魂にまで達したからである。人間が食を廢する、するとこの食されなかつた食物が、同様にして、或る不思議な方法で靈魂が食することの出來た所の、一種の犠牲となつた。當時の人間にかゝるはつきりした概念の無かつたことは自明である、繰り返して言ふが、當時の人間にとつて斷食及び節食の意義は正に、彼がそれによつて祈禱を捧げつゝある神或は聖者の意に合することにあつた、が彼によつて理解されなかつた意義は、正にかくの如き手段によつて人々が貯蓄する習慣を養成したことにある。普通に斷食の後には（農村に於ては今日も尙ほ行はれてゐるが）精進拂ひが行はれた、即ち胃腑が消化し得ないまで食ひ、意識を失ふまで飲んで差支ない狂暴な酒宴が始まるのである。これは今日に於てもすべての野蠻人の行ふところであつて、彼等は二三ヶ月斷食をなし、そしてその後で數日間一時にはち切れるほど食ひ食ふので

ある。如何なる經濟に於てかくの如き節制は必要になり得るか？勿論、まだ市場が存しない時代、人間が何處でも食糧を買ふことが出來ない時代、彼が、所謂桁丈に應じて足を伸ばし、新しい收穫まで彼のところにはどれだけ食糧が残つてゐるかを精密に勘定しなければならぬ時代、「自然經濟」の時代に於てである。即ち彼は、身を縮め、所謂四—六週間帯をきつく締めるのである、次ぎの一週間を型の如く飲み食ひするために。商業的、交換經濟が現はれて、足りないものを市場で買ふことが出来るやうになつた時、この習慣は、少くとも、富裕階級にとつてその意義を失ひ、そして今や住民の大衆が一年中斷食してゐる時、——吾々の農民はその當時は勿論その後も長い間型の如くには、たゞ稀なる祭日にのみ、食つてゐた、——富裕なる人々が益々加減に斷食に對し始めてゐることは、自然である。

暗黒時代、即ち十七世紀初頭の國民革命は、當時の敬神的な著述家達の意見によれば、正にこれ等の罪業に對して富者にやられた所の神罰であつた。されば秩序が暗黒時代の後再び回復され、即ち再び農奴制度が榮え、がそれと共に商業資本が榮えた時、初めの中上層階級は旺盛な信仰心を表示した、そして教會は會て見られなかつた權力と影響とを把持した。總主教は第二の皇帝であつ

た。初期ロマノフ家時代には、總主教が皇帝の父であつたことも亦與つて力があつた、しかしこれは第二世(アレクセイ・ミハイロキツチ)時代にも、總主教ニコンが皇帝の近親でなかつたに拘らず、續けられた、即ち父の影響であつたのではなく、教會の影響であつたのである。その際に教會の手に莫大な富が集中されたことは自明である。しかし幾許もなく新社會は自分の上に課した節制に困惑し始めた。禁慾的風潮が再び衰へ始めた。再び疎かに斷食が守られるやうになり、長たらしい教會の勤行が短縮された、——長く立ちつくすことも同様に一種の苦行であつたのである。が大事なことは、世俗の権力が、教會の獲得した勢力に苦痛を感じ始めたことである。

總主教ニコンは、教會の外観上の無限の勢力に期待して、世俗の権力との鬭争を開始すべく試みた。しかし直ぐと、この勢力が人々の想像してゐた所ではなく、彼の手に握られてゐた所の物質的資力にあつたことが明かにされた。教會は莫大な資金、官吏、軍隊、等、等を有するロマノフ家の國家に對して完全に無力であつた。教會人の中の何人もニコンを擁護しようとは考へもしなかつたし、皇帝の権力に對して眞の抵抗を示すことは何人にも爲し得なかつた。が皇帝は、自分の商業關係と資力とを利用して、苦もなく正教々會に於てニコンよりも先任であつた所の、東方

の、他の總主教を雇つて來た、宗教會議を召集して、そして教會自身の決議をもつて、皇帝に對してこの教會の獨立を維持しようとして敢へてした人間を罪した。次ぎの總主教達はその後最早皇帝の権力に反抗することを敢へてしなかつた、そして十八世紀の初めには總主教の稱號までが廢されてしまつた。その代りに宗教省、即ち大僧正の會議が創設された、それには世俗的権力からの監督官が置かれ、即ち官吏の一人なる聖宗務省長官が、事實上絶對的の権力をもつて正教々會の一切を處理した、知事を任命し更迭したと全く同様に、大僧正を更迭し任命した。この時以來正教々會の政治はまつたくロシア國家の、乃至、十八世紀の初葉から呼びなされるに至つた、ロシア帝國の、國務省の一つとなつてしまつた。

しかし若しも、斯くの如くして、上層階級が極めて無造作に、彼等が革命後に發現した所の心にもない敬神から、絶縁したとせば、商業資本によつて迫害され壓迫されつゝある社會層は、反對に、恰も彼等と運命を分つもののやうに、彼等と等しく世俗的な國家からの迫害を蒙つてゐた所の教會に、正に希望をかけてゐた。この教會が宗務省長官によつて一切を處理されてゐた所の、官許的なオフィシャルな教會でなかつたことは自明である。この官許的な教會は國民的教會を認めなかつ

た。彼女は國民的教會を分離派、舊教會の信仰に留まつてゐた人々を、古教信者、非國教徒と呼んだ。これ等の分離教徒から國家は一切の權利を剝奪し、分離派教誨師、即ちこの國民的教會の僧侶を幽閉、處刑、等、等に陥れた、しかしそれによつて國民的信仰を絶滅することは出来なかつた、それは數世紀に亙つて持續された。この信仰は、勿論、所謂すべての正教一般と同様に、暗い精神自存論であつた。分離教徒も亦同様に人間を圍繞せる、聖靈と惡靈、無數の靈魂の存在を信じてゐた、そしてあらゆる妖術、祈禱、儀式、その他の力によつてこれ等の靈魂を操縱する力を得んと努めてゐた、しかしこの教會が迫害され窮乏されつゝあつた事實が、民衆の間に尊敬と同情とを起させた、蓋しこの教會と民衆とは共に同一の勢力——新興商業ブルジョアジーとそれと緊密に結び付いてゐた所の地主階級との、犠牲であつたから。當時の商業資本との鬭争に於て分離教徒の團體そのものが直きにこの同じ商業資本を集中しつゝある一つの勢力となつた。生眞面目な、勤勉な、固く相互に依據し合つてゐた所の、團體的に進退する分離教徒は、この上なき貯蓄者であつた。一つの全體的なポウオルジエ及びボモリーエ、モギーレフスカヤ及びニジエゴロドスカヤ縣に結び付いてゐた所の、國民的教會の廣汎な地下的の關係は、經濟的關係にとつても亦卓越せる地盤であつ

た。近時分離派の宗教が國民に、一種の商人的信仰であるかの如く考へられるに至つたのもその爲めである。しかし十七世紀のその創始者達は商人ではなく、主として都市の住民の下層からの出身であつた、あらゆる種類の手工業者、鍛冶工、大工、等、等、同様にまた當時の智識階級、即ち主として下級の、官吏に非ざる僧侶出身の人々。個々の場合には、如何なる宗教運動にも常にさういふことがあるやうに、吾々はこれ等の民主的な要素の間に、有名な貴族モローゾワ夫人の如き、社會の上層からの出身者をも認める、それは全く二〇〇年を経て革命的社會主義者の間に吾々が將軍及び顧問官の令嬢達を見出すのと同様である。しかしいづれの場合に於ても、それは運動の民主的な性質を變ずるものではない。

とは言へ、分離派からは十七世紀の初頭に於てモスクワ國家の基礎を揺るがした如き種類の民主的な革命が生まれることは出来なかつた。

寧ろ人々が分離派に投じたのは、この革命の不成功の結果としての絶望からであつたと言ふことが出来る。分離派は先づ以てモスクワの世俗的國家を非議し、彼を反キリストの事業であると宣言した。しかし正に之れによつて彼は、この世俗的國家が彼にとつて打克ち難きものであるのを認め

たのである、で分離派はロマノフ家の當時の國家に對して、彼を攻撃するのではなくして、以前に農民が農奴制度から遁げ隠れたと全く同様に、彼から遁げ隠れることによつて、鬭争してゐたのである。成る程、個々の場合には分離教徒は、例へば國家が彼等の遁れ去つた場所にまで手を入れて、彼等に生きることを許さなかつた場合には、武器を取つた。多くの分離教徒がステパン・ラーヂンの軍隊にゐた、そしてラーヂンの軍隊の幾分はその後、皇帝の軍隊が武力に訴へなければならなかつた所の、北方に於ける分離派の最後の根據地、ソロウエツキ修道院の防禦に従事した。そして十八世紀のその後の國民運動に於ては、ブガチョーフの叛亂に至るまで、常に分離教徒が運動に對しては同情的な又政府に對しては反抗的な要素の役を務めてゐた。しかし形成された商業的官僚的國家の場所に何等か新らしきものを置くことは彼等には全く出来なかつた、且つ又そんなことは全く考へられてゐなかつた。それどころか、吾々が既に指摘した如く、その政治生活に於ては分離教徒の團體は益々この國家に適應しつゝあつた、そして同一の商業資本の「偉大なる蓄積者」となつてゐた。分離派は、かくて、精神的叛逆にとゞまらねばならなかつたし、又屢々それだけに止まつた、この場合、同様にローマ帝國の組織に適應するに至り、そして同様に國家そのものを變革

する如何なる企圖をも見せなかつた所の原始キリスト教を想起せしめる。

第七章 北方戦争とロシア帝國

バルチック海のための闘争はロマノフ家の國家にとつて大なる試練であつた。この闘争の結果に、この新らしい建築物が持ちこたへるか、それともそれは崩壊して、その破片を他の、より幸福なる競争者達がお互の間に分割して持ち去つてしまふかが懸かつてゐた。斯くの如き結末は在り得ることであつた。商業資本主義國家として、モスクワのそれよりも以前に發生した所の、ポーランドが、正にかくして十八世紀末葉に崩壊したのであり、そしてその破片を隣人達がお互の間に分割したのである。モスクワ國家はより幸福であつた。その存在が懸かつてゐた所の、その戦争が、結局その將來の發展の爲めに極めて好都合の條件を創造し、この時代を詠つた一人の詩人の表現を用ふるなら、槌が鋼を鍛へるやうに、彼を鍛へた。この戦争は偶然でもなければ、意外でもなかつた。モスクワ國家は十分に且つ慎重に、力を貯へ嚴に自分の意向を秘しかくしながら、その準備をしてゐた。ピョートル帝は、既に久しい以前にスウェーデンとの戦争を決意して、そして之が爲

めにバルチック海の爲めの闘争に於けるスウェーデンの他の二競争國である、ポーランド及びデンマークと同盟を締結して置きながら、同時にモスクワに在るスウェーデン公使にあらゆる好意を示し、彼のところに客に行き、彼の子供達を愛撫し、等、等してゐた、さうすることによつてスウェーデン人にはモスクワ皇帝よりも、より良き友人が存しないことを示さうと努めながら、すべてこれ等の警戒的手段に拘らず、完全に戦争の準備をすることにモスクワ國家は矢張り成功しなかつた。餘りにも課題が大き過ぎた。現代のスウェーデンは——小さな、非常に開けた、しかし軍事的には全く無力な、最近四十年間は極度にロシア帝國を恐れ、時としてその足もとにひれ伏すことさへあつた國に過ぎないけれど、——二〇〇年前のスウェーデンは、ヨーロッパの最強國ではないまでも、その一つであつた。十七世紀中に彼女は有名な三十年戦争を経験した、この戦争中スウェーデンの軍隊は當時のヨーロッパ諸國の軍隊中にあつて第一位を占めてゐた。それは最もよく武装され、最もよく訓練され組織された軍隊であつた。この、當時に於ける、巨人との闘争に入る準備として、モスクワ國家はあらゆる、當時に於ける最新の發明を採用した。暗黒時代の舊式な火繩銃が火打銃に替へられた。この銃の尖端には銃劍が挿込まれたが、恐らく、それは當時の主要なる軍事

的發明であつた。何故なら十七世紀の歩兵はまだ槍と鐵砲とを結び付けることを知らなかつたのだから。半數が火器——重い舊式の鐵砲で武装され、残りの半數が槍で武装されてゐた、従つて、軍隊が射撃をしてゐる場合、又は白兵戦になつた場合、いづれか一方の勢力は無駄に残つてゐた。銃劍は同時に射撃兵たることも、槍兵たることも得る可能を與へた、そして、かくして、歩兵の勢力を二倍にした。スウェーデンがまだこの發明を知らなかつた時に、モスクワに於てそれが利用されてゐたことを指摘せねばならぬ、ピョートルの兵士は劍付き鐵砲を持つてゐた。

それにも拘らず、年老いた頑強なるスウェーデンの軍隊は年若いモスクワの軍隊よりも強かつた、そして既にナルワ附近の最初の會戦に於て(一七〇〇年)ピョートルの軍隊は全滅させられた、彼の軍隊からは殆ど何物も残らなかつた。モスクワ國家は滅亡に瀕した、しかしモスクワにとつて幸福なことにはスウェーデンは彼女を自分の主要なる敵と考へてゐなかつた。西方で戦ふことに馴れてゐた所から、彼等は遙に大なる注意をデンマーク人とポーランド人と及び最後のものの同盟者であるサクソン人とに向けてゐた。モスクワの軍隊を撃ち破つた後、既に東方に於ては事件が終結したものと考へて、スウェーデン王カルル十二世は、モスクワに、立直つて、戦争の初期の教訓を

利用し、新しい軍隊を創造する爲めの幾年かを與へて、自分の軍隊と共にウイストラ沿岸に去つてしまつた。スウェーデン人がハツとして自分の誤りを知つた時には、既に遅かつた。モスクワの軍隊はその間に確實にフィンランド灣の沿岸を占領した、そこへピョートルは、彼によつて占領されたスウェーデンの要塞の壁の内へ、自分の本營を移した、それを彼は後にロシア國家の新しい首都にした。カルル十二世はポーランドからモスクワ國家の南の國境を越える道を自分の爲めに拓き開かなければならなかつた。此處で、成程、彼はウクライナのコサツク民團の幹部級に自分の同盟者を見出した、彼等は早くもモスクワの皇帝に失望して、確實にウクライナのポーランド・リトワ族(農民)を支配して、そしてこれを他からの制肘なしに擄取しようとしてゐた。しかしこの援助もスウェーデン軍を救はなかつた、そしてポルタワの役(一七〇九年)でスウェーデンの軍隊は、十年前にモスクワの軍隊がナルワ附近で全滅させられたのと全く同様に、全滅させられた。役割が全く顛倒した。防禦からモスクワは攻勢に轉じた。モスクワの國家はロマノフ家の治世に、バルチック沿岸のベテルブルグを首都として、ロシア帝國となつた。ポルタワ役の後尙ほ十二年間戦争は繼續した。スウェーデン人は尙ほ、何よりも先づ嘗てルーマニヤへの遠征當時(所謂ブルト遠

征、一七二一年にビョートルと彼の軍隊とを殆ど危地に陥れたところのトルコ人に自分の同盟者を見出した。しかし最後の總決算は益々ビョートルにとつて有利であつた。遂に、一七二二年に、ニスタツドの條約によつて、スウェーデンは自分の敗北を認めなければならなかつた、そしてモスクワ國家はバルチック海に臨める強國の一つとなつた。この時新ロシア帝國の手に落ちたのは、ベルブルグとクロンシュツトを有するニエワ河の河口だけでなく、又一列のバルチック海の港、ヴィボルグ、リガ、レーウエリもさうであつた。ヨーロッパとアジア、バルチック海と裏海とを結合する大水路の北端が、今や確實にモスクワの掌中に在つた。今やアストラハンだけがモスクワに屬してゐた所の、この水路の南端に於ける自分の状態を固めることだけが残つてゐた。ビョートルの最後の遠征はベルシヤに向けられた、そして彼の課題は、バルチック海の東方の一部を占領したと全く同様に確實に、裏海をロシアの商業資本の手に握ることであつた。ビョートルのこのベルシヤ遠征は、北方戦争よりも成功しなかつた、しかし矢張り、アジア大陸の商品、主として、絹織物(それは當時非常に高く評價されてゐた、何故なら或る旅行者の言葉によれば、絹製品の商賣がヨーロッパに於ける主要なる商業であつたからである)の通過——中繼——商業は、モスクワの手に残つ

た。

モスクワの商業資本は美事に試練に堪へた、そして今やスウェーデンをも、ポーランドをも恐れぬことが出来た。その後の十八世紀の戦争に於てこれ等の二つの、その前にロシアの軍隊が旗を卷いて遁げ、その一つは暫くモスクワを支配さへした所の、嘗て強大なりし競争國は、益々衰へて遂にスウェーデンは、吾々が上に述べた如く、帝政ロシアに對する限りない屈辱状態に陥り、そしてポーランドは簡単に、ロシア皇帝となつた所の、モスクワの皇帝の手に獲られた。

北方戦争中にロマノフ家によつて基礎を置かれた、商業的官僚的國家の全機構も亦完全に整備してゐる。吾々は簡単にここにその社會經濟的(經濟的及び社會的)基礎を省察することとする。吾々は商業資本が自から生産を組織しなかつたことを記憶してゐる。彼の手にあつたのはたゞ販賣と交換のすべての手段だけであつた。商業資本は獨立に小地主、農民及び手工業者によつて創造され、生産された所の、出来上がった商品の買占人であつた。これ等の細かい主人達はそれ自身買占人を必要としない、彼等は自からすべての商品を販賣し、そして一切の収入を自分の懐中に收めることが出来るであらうし、さうでなければ自分でそれを消費することが出来るであらう、で夫故に

彼等をして自分の生産物を提供せしむることが必要である、これが爲めに商業資本は商館の事務室の型に従つて美事に組織された官僚と、狂暴な、國民的に非ざる、同様に官僚的なる、秘密に行動してたゞ公然と裁判によつて罰しつゝある、強大なる中央権を創造するに至る。同時に彼は農村に於て農奴制度を支持する、地主達の力をかりて農民をして麥及びその他の原料を、地主の既の管をもつてそれを農民から吐出させつゝ、提供せしめながら。すべてこれは既に十七世紀のモスクワ國家に於て組成されてゐた、しかしすべてそれはまだ渾沌たる（非組織的な）状態にあつた。強大なる中央権は既に存在した、しかしそれはまだ、商業資本にとつて毫も必要のなかつた、舊い封建的な官廳に圍繞されてゐた。皇帝に並んで、人々が彼等の身分によつてそれに任命された所の、貴族會議があつた。貴族會議は、勿論、皇帝の權力に楯付く如きことをしなかつた。しかしこの軋みながら徐かに廻る餘計な車輪は、機械全體の歩みを困難にした。北方戦争時代に貴族會議は全く消滅してゐる、そしてその場所に、すこしもその身分には頓着せず、皇帝によつて任命された所の、従つて無條件に皇帝の命令を實行しなければならない所の、官吏によつて組織された元老院が現はれてゐる。元老院は——それは皇帝の番頭達の集りである。それと並んでその監督のもとに、偶

然に出來て一切の問題を處理しつゝ——裁判も、收税も、軍隊も、いづれも少しづつ——あつた所のモスクワの諸々の局の渾沌たる集積から、夫々の國務が嚴密に區分されるに至つた後年の國務省の前身である、諸々の省の整然たるシステムが現出してゐる。専ら裁判のための省——司法省、國家の收入のための省、支出のための省、監督のための省があつた。システム全體にとつて最も特色的なのは純經濟的な意味の省が數多く存在することである。鑛山業を監督するための省、工場を監督するための省、商業を經營指導する爲めの省が、それ／＼設立されてゐた。

全く同様にすべての爾餘の國政も亦組織づけられてゐた。都市は悉くその地の商人團の處理に委ねられた。最初純階級的な商人的な全ロシアの官廳が設立されさへした——全ロシアから租税を徵收しつゝある商人達の中央省に類するものである。しかし戦争時代にこの機關が不適當であることが解つた、それでそれに相當する省に變更された。商人團の手にはたゞ個々の都市の政治だけが残された。農村について言へば、それは全く地主達の處理にまかされた、その結果は彼等の手に農村行政の最も主要なる機能が移つてゐる。彼等はすべての農民を裁判して懲役をさへ命じ、北方戦争時代に、十六世紀のモスクワの皇帝達からロマノフ家の國家に受繼がれた所の、各種の租税の代

りに採用された新しい人頭税を徴収する。人頭税はすべての男子が例外なしに又年齢を問はず納めた。乳呑子も老人も等しくそれを課せられた。それは、かくして、それ或は他の歳入を課するの試みではなかつた。それは單に國民から最も簡単な容易な方法で金を受取る手段であつた、——男性の人口を數へ、國家が受取らねばならなかつた所の、主として、軍隊を維持する爲めの金額を彼等の間に割付ける、——人頭税はこの目的のために最初設定されたのである、——それだけである。間接税について言へば、その中の主要なる飲料水税、即ち多大の収益を與へてゐた所の、ウオツトカ販賣の權利に對する税に關しては十八世紀中に、益々多く請負制度が適用された。大商人達が國家に一定の金額を支拂つて、そしてその代償としてそれ或は他の縣に於てウオツトカを販賣する權利を獲た。如何に彼等がそれを販賣し、如何に國民を酔はせ、如何に彼等が眞の麥より釀造せる酒の代りに粗惡な酒を販賣しつゝあるか、それには國家は殆ど注意を拂はなかつた、所要のものを受取りさへすればいゝのだつた。吾々が見る通り、租税徴収のこの領域に於ても、ピョートル及び彼の後繼者達の國家は明瞭に、商業資本の國家としての、自分の基礎的本質を反映してゐるのである。

第二部

第八章 工業資本主義

商業資本は生産を組織しなかつた、彼は既成品を受取つた。農夫が麥を蒔き、收穫し、漁夫が魚を捕へ、獵師が獸を殺し、靴工が長靴を縫ひ、農村の婦女子が布を織つた、知つてゐた通りに、又父や祖父、母や祖母から教へられた通りに。商人が來てそして取つて行つた、その後彼は時々、小生産者をより確實に拘束する爲めに、原料を與へ始めた。皮革を負債で受取つた後、例へば、靴工は、最早何人にも製作された長靴を、彼が負債を負へる商人以外には、賣ることを敢へてしなかつた。このめ謂「家内生産組織」は、本質に於て、十六—十七世紀の地主がその助けをかりて勞働力を自分のた所に保證してゐたその組織と、あまり變はりがなかつた。

この簡單な方法の助けをかりて巨大なる分量の商品を掻き集め、又市場へ運び出す事が出來た。十

八世紀末にはロシアから外國へだけ一年に一千四百五十萬アルシンのリンネルが輸出された。しかし吾々の農村のリンネルは、勿論、外國へ輸出されたばかりではなかつた、ロシア自身の内部にそれは數倍多く賣捌かれた。トウエールスカヤ縣だけでも當時一年に一千萬アルシン以上を賣上げた。十九世紀末にその同じ縣が一千六百萬アルシン以下のリンネルを賣捌いたのを見れば、百年間にリンネルの生産がトウエールスカヤの人々によつて一倍半と少し増加されたこととなる、然るにトウエールスカヤ縣の人口はその當時から見れば二倍半に増加した。今より百五十年前トウエールスカヤの各一人が、吾々の時代に於けるよりも、より多くのリンネルを市場の爲めに製してゐた事となる。そして莫大な財産がこの方法によつて持へられた、リンネルの「工場主」ゴンチャロフは、その「工場」は、當時の「工場主」の大多數のそれがさうであつたやうに、主として、農民・家内工業者に原料を渡して、そして彼等から製品を受取つた所の、一列の事務室から成つてゐたが、六百萬ルーブルの財産をつくつた、それは一九一四年の金ルーブルをもつてすれば凡そ一千二百萬ルーブルになるであらうし、今日の紙幣をもつてすれば數十億に相當するであらう。

しかしすべてそれにも拘らずこの組織には又それだけの反面もあつた。獨立の小規模生産は甚だしく非流動的である。人々が祖父及び祖々父の習慣に従つて、機械なしで、働く時、彼等は同一の商品の同一分量を生産する。が市場は氣まぐれである、今日彼にはこれだけの商品が必要である、が明日

若しくは來年は——それよりも二倍必要である。流行はもつと氣まぐれである、既にピョートル時代に吾々の家内工業者達は、彼等があまりにも狭い布を織つたことに對して御上から罰を受ける迄の、あらゆる不幸と不愉快とに渡された、西ヨーロッパに於ては廣幅ものが要求された。しかし彼等のところには何處にも廣い箆臺を置く所がなかつた。すでにピョートル時代（十八世紀の初め）に、この事實が、一つの構内に集合された數百の労働者を有する、あらゆる型のリンネルの任意の分量を織ることの出來た、リンネル製造所を設ける試みに導いた。それはまだ工場と呼ぶことは出來なかつた、何故ならこれ等の構内に於ては、機械をつかつてではなく、手で、働いてゐたから、だがそれは既に大規模生産であつた。交換の集中について生産手段の集中も始まつた。家内工業者は自分の家にあつて自分の道具で働いてゐた、製造所の労働者は他人の構内で彼の主人に屬してゐる道具をつかつて働いた。家内工業者は獨立の小規模生産者であつた、が製造所の労働者の中には既に現代のプロレタリアの萌芽があつた。

今のところまだ萌芽に過ぎぬ。何となれば現代の無産者は——自由なる雇傭によつて工場主のところでは働いてゐる、自由なる人間である、が十八世紀のロシアの製造所の職工達は自由を奪はれた人々であつた、製造所の主人の農奴か、御上から主人の管理にまかされた徒刑囚、兵士、等、等か。工業資本主義の爲めにも最初のロシアの製作所にはまだ多くのものが足らなかつた。何よりも先づ、吾々